

桜 井 市

平成 15年度国庫補助による 発掘調査報告書

東新堂遺跡第9次
能登遺跡第2次
大藤原京関連遺跡第42次
纏向遺跡第135次
纏向遺跡第136次
纏向遺跡第137次
纏向遺跡第138次
矢塚古墳（測量調査）
纏向遺跡第46次

2004. 3. 31

桜井市教育委員会

桜井市

平成15年度国庫補助による
発掘調査報告書

2004. 3. 31

桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、纏向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この地を生きる多くの人々に限りない豊かさを与えて続けています。

そのようなこの地において過去の営みを示すものとして、大和川の北側は芝遺跡、纏向遺跡や箸墓古墳、纏向石塚古墳をはじめとする纏向古墳群、南ではメスリ山古墳、茶白山古墳、上之宮遺跡、大福遺跡、吉備池廃寺など、全国的にも貴重な文化遺産が多く存在しています。これらの遺跡はこれまでの数々の発掘調査の積み重ねによって日本の歴史を塗り替える多くの事実を私たちに提供してくれています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡保存の調査・保存に力を入れており、本書には平成15年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち東新堂遺跡、能登遺跡、大藤原京関連遺跡、纏向遺跡などの調査成果をおさめております。本報告によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事していただいた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力していただいた整理員の方々に深く御礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます

平成15年3月31日

桜井市教育委員会

教育長 石井和典

例 言

1. 本書は平成15年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の緊急調査および範囲確認調査である。纏向遺跡第135～138次調査（天理教鍛冶平分教会、牧野吉秀氏、山中雅人氏、隈田京始氏）、東新堂遺跡第9次調査（八島一子氏）、能登遺跡第2次調査（高松左斗志氏）、大藤原京関連遺跡第42次調査（佐藤千恵美氏）、矢塚古墳測量調査、大藤原京関連遺跡第43次調査（桜井市農林課）、磐余遺跡群第6次調査（桜井市農林課）を行っており、本書では大藤原京関連遺跡第43次遺跡（農道工事建設事業に伴う）、磐余遺跡群第6次調査（圃場整備事業に伴う）を除く8調査の成果を報告している。なお、今回行った調査ではないが、桜井市教育委員会が昭和61年度に実施した纏向遺跡第46次調査（杉本英雄）もあわせて掲載している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会事務局
教育長 石井和典、事務局長 細田勝、事務局次長 池田正輔、中川行央
文化財課長 清水真一、文化財係長 杉本好成、文化財係主査 堀尾えい
技師 橋本輝彦、松宮昌樹、技師補 福辻淳、丹羽恵二
臨時職員 木場佳子、清水哲
3. 調査担当者：橋本輝彦、福辻淳、丹羽恵二、木場佳子、清水哲
4. 調査補助員：安井隆浩（新潟大学大学院OB）、堂浦千景、萩原良子（早稲田大学OG）、福西貴彦・西本和哉・早川千尋・小林透（奈良大学）、辻利耶子（神戸女子大学）、河野文英（天理大学）、沼田英年（大阪大学）
5. 調査作業員：井上久幹、上田猛、岡田秀治、栢本武志、川島利市郎、小南一也、榊原伊市郎、佐野圭造、澤田己喜雄、嶋岡辰雄、高奥恵子、高奥久子、田仲啓治、辻カズ子、中西智子、宮久保吉暉、宮前秀年、山口定男、山本二照
6. 整理作業及び報告書作成：上記調査補助員及び拵田巳容子、嶋岡由美、橋本真理、奥田佳代子、長野千秋、後藤浩之（奈良大学大学院）
7. 執筆・編集者：本書の執筆は各調査担当者がおこない、文責は文末に明記している。また、付録2では奥田高氏（橿原考古学研究所）より玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。なお本書の編集は丹羽が行った。
8. 本書における遺構平面図等の座標は、国土座標を使用している。平成14年4月より世界測地系が新しく採用された。今年度の調査では座標測量を実施したものについては世界測地系と従来の旧日本測地系の双方を併用しており、実測図には、とくにことわりのない場合は、世界測地形をX＝-○○○、旧日本測地系を(旧X＝-○○○)と表記している。なおレベル高はすべて海拔高(T.P)を表す。方位は第2章第1～3節は磁北を、それ以外は座標北を表している。
9. 本書記載の土器実測図の断面は、土師器・土師質系の土器や土製品-白、須恵器や須恵質のもの-黒、瓦器-網目とした。
10. 図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に対応している。
11. 出土遺物および調査記録については、桜井市教育委員会が保管している。活用されたい。

目 次

序

例言

目次

第1章 平成15年度の国庫補助による調査	1
第2章 発掘調査の成果	
第1節 東新堂遺跡第9次発掘調査報告	3
第2節 能登遺跡第2次発掘調査報告	7
第3節 大藤原京関連遺跡第42次発掘調査報告	11
第4節 纏向遺跡第135次発掘調査報告	15
第5節 纏向遺跡第136次発掘調査報告	38
第6節 纏向遺跡第137次発掘調査報告	51
第7節 纏向遺跡第138次発掘調査報告	69
第3章 矢塚古墳の測量調査	90
第4章 まとめ	94
付載1 纏向遺跡第46次発掘調査報告	96
付載2 平塚古墳出土埴輪の表面にみられる砂礫の埴輪	102

表・挿図目次

表 1	平成15年度国庫補助事業による調査一覧	2
表 2	纏向遺跡第135次出土土器一覧表	35
表 3	纏向遺跡第136次出土土器一覧表	49
表 4	纏向遺跡第137次出土土器一覧表	67
表 5	纏向遺跡第138次出土遺構一覧表	86
表 6	纏向遺跡第138次出土土器一覧表	89
表 7	平塚古墳出土埴輪の表面にみられる砂礫	101
図 1	平成15年度国庫補助事業による調査位置図 (S=1/50,000)	1
図 2	東新堂遺跡第9次調査地位位置図 (S=1/4,000)	3
図 3	上層遺構平面・断面図 (S=1/100)	4
図 4	下層遺構平面図 (S=1/100)	5
図 5	東新堂遺跡第9次調査出土遺物 (S=1/3・1/2)	6
図 6	能登遺跡第2次調査地位位置図 (S=1/2,500)	7
図 7	調査区平面・断面図 (S=1/80)	8
図 8	能登遺跡第2次調査出土遺物 (S=1/4・1/2)	9
図 9	大藤原京関連遺跡第42次調査地位位置図 (S=1/2,500)	11
図 10	調査区平面・断面図 (S=1/100)	12
図 11	大藤原京関連遺跡第42次調査出土土器 (S=1/4)	13
図 12	平塚古墳墳丘見取図	15
図 13	トレンチ配置図 (S=1/400)	16
図 14	第2トレンチ平面・断面図 (S=1/40)	17
図 15	第3トレンチ平面・断面図 (S=1/40)	18
図 16	溝1出土遺物① (S=1/3)	21
図 17	溝1出土遺物② (S=1/3)	22
図 18	溝1出土遺物③ (S=1/3)	23
図 19	遺物包含層出土土器① (S=1/3)	25
図 20	遺物包含層出土土器② (S=1/3)	26
図 21	3tr遺物包含層出土土器 (S=1/2)	28
図 22	石組裏込め出土土器 (S=1/3)	29
図 23	3tr石組裏込め出土土製品 (S=1/2)	30
図 24	平塚古墳関連遺物① (S=1/3)	31
図 25	平塚古墳関連遺物② (S=1/3)	32
図 26	平成15年度纏向遺跡調査地位位置図 (S=1/2,500)	37
図 27	トレンチ平面・断面図 (S=1/100)	39
図 28	砂礫層1出土土器① (S=1/3)	41
図 29	砂礫層1出土土器② (S=1/3)	42

図30	砂礫層2出土土器 (S=1/3).....	44
図31	黒色粘質土層出土土器 (S=1/3).....	45
図32	南側河川堆積出土土器 (S=1/3).....	47
図33	砂礫層1出土土製品 (S=1/3).....	47
図34	南側河川堆積出土木製品① (S=1/3).....	48
図35	南側河川堆積出土木製品② (S=1/3).....	48
図36	上層遺構平面図 (S=1/100).....	52
図37	下層遺構平面図 (S=1/120).....	53
図38	調査区断面図 (S=1/100).....	54
図39	1号墳周溝土器出土状況 (S=1/40).....	55
図40	竪穴住居 (SB3070) 平面・断面図 (S=1/60).....	56
図41	竪穴住居 (SB3070) 土器出土状況 (S=1/40).....	57
図42	方形土坑 (SX3002・3055) 平面図 (S=1/60).....	57
図43	1号墳出土土器 (S=1/3).....	58
図44	竪穴住居 (SB3070) 出土土器① (S=1/3).....	60
図45	竪穴住居 (SB3070) 出土土器② (S=1/3).....	61
図46	竪穴住居 (SB3070) 出土土器③ (S=1/3).....	62
図47	竪穴住居 (SB3070) 出土土器④及び住居内ビット出土土器 (S=1/3).....	63
図48	遺構出土土器 (S=1/3).....	64
図49	包含層出土土器 (S=1/3).....	65
図50	包含層出土鉄器 (S=1/2).....	66
図51	縦向遺跡第138次調査区平面図 (S=1/100).....	72
図52	調査区北壁・溝・土坑断面図 (S=1/80).....	73
図53	溝3・竪穴住居1平面・断面図 (S=1/80).....	74
図54	溝5・鉢出土状況 (S=1/40).....	76
図55	土坑8土器出土状況 (S=1/40).....	77
図56	土坑3出土土器 (S=1/3).....	79
図57	土坑8出土土器 (S=1/3).....	80
図58	竪穴住居1出土土器 (S=1/3).....	80
図59	溝3出土土器 (S=1/3).....	81
図60	溝4・5出土土器 (S=1/3).....	83
図61	溝1・2出土土器 (S=1/3).....	83
図62	出土鉄器 (S=1/2).....	84
図63	矢塚古墳古絵図.....	90
図64	矢塚古墳調査地位置図 (1/1,600).....	91
図65	矢塚古墳墳丘測量図 (1/1,000).....	92
図66	矢塚古墳墳丘復元案 (1/1,600).....	93
図67	調査区平面・断面図 (S=1/80).....	95
図68	縦向遺跡第46次調査出土土器① (S=1/4).....	97
図69	縦向遺跡第46次調査出土土器② (S=1/4).....	98
付図	矢塚古墳 (S=1/500)	

図 版 目 次

- 図版1 東新堂遺跡第9次調査(1)
調査区全景(西より)
柱穴SP01~03(南より)
- 図版2 東新堂遺跡第9次調査(2)
下層ビット群(南より)
出土遺物
- 図版3 能登遺跡第2次調査(1)
調査区全景(北より)
溝SD02(東より)
- 図版4 能登遺跡第2次調査(2)
土層堆積状況(北西より)
出土遺物
- 図版5 大藤原京関連遺跡第42次調査
調査区全景(東より)
土層堆積状況(北東より)
- 図版6 纏向遺跡第135次調査(1)
上空から見た平塚古墳(上が北、下端駐車場が調査地)
第2トレンチ全景(南より)
第3トレンチ全景(南より)
- 図版7 纏向遺跡第135次調査(2)
溝1遺物出土状況(北東より)
溝1出土遺物①
- 図版8 纏向遺跡第135次調査(3)
溝1出土遺物②
- 図版9 纏向遺跡第135次調査(4)
溝1出土遺物③
- 図版10 纏向遺跡第135次調査(5)
溝1出土遺物④・包含層・石組裏込め出土遺物
- 図版11 纏向遺跡第135次調査(6)
平塚古墳埴輪①
- 図版12 纏向遺跡第135次調査(7)
平塚古墳埴輪②
平塚古墳埴輪③
- 図版13 纏向遺跡第136次調査(1)
トレンチ全景(南より)
トレンチ西壁(南東より)
- 図版14 纏向遺跡第136次調査(2)
トレンチ東壁(南西より)
木製蓋出土状況(北東より)
- 図版15 纏向遺跡第136次調査(3)
出土遺物①
- 図版16 纏向遺跡第136次調査(4)
出土遺物②
- 図版17 纏向遺跡第136次調査(5)
出土遺物③
- 図版18 纏向遺跡第137次調査(1)
上層遺構(北より)
調査区南壁(北東より)
- 図版19 纏向遺跡第137次調査(2)
池田1号墳検出状況(北より)
池田1号墳全景(北東より)
- 図版20 纏向遺跡第137次調査(3)
下層遺構(北より)
竪穴住居SB3070(北東より)
- 図版21 纏向遺跡第137次調査(4)
竪穴住居SB3070遺物出土状況(北西より)
方形土坑SX3055(西南より)
- 図版22 纏向遺跡第137次調査(5)
池田1号墳出土土器
竪穴住居SB3070出土土器①
- 図版23 纏向遺跡第137次調査(6)
竪穴住居SB3070出土土器②

- 図版24 纏向遺跡第137次調査（7）
堅穴住居SB3070出土③（用途不明土製品）
不明鉄製品（包含層出土）
堅穴住居SB3070出土土器④
- 図版25 纏向遺跡第137次調査（8）
堅穴住居SB3070出土土器⑤
堅穴住居SB3070出土土器⑥
- 図版26 纏向遺跡第137次調査（9）
下層遺構出土土器
包含層出土土器
- 図版27 纏向遺跡第138次調査（1）
調査区全景①（素掘溝完掘状況 南より）
調査区全景②（遺構検出状況 南より）
- 図版28 纏向遺跡第138次調査（2）
調査区全景③（遺構完掘状況 南より）
調査区全景④（遺構完掘状況近景 南より）
- 図版29 纏向遺跡第138次調査（3）
溝3・堅穴住居1検出状況（南西より）
溝3土器出土状況（南東より）
- 図版30 纏向遺跡第138次調査（4）
堅穴住居1堆積状況（南西より）
堅穴住居1完掘状況（南より）
- 図版31 纏向遺跡第138次調査（5）
溝1・2堆積状況（南西より）
溝5鋤出土状況（北より）
- 図版32 纏向遺跡第138次調査（6）
土坑3堆積状況（南より）
土坑8土器出土状況（南西より）
- 図版33 纏向遺跡第138次調査（7）
土坑3出土遺物
- 図版34 纏向遺跡第138次調査（8）
土坑8、堅穴住居1、溝1～3出土遺物
- 図版35 纏向遺跡第138次調査（9）
出土鉄器
- 作業風景（後方の森は渋谷向山古墳）
- 図版36 矢塚古墳測量調査（1）
矢塚古墳全景（左上が北）
矢塚古墳全景（西南より）
- 図版37 矢塚古墳測量調査（2）
矢塚古墳全景（南より）
矢塚古墳全景（北西より）
- 図版38 纏向遺跡第46次調査（1）
土器出土状況（西より）
遺構完掘状況（東より）
- 図版39 纏向遺跡第46次調査（2）
溝SD01土器出土状況
出土土器①
- 図版40 纏向遺跡第46次調査（3）
出土土器②
- 図版41 纏向遺跡第46次調査（4）
出土土器③

第1章 平成15年度の国庫補助による調査

1. はじめに

平成15年度に実施した国庫補助による調査は発掘調査9件と矢塚古墳の墳丘測量調査である(表1)。発掘調査のうち、能登遺跡第2次調査、大藤原京関連遺跡第42次調査、纏向遺跡第137・138次調査は個人住宅建設に伴う調査であり、纏向遺跡第135次は青空駐車場、纏向遺跡第136次農業用倉庫建築に伴う調査である。また、磐余遺跡群第6次調査は圃場整備に伴う調査、大藤原京関連遺跡第43次調査は農道建設に伴う調査であった。本書では、磐余遺跡群第6次調査、大藤原京関連遺跡第43次調査を除いた7件の発掘調査について報告している。また次年度以降、纏向遺跡の範囲確認調査を行うにあたって、矢塚古墳の測量調査を実施した。矢塚古墳は、発生期の古墳として早くから注目されていたものの、昭和46年度の測量調査や周溝の部分的な調査以後は、全くの手付かずの状態であり、実態については不明な点が多い。そこで今年度は墳丘の範囲や構造についての基礎的な資料を得るために測量調査を実施し、その成果も合わせて報告する。

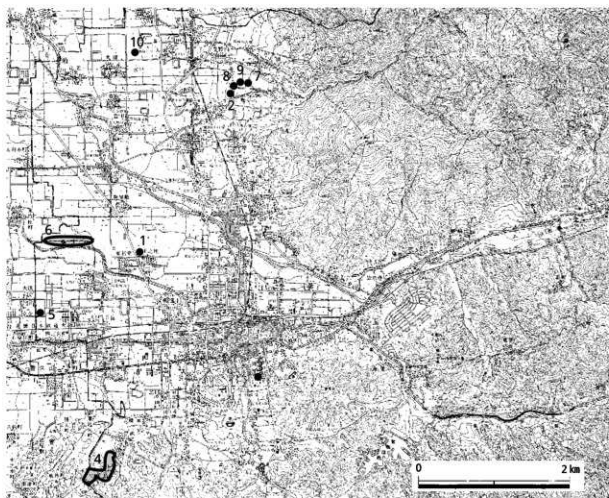


図1 平成15年度国庫補助事業による調査位置図 (S=1/50,000)

表1 平成15年度国庫補助事業による調査一覧

	調査名	調査地	調査期間	調査面積	主な遺構・遺物	担当
1	東新堂遺跡第9次	東新堂349-1350-1351-3	2003/5/7~5/23	90㎡	柱穴	丹羽
2	纏向遺跡第135次	箸中540-1、13	2003/8/1~8/20	30㎡	溝	福辻
3	磐余遺跡群第6次	池之内350~1297	2003/8/4~2004/3/22	2256㎡	古墳、池状堆積	松宮
4	能登遺跡第2次	河西24	2003/8/6~8/26	36㎡	溝、柱穴	木場
5	大藤原京関連遺跡第42次	西之宮261-3	2003/9/1~9/5	27㎡		清水(暫)
6	大藤原京関連遺跡第43次	大福1346-1~1477-1 東新堂559-1~567-2	2003/11/4~12/26	240㎡	東五坊坊間路側溝、井戸	丹羽
7	纏向遺跡第136次	箸中506-1	2004/2/5~3/9	65㎡	旧河道	福辻
8	纏向遺跡第137次	箸中515-1	2004/2/6~3/31	188.5㎡	竪穴住居、古墳	丹羽
9	纏向遺跡第138次	箸中515-3	2004/3/8~3/31	216.5㎡	土坑、竪穴住居、古墳	福辻・清水(暫)
10	矢塚古墳	東田126-2など	2004/3/12~3/29	-	-	橋本



纏向遺跡遠景

第2章 発掘調査の成果

第1節 東新堂遺跡第9次発掘調査報告

1. はじめに

東新堂遺跡第9次調査は、店舗建設に伴い平成15年5月7日～23日まで実施した。東新堂遺跡は、昭和15年に厚芝保一氏が発表した「大福村新屋敷付近の弥生式遺跡」で弥生時代前期の遺跡として周知された場所である。しかしながら、近年の調査をみると、第2次調査（平成8年度）は縄文時代の流路、第8次調査（平成13年度）は中世の木棺墓など、縄文時代や中世の遺構が確認されている。また、この調査地は大藤原京の範囲にも含まれ、条坊復原案では敷地の西端が東九坊大路の推定位置にあたり、それらの遺構が検出されることが期待された。

調査区は東西20m南北5mに設定したが、西側に水道管が通っていたため17m×5mに縮小する結果となった。また、調査区の東に擁壁があるためその下部が調査できずトレンチが分割される形になった。便宜的に擁壁を境にしてそれぞれを東・西トレンチと呼ぶことにする。最終的な調査面積は約85㎡である。

2. 調査の方法と層位

調査地は周囲の状況から、旧宅地造成に伴う盛土が1m以上あることが想定された。まず、バックホーによりそれらを除去したのち、幅約50cmの犬走りを設定し、再びバックホーにより現代耕作土を除去した。それ以下は人力により遺構検出、掘削を行った。

造成盛土以下は、青灰色砂質土（図3-3層）～黄褐色砂質土（7～12層）までは現代耕作土に関連する堆積で、その下は須恵器、瓦器などを含む中世（13世紀代か）の包含層である青灰色粘質土

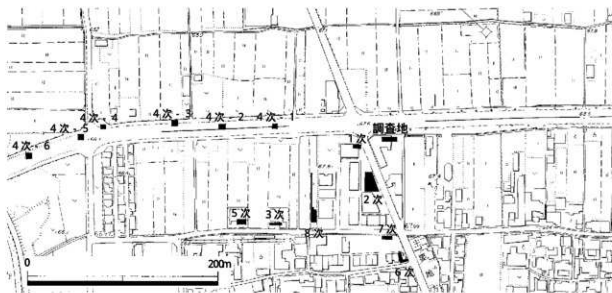


図2 東新堂遺跡第9次調査地位置図 (S=1/4000)

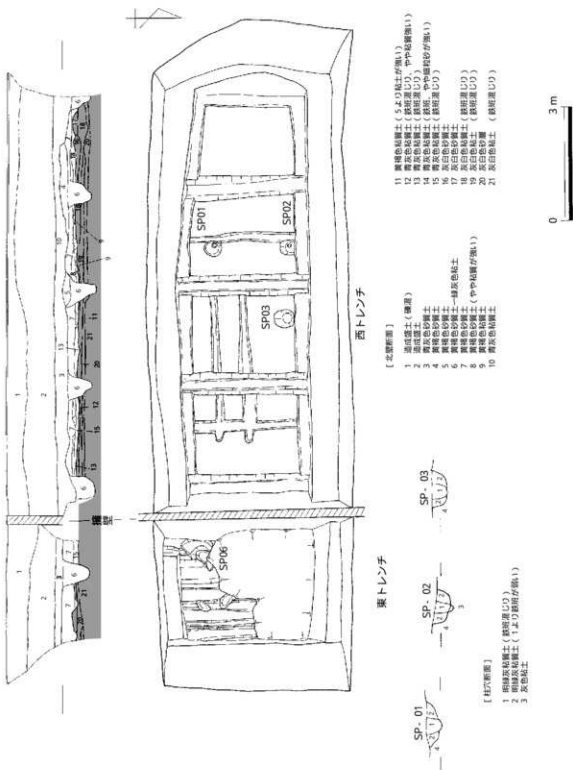


図3 上層遺構平面・断面図 (S=1/100)

(鉄班を含む 13～15層)が堆積する。それ以下は河川などによる自然堆積層で灰白色砂質土(16・17・19層)と灰白色粘土(20・21層)が互層に堆積し、16層以下は遺物をまったく含まない無遺物層になる。

3. 検出遺構

遺構検出は中世の包含層である青灰色粘質土の上面及び灰白色砂質土層(地山)の上面の二面にわたって行った。なお、トレンチ内を南北に走る、幅70～90cm、深さ50～70cmの規模で等間隔にみられる6条の溝は現代耕作土から切り込んでおり、現代耕作に伴う暗渠排水だと思われる。その他の遺構については検出面ごとに概要を述べる。

(1) 青灰色粘質土上面(図3)

素掘溝 東トレンチでは幅30～40cm、深さ10cmで南北1条、東西2条、西トレンチでは南北1条、検出できた。埋土は、明黄褐色砂質土で瓦器皿が出土している。

柱穴SP01～03 西トレンチ中央付近で、柱穴を3基検出している。直径40～50cmの掘方をもち、

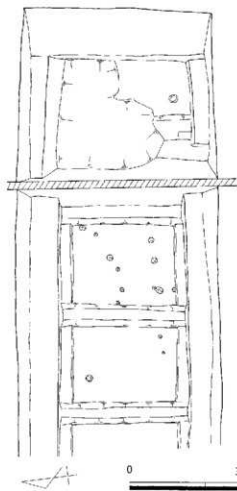


図4 下層遺構平面図(S=1/100)

柱心は直径15cm程度を測る。埋土は明緑灰粘質土(鉄班混じり)である。これら三つの柱穴は直角に並んでおり、掘立柱建物もしくは柵列の柱穴になると考えられるが、その続きは確認できなかった。

柱穴SP06 東トレンチの西端で検出した。埋土は暗緑灰粘質土である。規模は東側を後世のピットや暗渠に切れ、西側は擁壁の真下のため確認できないが、直径15cm程の柱心があるので柱穴と判断した。掘方から心穴に沿うように幅30cmの炭化した板材が検出された。長さはその端が擁壁の下に続くため不明である。その用途は不明であるが柱材の添え木の可能性がある。

(2) 灰白色砂質土上面(図4)

西トレンチの東より直径10～20cm前後、深さ10cm前後のピットが14個検出された。いずれも掘方がみられず、小規模なので杭跡の様なものと考えられる。南側のものは東西に直線的に並んでいるようにみえるが、調査地内で全容がおえず詳細は不明である。

4. 出土遺物 (図5)

遺物は破片数にして約160点近くの遺物が出土したが、細片のものが多く、図化できたのは7点である。(1)は暗渠排水埋土から出土した土師器皿で、(2・3)は上層の素掘溝埋土から出土した瓦器皿と瓦器塊口縁である。瓦器皿は摩滅しているため内外面の調整は確認できない。瓦器塊は小片のため口径を復元できないが内外面とも約1mm幅のヘラミガキが密にみられる。(4~7)は、包含層から出土している。(4)は瓦器塊の高台、(5・6)は須恵器の蓋と坏の高台であり藤原京期のものと思われる。(7)の石鏃は縄文時代に属するものと思われる、二次的に混入したものであろう。

他に遺物は細片ながら縄文土器などもみられるが大半は瓦器、土師器などがおおく13世紀代と考えられるものが中心である。

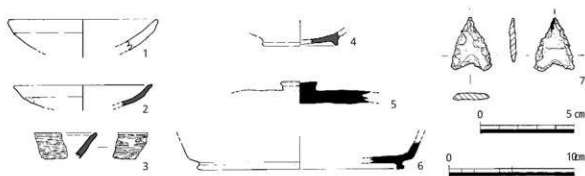


図5 東新堂遺跡第9次調査出土遺物 (S=1/3・1/2)

5. まとめ

今回の調査では、素掘溝、柱穴やピット群などを検出することができた。遺構に直接伴う遺物が少なく、詳細な時期は不明であるが、遺物は13世紀代のものが多いので遺構もその時期に属するものと推測される。調査地周辺ではこの時期の遺構が多く中世集落の実態を解明する上での資料が蓄積されつつある。なお、当初期待していた大藤原京の条坊遺構や縄文時代の流路を検出することはできなかった。それは条坊推定地の西側に水道管が埋設されているため十分な調査を行うことができなかったことと、中世以降の恒常的な水田耕作などによって削平されてしまった可能性があるためと考えられる。しかしながら、少量ながらも縄文時代や藤原京期の遺物が出土しているのは、調査地周辺にその時期の遺跡の存在を物語るものである。今後の調査に期待したい。(丹羽)

【註記】

- 1) 厚芝保一 1940「大福新屋敷付近の弥生式遺跡」『磯城』3巻2号
- 2) 小畑佳子 2002「東新堂遺跡第8次発掘調査報告」『桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告』

第2節 能登遺跡第2次発掘調査報告

1. はじめに

桜井市大字河西24番地において、平成15年8月6日～8月26日にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査に関する報告である。調査地は桜井駅の南東約1km、桜井市立図書館の西に隣接する畑地に位置している。能登遺跡では市立図書館建設に先立って第1次調査が行われ、その結果古墳時代前期の独立棟持柱建物や竪穴住居、飛鳥時代の大溝や四面庇付建物・竪穴住居群などの遺構が検出されており、コンテナケース200箱以上もの遺物が出土している。中でも飛鳥時代の区画溝SD01からだけで150箱を上回る膨大な量の土器が出土しており、能登遺跡周辺での活発な動向が看取される。

当調査は個人住宅の建築工事に先立つもので、建物基礎建設予定部分を外した敷地南半に南北8m×幅4.5m、面積36㎡の調査区を設定し掘削を開始した。表土など近・現代耕作土については重機を用いて掘削を行い、以下については人力による手掘りで調査を進めた。

2. 基本層序

調査区内での基本層序は概ね4層で、上から1. 暗灰色土(図7 第1層)、2. 暗灰色土(鉄斑を含む 第3層)、3. 淡橙灰色粘質土(マンガンを多く含む 第6層)、4. 地山(第11層以下の縦線部分)がほぼ水平に堆積している。上記1・2は現代の耕作土で、地表面からの厚さは30～40cmを測る。3は遺構検出面直上に堆積する遺物包含層で、須恵器や瓦器など古墳時代後期～中世までの遺物を内包している。厚さは10cm。4のうち、第11～13層は遺構面を形成している堆積層である。調査区東側に展開する段丘からの流出土と考えられるもので、東半を中心に粗い礫が認められるものの、西に向かうにつれその含有量が少なくなり砂粒も細くなる。

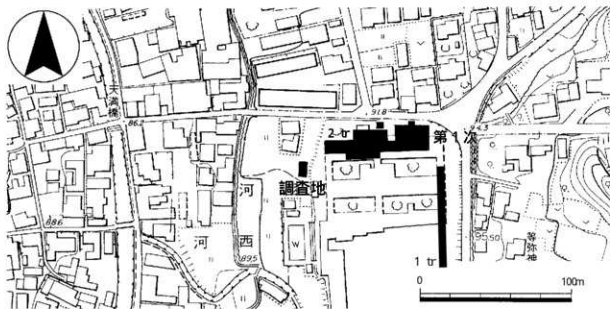


図6 能登遺跡第2次調査地位置図(S=1/2,500)

3. 検出遺構 (図7)

地山の上面を検出面として溝2条、柱穴2基が確認された。以下呼称番号順に各遺構の概要を説明することとしたい。

溝SD 02

調査区中央で検出された東西方向の溝で、規模は幅80cm、深さ60cmを測る。埋土は調査区東壁の観察では1. 暗灰茶色粘質土 (礫混り)、2. 暗灰茶色粘質土 (拳～人頭大の石含み、1より暗い)、3. 暗灰褐色粘質土 (礫混り) の3層が認められ、西壁では2・3のみが堆積する。埋土からは弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする時期の土器片が出土したことから、古墳時代前期の遺構であると考えられる。

柱穴SP 03

調査区北端に位置するもので、掘形の平面は楕円形を呈する。規模は東西1m、南北70cm、深さ30cmを測る。柱穴の中心には東西70cm、幅40cmの根石と見られる石が埋設されている。埋土からは胎土

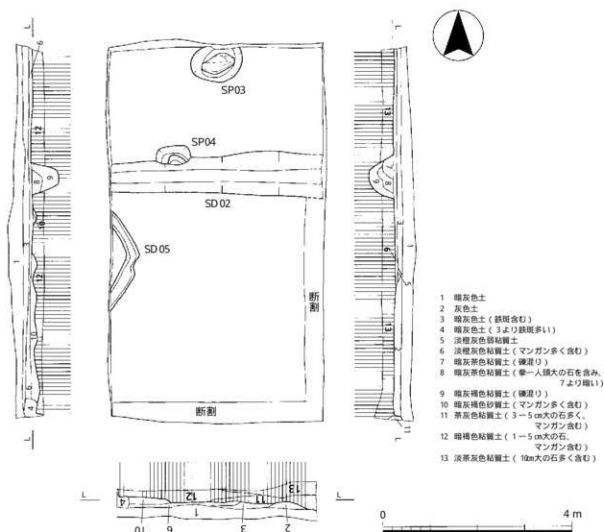


図7 調査区平面・断面図 (S=1/80)

に粗砂の混入が著しい土師質の土器片数点出土している。口縁など時期を限定し得るような破片はなかったが、出土した土器片の特徴から溝SD02と同時期の遺構と推察される。

柱穴SP 04

溝SD02と切り合って検出されたもので、SD02に先行する遺構である。北半分が残存しており、その形状から一辺70cmの方形の柱穴であったことがうかがわれる。内部は柱あたりの部分が一段落ち込んでおり、最深部までの深さは40cmを測る。遺物は出土していない。

溝SD 05

調査区中央西壁際で確認された「く」の字に折曲する溝である。遺構の規模は幅30cm、深さ10cm。埋土は暗灰褐色砂質土（マンガンを多く含む）が堆積する。遺物が出土していないため明確な時期は不明だが、埋土の特徴が直上の第6層と近似することから、中世の耕作に伴う素掘溝であると考えられる。

4. 出土遺物 (図8)

総数としてはコンテナケース1箱分の遺物が出土し、調査面積に比例して少ない量であった。出土地では溝SD02からが最も多く、全体の半数がそれにあたる。遺物の時期については量的に少ないため限定しかねる部分もあるが弥生時代後期～古墳時代前期（おおむね庄内式期）が最も多く、中世や縄文時代のものも若干認められる。全体的に細片が多く実測できたものは以下の6点である。

(1) は弥生土器V様式系甕の頸部で、SD02の中層より出土したものである。頸部径11.0cm、残存高2.8cm。全体の1/6ほどが残る細片で、口縁端部は欠失している。(2) もSD02中層出土の垂底部で、底部の半分が残っている。粘土輪積み成形時の粘土接合痕が外面に認められる。(3) はSD02下層出

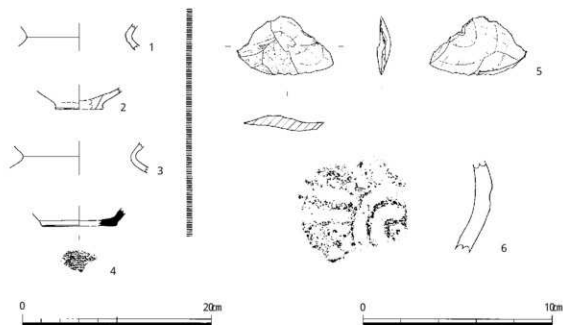


図8 能登遺跡第2次調査出土遺物 (S=1/4・1/2)

土の甕口縁で（１）と同じく口縁端部などは欠けている。頸部径12.0cm、内外面摩滅が進んでおり調整は不明。（４）は精査時に出土した須恵器壺の底部で、底径8.0cmを測る。内外面ヨコナデ調整されており、底面には糸切り痕が残る。（５）はサスカイトの剥片で、SD02上層より出土した。長さ3.1cm、幅5.2cm、厚さ4cm。（６）は縄土器の破片で、長さ4.8cm、厚さ8cm。SD02中層から出土したもので、外面には直線や円弧文が凹線により描かれている。

5. まとめ

今回の調査では溝、柱穴など古墳時代前期の遺構が確認された。当該期の遺構については市立図書館建設工事に先立つ第1次調査で、古墳時代前期（庄内式期）の独立棟持柱建物、竪穴住居などの遺構が確認されており、今回の遺構も出土遺物の様相などからこれらと併行する時期に構築されたものと考えられる。当地は多くの遺構が見つかった第1次調査地の平坦地より一段低いため遺構密度は低かったものの、検出された遺構の時期が共通する点や、溝SD02が第1次調査地付近から延びる遺構として理解できる点などから、今回の検出遺構と東側の丘陵上に展開する遺構群との関連性は高いものと考えられる。確認された柱穴は調査区の都合2基のみで構造物を特定できる状況ではないが、柱穴規模などから建物になる可能性は十分にあるものと思われる。またこの2基の位置関係から導き出された振れ角が第1次調査検出の建物に近似しており、この点も双方の関連性を補強する要素となろう。以上、狭小な面積での調査ではあったが、能登遺跡の更なる広がりを示すことができたことは今回の調査の成果であったといえるだろう。

（木場）

【註記】

- 1) 清水眞一 1997「能登遺跡発掘調査報告」〔1996年度発掘調査報告書1〕（財）板井市文化財協会
- 2) 寺沢薫編 1986「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第四十九冊 奈良県立橿原考古学研究所 以下、本報告における編年観はこれに準拠する。

第3節 大藤原京関連遺跡第42次発掘調査報告

1. はじめに (図9)

大藤原京関連遺跡第42次調査は、桜井市大字西之宮261-3における一戸建て自己用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査区は、対象地内の南東境界から北と西にそれぞれ2mずつ控えた地点から、東西13.5m×南北2m・面積27m²のトレンチを設定した。調査期間は平成15年9月1日～5日の実働5日間であった。

調査対象地は、大藤原京復元条坊の東四坊大路(中ツ道)の推定地にあたる。この東四坊大路については、昭和63年、調査地の西側に隣接する橿原市磯之上地区で、橿原市教育委員会による発掘調査が行われており、東四坊大路の西側側溝と北一条大路の北側側溝の交差点が確認されている¹⁾。また、平成15年6月には、同教育委員会による藤原京左京一・二条四坊、出合・膳夫遺跡の調査で、東四坊大路の道路幅が溝心距離16mから27.5mに拡幅されていたことが判明している²⁾。これらの成果を踏まえて、今回の調査地が橿原市磯之上地区の道路側溝検出地点から東へ約16～30mの位置にあたることから、東四坊大路が拡幅される以前、以後の2条の東側側溝の検出が期待された。しかし、調査地が所在する桜井市西之宮地区において、桜井市教育委員会・(財)桜井市文化財協会により、これまでに5件の発掘調査(第4・5・23・26・34次調査)が実施されているが、推定される東側側溝に相当する遺構は検出されていない。後世の開発で削平されているか、あるいは一条大路(横大路)の北側で道路幅がさらに拡大する可能性も考えられている³⁾。

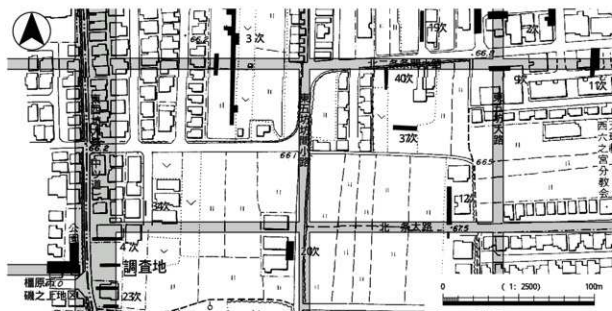


図9 大藤原京関連遺跡第42次調査地位置図 (S=1/2,500)

2. 基本層序 (図10 層番号は図に対応)

調査区の基本層序は、現代の宅地造成に伴う盛土・水田耕土層・中世以降の旧耕土層・河川堆積層・旧表土層の大別5層から構成される。河川堆積層以下では無遺物層となり、当地に人為的な開発が及ぶ以前の土層と考えられる。以下、各層の特徴について解説する。

現況は、近年の宅地造成により、層厚約50cmの盛土(0層)がなされている。

水田耕土層は、暗青灰色シルト～粘質シルト(1層)からなり、層厚は約30cmを測る。調査地の西側では下部に緑灰色極細粒砂混じり粘質シルト(2層)が部分的にみられた。

旧耕土層は3層に細分され、上層から灰オリーブ色極細粒砂～シルト(6層)、灰オリーブ色シルト(7層)、オリーブ灰色極細粒砂混じり粘質シルト(9層)となる。層厚は35～45cmを測り、西側ほど厚みを増している。旧耕土層からの出土遺物には、中世段階の瓦器塊・土師器皿等があり、また、古墳時代後期～藤原京期の須恵器片も混入している。

河川堆積層は、にぶい黄褐色～青灰色細粒砂(13層)からなり、約10cmの層厚で均一に堆積が認められる。調査地南方を流れる米川の旧河川からの洪水氾濫に伴うものと推定される。

旧表土層は、淡い褐灰色粘質シルト(14層)、暗い褐灰色粗～中粒砂混じり粘質シルト(15層)で構成され、特に15層は土壌化が著しく、Fe・Mnの沈着が顕著に認められる。

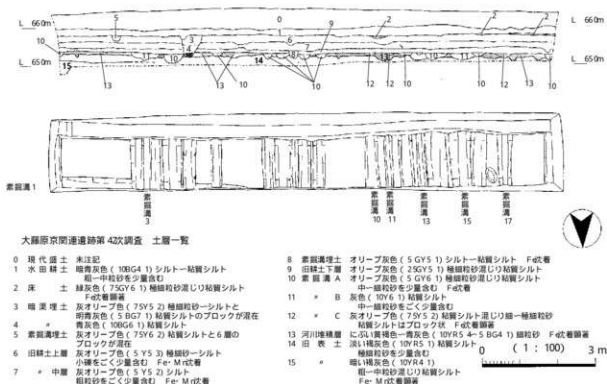


図10 調査区平面・断面図 (S=1/100)

3. 検出遺構 (図10)

調査は、旧耕土層を除去した河川堆積層 (13層) 上面において、遺構検出を行っており、18条の素掘溝を確認している。東四坊大路 (中ツ道) の東側側溝については、これらの素掘溝の中に混在している可能性も考えられたが、埋土の状況や出土遺物から明確に識別できるものはなく、全て中世以降の耕作に伴うものとして扱っている。

素掘溝は、素掘溝 1のみ東西方向であり、その他は南北方向に掘削されている。埋土の特徴から3種に分類され、便宜上、「素掘溝 A・B・C」と呼称しておく。

素掘溝 Aは、12条を検出しており、規模は幅30~50cm・深さ15~30cmを測る。旧耕土層の9層を主体としたオリーブ灰色極細粒砂混じり粘質シルトを埋土とする。

素掘溝 Bは、素掘溝 3・15の2条を検出した。埋土は、灰色粘質シルトで、幅約70cm・深さ約20cmを測り、比較的規模が大きい。

素掘溝 Cは、調査区の西半でみられ、素掘溝 10・11・13・17がこれに相当する。埋土は、灰オリーブ色粘質土混じり細~極細粒砂で、幅20~40cm、深さ10cm程度の小規模なものである。

なお、河川堆積層を除去した旧表土層 (14層) の上面においても遺構検出を行ったが、河川堆積層をもたらした洪水による浸食と考えられる自然地形の凹凸を検出するにとどまっている。

4. 出土遺物 (図11)

出土遺物については、出土量が少なく、ほとんどが摩滅の激しい細片である。概要は、旧耕土層および素掘溝埋土から、中世段階の瓦器塊・土師皿・器種不明の土師器片・瓦片に混

じって古墳時代後半~藤原京期の須恵器片が出土している。

図化が可能なものは、図11に掲載した4点 (1~4) のみであった。(1) は、瓦器塊の底部で、6層から出土した。高

台は形骸化し、断面が低い三角形をなすもので、底部径は4.1cmに復元される。調整は、内外面ともに摩滅のため不明瞭であった。(2) は、土師器皿の口縁部であり、7層より出

土している。復元口径は10.5cmを測り、体部から口縁部をナデにより外反させ、口縁端部を尖り気味に上方に向け、端部を小さく丸く収めている。(3) は、素掘溝 3より出土した土

師器小皿である。復元口径で9.8cmを測り、底部と体部の境が明瞭で、口縁部にかけて厚みを増しながら立ち上がり、口縁端部を内傾気味に丸く収める。(1~3) は、

当地が耕地化された時期の上限を示す遺物であり、帰属時期については、概ね13~14世紀代と捉えられる。(4) は、藤原京期と考えられる須恵器・坏の底部であり、素掘溝 17より出土した。底部径は11.8cmに復元され、高台高は0.8cmを測る。

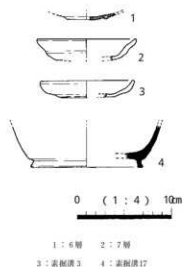


図11 大藤原京関連遺跡
第42次調査出土土器 (S=1/4)

5. まとめ

今回の調査では、東四坊大路（中ツ道）に関連する遺構の検出が期待された。しかし、旧耕土層や素掘溝埋土中には、藤原京期以前の須恵器片が巻き上げられており、当時の地表面や想定される道路の整地層等は中世以降の農耕活動によって削平されている可能性が高い。また、道路の東側側溝についても、拡幅される以前、以後のいずれの溝も確認することはできなかった。

平成15年の藤原京左京一・二条四坊、出合・膳夫遺跡の調査で検出された道路側溝の規模についてみると、東側側溝は西側側溝より50cm深いことが報告されており、排水機能は米川に近い東側に重点が置かれていたことがわかる。調査地はその対岸地域にあり、米川を境界に水利系統が反転していたと仮定するならば、道路側溝は、米川に排水しやすい西側側溝が深く掘削されていたと推測される。したがって、東四坊大路の東側側溝に関連する遺構が検出されなかった要因としては、東側側溝が西側側溝よりも浅かったために、後世の開発により消滅してしまった可能性が考えられよう。（清水）

【註記】

- 1) 榎原市教育委員会 2003年『藤原京左京一・二条四坊、出合・膳夫遺跡（榎教委2003～2次）発掘調査現地説明会資料』
- 2) 奈良国立文化財研究所 1998年『藤原京研究資料（1998）』
- 3) 橋本輝彦 1999年「大藤原京関連遺跡第23次調査報告」〔榎井市 平成10年度国庫補助による発掘調査報告書〕榎井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書20集 榎井市教育委員会
清水眞一 2001年「大垣内地区第4次調査（大藤原京34次）」〔大垣内地区第1次調査（大藤原京4次調査）〕〔西/垣内地区第1次調査（大藤原京5次）〕〔榎井市内埋蔵文化財 2000年度 発掘調査報告書4〕⑧榎井市文化財協会
- 4) 本館における土器の調整技法・編年観については、以下の文献に準拠している。
須恵器：田辺昭三 1981年『須恵器大成』角川書店
中世土器：中世土器研究会編 1995年『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

第4節 縦向遺跡第135次発掘調査報告（平塚古墳隣接地）

1. はじめに

縦向遺跡135次発掘調査は桜井市大字箸中540番地1・13において、縦向遺跡及び平塚古墳の範囲確認を主な目的として実施された（図26）。平塚古墳は箸墓古墳から北東へ約500mの、縦向川北岸に立地しており、縦向川扇状地に展開する箸中古墳群の東端に位置している。これまで直径35m程度の円墳と推定されてきたが、築造時期や正確な墳形・墳丘規模については一切知られていない。

現状の地形を見ると、墳丘は東側の一部が道路によって削られているものの、西半部については比較的旧来の姿を留めていると思われる。特に、墳丘北側から西側にかけて円弧状に巡る道路が存在し、墳丘形態を反映するものと考えられ注意が必要である（図版6）。明治20年代に野淵龍潜により作成された平塚古墳の見取図によると、現在残存する円丘部の南側にわずかに突出する部分が描かれており、今回の調査対象地のすぐ北側まで墳丘が残存していた様子がうかがえる（図12・13）。このことから平塚古墳は、本来南側に前方部を有する前方後円墳であった可能性も考えられる。

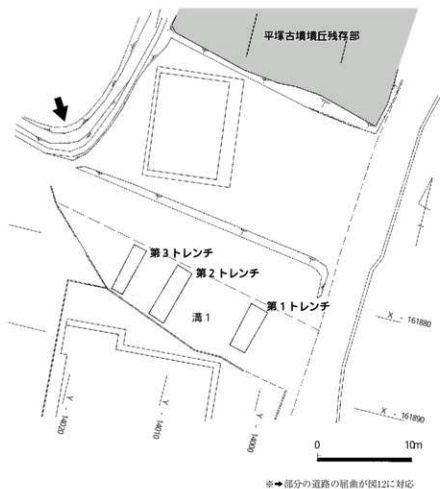
調査は墳丘残存部から南へ約20m離れた敷地で行なわれたが、本来の墳丘が現状より大規模なものであった可能性を考えると、墳形や墳丘規模・築造時期を示す遺構・遺物が検出されることが期待された。調査は平成15年8月1日から8月20日にかけて実施した。調査面積は約30㎡である。

2. 調査の方法と層序（図14・15）

調査開始当初、敷地内の東側（第1トレンチ）と中央付近（第2トレンチ）の2ヶ所に、東西2m、南北5mのトレンチを設定し、人力により掘削をはじめた。第2トレンチでは表土下に黒褐色土の堆積がみとめられたが、第1トレンチでは薄い表土の下に瓦礫を含む暗褐色土層が続いていた。この暗褐色土層は地図上での確認の結果、吉野川分水設置時の埋め土であることが判明し、第1トレンチは掘削開始日のうちに埋め戻しを完了している。その後、第2トレンチの西側に第3トレンチを設定した。第3トレンチは当初東西1.5m、南北4mの規模で掘削を開始した。



図12 平塚古墳墳丘見取図



※一部の道路の屈曲が図12に対応

図13 トレンチ配置図 (S=1/400)

表土下には一部で厚さ20cm程度の灰黄褐色～に
 ぶい黄褐色土 (2 tr-2・
 3層, 3 tr-3層)が存在
 し、その下層には黒褐色
 土 (遺物包含層 2 tr-
 10層, 3 tr-9層)が堆積
 していた。この遺物包含
 層は第2・第3トレンチ
 の北側約2/3でみとめら
 れ、南側は落ち込みによ
 り切り込まれる状況が確
 認されている (2 tr-5
 ～8層, 3 tr-4～8
 層)。遺物包含層上面で
 の精査の結果、埴輪片が
 出土したことから、この
 落ち込み状の遺構が平塚
 古墳の墳端にあたる可能
 性を考え、両トレンチを

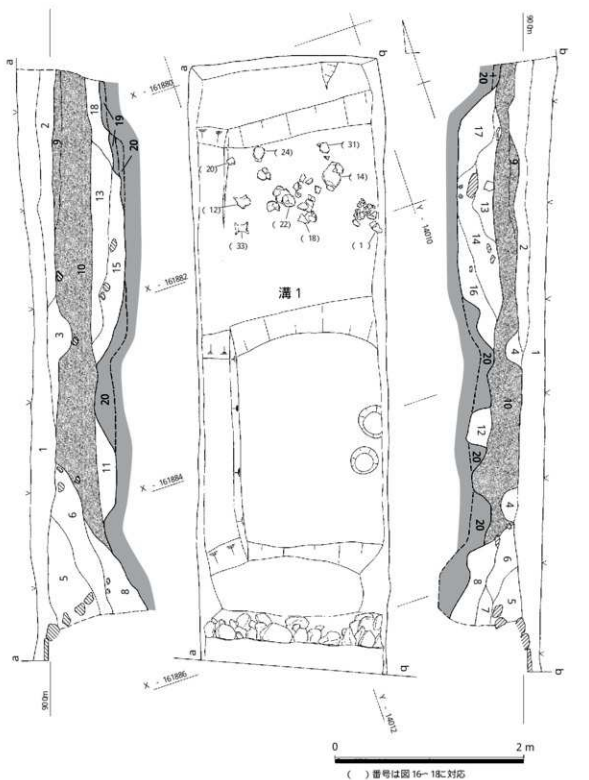
南側に拡張した。これにより第2・第3トレンチの南北長はそれぞれ6.4m、5mとなり、拡張部において人頭大の塊石が並ぶ状況が確認された。この塊石は、上記の落ち込みを掘り下げたところ石組状をなしていることが判明する。敷地南西側には同様の石材を用いた石組が残存しており、検出されたものは敷地の南縁に巡らされた石組の一部と判断される。

遺物包含層は20～60cm程度の厚さで堆積し、弥生土器や土師器・須恵器・埴輪片など、包含する遺物の時期にばらつきがみとめられた。この層の下層には褐色砂層 (2 tr-20層, 3 tr-13層)が堆積し、その下には黒褐色シルト層 (3 tr-15層)が続いていた。褐色砂層以下からは遺物は一切検出されず、これらの層が付近一帯の基盤となっていると考えられる。

褐色砂層上面での精査の結果、弥生土器を含む溝1と小規模なピットが数基確認された。これらの遺構を完掘した後、人力によって第2・第3トレンチの埋め戻しを行った。

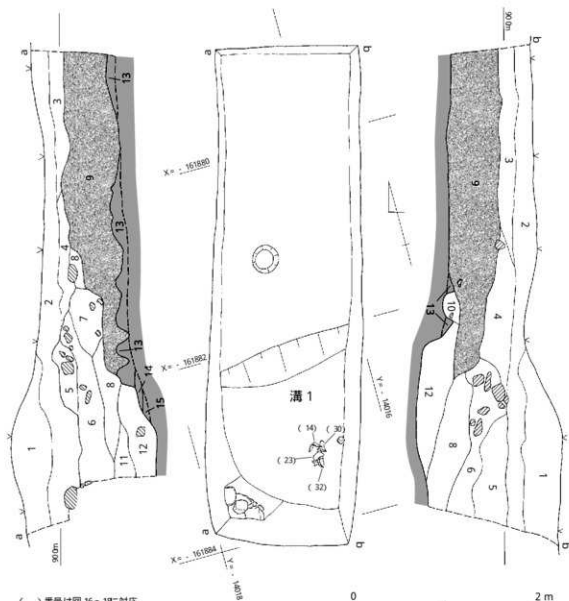
3. 検出遺構 (図14・15)

遺構の概要 遺構検出は第2・第3トレンチの遺物包含層上面と基盤層の上面において行なった。後述する石組や溝は、両トレンチにおいてそれぞれ確認されており、位置関係や堆積状況・出土遺物



- | | | | |
|---|----------|--|--------|
| 1 灰黄褐色 (10YR4 2) シルト—極細粒砂 | 【表土】 | 12 黒褐色 (10YR3 2) 細粒砂—中粒砂 | |
| 2 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト—極細粒砂 (小礫含む) | | 13 暗褐色 (10YR3 3) 極細粒砂—細粒砂 (径5cm以下の礫含む) | |
| 3 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト—極細粒砂 | | 14 灰黄褐色 (10YR4 2) シルト—細粒砂 | |
| 4 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト—細粒砂 (黄褐色土含む) | | 15 灰黄褐色 (10YR4 2) シルト—中粒砂 (拳大の塊石含む) | 【溝1埋土】 |
| 5 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト (小礫—拳大の塊石含む) | | 16 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト—細粒砂 (径5cm程度の礫含む) | |
| 6 灰黄褐色 (10YR4 2) シルト—極細粒砂 (小礫—拳大の塊石含む) | 【石積築込め土】 | 17 に5%黄褐色 (10YR4 3) シルト—極細粒砂 | |
| 7 暗褐色 (10YR3 3) シルト (拳大の塊石含む) | | 18 灰黄褐色 (10YR4 2) 極細粒砂—細粒砂 (小礫含む) | |
| 8 暗褐色 (10YR3 4) シルト—細粒砂 (径3cm程度の礫含む) | | 19 褐色 (10YR4 4) シルト | |
| 9 灰黄褐色 (10YR4 2) シルト—細粒砂 (小礫含む) | 【遺物包合層】 | 20 褐色 (10YR4 4) 細粒砂—中粒砂 | 【基盤層】 |
| 10 黄褐色 (10YR3 2) シルト—細粒砂 (小礫含む) | | | |
| 11 黄褐色 (10YR3 2) 極細粒砂—中粒砂 (100ブロック3 程度含む) | | | |

図14 第2トレンチ平面・断面図 (S=1/40)



() 番号は図 16~ 18に対応

- | | | | |
|--|------------|---------------------------------------|-----------|
| 1. 灰褐色 (75YR5 6) シルト-中粒砂 | [現代盛土] | 9. 黒褐色 (10YR3 1) シルト-中粒砂 (小礫含む) | [遺物包含層] |
| 2. 黒褐色 (75YR3 2) シルト-細粒砂 | [敷土] | 10. 黒褐色 (75Y3 2) シルト-中粒砂 | |
| 3. 灰黒褐色 (10YR4 2) シルト-細粒砂 | | 11. 灰色 (10YR4 3) シルト-細粒砂 | |
| 4. 暗褐色 (10YR3 3) シルト-細粒砂 | | 12. 暗褐色 (10YR3 3) シルト-細粒砂 (中大程度の塊石含む) | [溝1埋土] |
| 5. 暗褐色 (10YR3 3) シルト-細粒砂 (小礫-中大塊石含む) | | 13. 褐色 (10YR4 4) 細粒砂-中粒砂 | |
| 6. 暗褐色 (10YR3 4) シルト-細粒砂 (小礫-中大塊石含む) | [石組裏込め土] | 14. 褐色 (10YR4 4) シルト | [基礎層] |
| 7. 暗褐色 (10YR3 3) シルト-細粒砂 (5cm程度の礫多く含む) | | 15. 黒褐色 (75YR3 2) シルト (径3cm程度の礫含む) | |
| 8. 黒褐色 (10YR3 2) シルト-細粒砂 (小礫含む) | | | |

図15 第3トレンチ平面・断面図 (S=1/40)

などから、それらは一連のものであると判断することができる。

精査の結果、遺物包含層上面では石組に関連する遺構が確認され、基盤層上面では弥生土器を含んだ溝(溝1)が検出された。

石組関連遺構 第2・第3トレンチの南端において確認された。遺物包含層上面では南側に大きく下がる落ち込み状の遺構として認識されたが、既に触れたように対象地の南縁に石組が築かれていることから、この落ち込みの埋土は石組の裏込めに相当する可能性が高いと考えられる。なお石組自

体は調査対象地の外側にあたるため、今回の調査では石組の裏込め部分のみを掘削することとなった。この石組は遺物包含層及び溝1埋土を切って構築されたと考えられ、その裏込め土からは拳大程度の塊石や瓦器塊などの他、弥生土器や土師器、埴輪が出土した。石組の構築時期については、後述する遺物の時期から14世紀以降であると考えられる。

溝1 遺物包含層を除去して基盤層の上面を精査したところ、第2トレンチの北半部と第3トレンチの南端部において溝状の遺構が確認された。溝の規模は第2トレンチでは検出面で幅約2.3m、深さ約40cmを測り、第3トレンチでは南肩が確認されなかったものの、幅2m以上、深さ40cm程度に推定される。この溝は概ね東西方向に走っており、溝底のレベルは第3トレンチで第2トレンチよりも約20cm低くなっている。埋土は主に灰黄褐色～いり黄褐色の砂質土で構成され、拳大の塊石や黒褐色ブロックが含まれていた。このような埋土の状況から、恒常的な流水や滲水があったとは考えられない。

出土した遺物はいずれも弥生土器で、概ね溝底より10cm程度浮いた位置から検出されている。溝の性格や出土遺物・時期については後述することにする。

4. 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物の総量は、コンテナケースで4箱分に相当する。溝1からは弥生土器、石組裏込め土からは弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。遺物包含層には弥生土器や土師器、埴輪、須恵器、石器などが含まれていた。以下ではこれらの遺物について各遺構・層別に出土遺物の形態的特徴・調整などを示している。埴輪片については、溝1と基盤層を除く各層位より検出されているが、個体間に大きな時期差がみとめられず、平塚古墳に伴うものである可能性が高いことから、平塚古墳関連遺物として区別している。なお、土器の残存状況・法量・色調等については一覧表(表2)に示した。

(2) 溝1出土遺物(図16～18)

遺物の概要 溝1からはコンテナケース約1箱分の弥生土器が出土した。確認された器種は鉢、甕蓋、甕、広口壺、長頸壺、高坏、器台などで、完形に近いものも含めて33点の土器を図化することができた。以下で器種別に見ていくことにする。

出土土器 図16の(1)～(4)は小形の埴形鉢で、口縁の一部を欠くが、全体の形状を知ることができる個体である。突出する底部を有しており、その端部を外側につまみ出している。体部から口縁部にかけては内湾し、口縁端部は丸くおさまられる。内外面の大半はナデにより仕上げられているが、(4)の内面にはハケメが残り、(3)の内面底部付近には板状工具によると思われる調整の痕跡がみられた。なお(3)は、やや厚めの底部を有する点で他の個体と若干異なる。(5)・(6)は体部の上半を欠いているが、(1)～(4)と同様の底部形態を持つことから小形の埴形鉢と考えられる。内面にはハケメがみとめられる。(7)は内湾する体部を持つ小形の埴形鉢であると考えられる。

外面にタタキがみとめられた。(8)もまた小形の塊形鉢と考えられるが、底部に径0.8cm程度の穿孔を有する。外面はタタキにより仕上げられていた。(9)は甕蓋と考えられる個体である。突出するつまみ部は中央をくぼませており、その外面には整形時の指頭圧痕が残る。体部はわずかに外反して広がり、内面にはハケメがみとめられた。

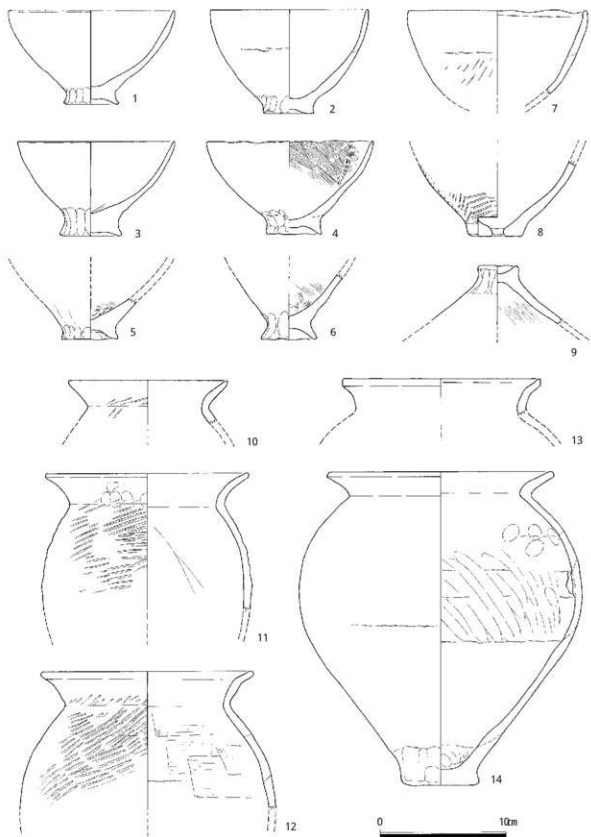
(10)は直線的に広がる口縁部を持つ甕である。口縁端部は丸くおさまられ、口縁から肩部にかけてタタキが施されていた。(11)・(12)は外反する口縁部を有する甕である。口縁端部は丸くおさまられている。体部は丸みを持つが、肩部の張りはそれほど強いものではない。口縁部から体部にかけてはタタキがみとめられる。内面はナデにより仕上げられるが、(12)の体部内面には弱いハケメ状の痕跡が残存していた。(13)も口縁を外反させる甕であるが、端部がわずかに上方につまみ上げられるような形状を示し、その外側に面を有している。(14)は溝1出土の甕のうち、唯一全体の形状がわかる個体である。口縁部は短く外側に広がり、端部には面が形成されている。肩部は丸く張り、そこから底部にかけては直線的にすぼまる形状を示す。底部は突出する平底を呈している。外面はナデにより丁寧に仕上げられ、底部付近に整形時の圧痕がわずかに残る程度である。内面は体部中ほどを中心に指ナデが明瞭にみとめられた。

図17の(15)は広口壺の口縁部と考えられる。外反して広がり、端部は丸くおさまられている。(16)は直線的に広がり、端部を垂下させる壺の口縁部である。端部の外側には弱い刻目と刺突によって構成される文様が施されていた。広口長頸壺の口縁部であろうか。

(17)・(18)は外反する口頸部を持つ長頸壺である。口縁付近でわずかに屈曲して外側に開く形状を示す。口縁端部は丸くおさまられている。(19)・(20)は直線的に伸びる口頸部を有する長頸壺である。口縁付近をわずかに内湾させ、端部は丸くおさまられている。外面にはいずれもタテハケが施され、(20)の口縁外面には弱い沈線が一条めぐらされている。なお(20)の内面にはヨコハケがみとめられた。(21)・(22)はほぼ直線的に伸びる口頸部を有する長頸壺である。口頸部はそれほど長いものではなく、外面はタテハケにより仕上げられ、端部は丸くおさまられていた。(22)の体部はやや縦長の球形を呈し、突出する平底を有している。

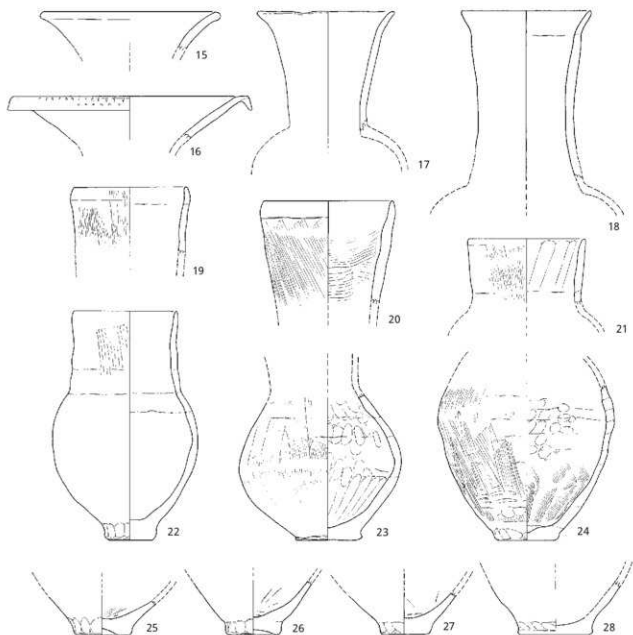
(23)・(24)はともに口頸部を欠いているが、長頸壺の体部であると思われる。(23)は肩部の張りが弱く、体部下半において最大径を測る。底部は突出する平底を呈する。外面はタテハケにより仕上げられ、内面にはタテ方向の指ナデや指頭圧痕がみとめられた。(24)は体部の中程から上半において最大径を測る個体で、わずかに突出する平底を有する。体部外面はタタキの後にタテハケを施しており、一部に繊維束状のものによると思われる擦痕が存在する。内面の底部付近にはハケメが施されていた。

(25)～(28)はいずれも底部付近の破片である。小形の鉢(図16-1～6)の底部に比して接地面が大きく、端部を外側につまみ出さない形状から、甕あるいは壺の底部と考えることができる。(25)は突出して中央が凹むドーナツ状の底部を有しており、甕の底部である可能性が考えられる。内面にはハケメがみとめられた。(26)もまた突出して中央をくぼませる形態であるが、(25)よりも接地面



[1-4·6·8-14] 2 tr [5·7] 3 tr

图16 溝1出土遺物① (S=1/3)



[16・23・27] 3 tr その他は2 tr出土

0 10cm

図17 溝1出土遺物② (S=1/3)

は小さい。内面には板状工具によると思われる圧痕が残る。壺の底部であると思われる。(27)・(28)は突出する平底である。(22)～(24)の底部と類似する形状であることから、壺の底部であると考えられる。なお(27)の内面には板状工具によるであろう圧痕がみとめられた。

図18の(29)は、高坏の坏部の破片である。皿状の体部に外反する口縁部がつく形状を示す。口縁端部は丸くおさめられ、内面にはミガキが施されていた。(30)は高坏の脚部である。外反して広がる裾部には3方に円形の透孔が配され、外面はタテハケにより仕上げられていた。脚柱部内面にはシボリの痕跡がみとめられる。(31)は高坏の坏部から脚柱部にかけての破片である。体部は直線的

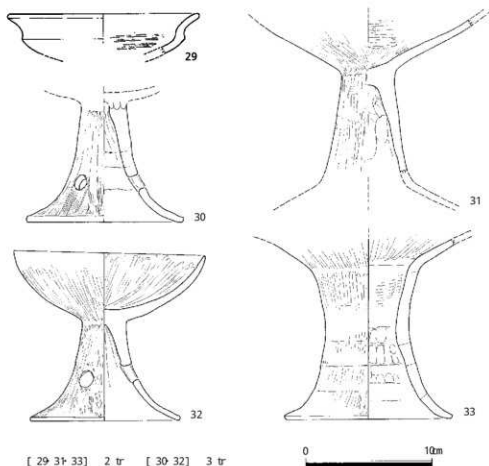


図18 溝1出土遺物③ (S=1/3)

に広がる形状で、外反する口縁部がつくものと思われる。内外面ともにミガキが施されていた。脚部は直線的に伸びる脚柱部のみが残存する。外面にはタテ方向のミガキ、内面には整形時の指頭圧痕が顕著にみとめられた。(32)は塊形の坏部を持ち、外反して広がる脚部を有する高坏で、脚部の中程には3方向に円形透孔が開けられていた。坏部の内外面及び脚部の外面にはミガキが施され、脚部の内面にはシボリ痕がみとめられる。

(33)は筒状の体部を持つ器台である。裾部は外反して広がる形状を示し、体部との境界は不明瞭である。裾部の端部は丸くおさめられ、口縁部は屈曲して大きく外側に広がっている。外面は全体にタテ方向のミガキにより仕上げられ、内面は口縁部付近にはミガキ、体部上半はヨコハケが施されている。なお体部下半には指頭圧痕が残存していた。

出土土器の時期 溝1出土の土器は、その出土状況から一括性の高いものと理解される。器種構成に注目すると、小形の塊形鉢や長頸壺の存在が目立っており、弥生時代後期に属する土器群であることがわかる。長頸壺の形態は、完形に復元される(22)の器高が18cmであり、その他の個体も含めて30cmを越えるような大形品は存在しないようである。また(22)は頸部と体部の境界部分の屈曲が不明瞭であり、長頸壺の中でも新しい様相を示していると言うことができる。この他(11)や(12)など外面にタタキ調整を施す甕の存在などを考え合わせると、弥生時代後期後半に属する土器群であ

ると考えられる。

これまで纏向遺跡では、纏向石塚周辺において弥生時代後期後半の遺構の存在が知られている。今回確認された溝1はこれと近い時期のものと考えられ、纏向遺跡の形成過程を考える上で重要な資料といえることができる。

(3) 遺物包含層出土遺物 (図19・20)

遺物の概要 遺物包含層は第2トレンチでは10層、第3トレンチでは9層に相当し、出土遺物の総量はコンテナケースで2箱分程度であった。遺物の種類は弥生土器が最も多く、器種構成は概ね溝1と一致する。他に土師器、須恵器、瓦器、埴輪、石器などが含まれていた。

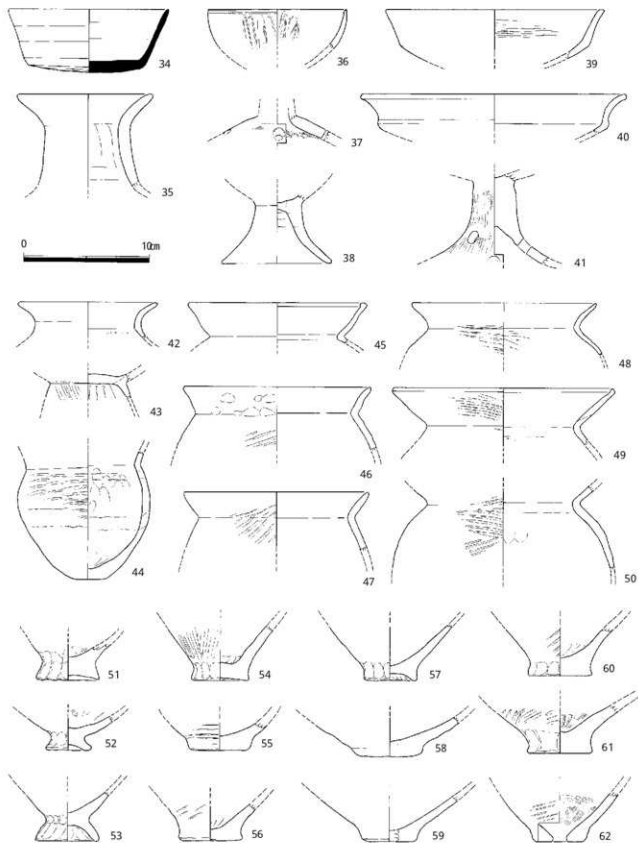
出土土器 (34)は須恵器の杯身である。底部は平坦に近く、外傾して直線的に立ち上がる体部を有している。口縁端部は丸くおさまられている。調整は底部の外表面は回転ヘラケズリ、体部外表面及び内面の大半が回転ナデにより仕上げられ、底部の内表面には不定方向のナデがみとめられる。ケズリの方向から判断されるロクロの回転方向は時計回りである。

(35)は器台と思われる個体である。体部はやや内傾する円筒状を呈し、口縁は短く外反している。

(36)は半球形の境形杯部を持つ高杯である。口縁の外表面に2条の弱い沈線がめぐらされており、内表面ともにケズリ調整の後にミガキが施されている。(37)は裾部が大きく広がる高杯の脚台部である。中程に径0.8cm程度の円形透孔が4方向に穿孔されていたと推定される。内表面にはハケメが施されていた。(38)は外反して広がる高杯の脚台部である。脚台部高が5cm程度と小さいものであった。(39)は皿形の体部とわずかに外反する口縁部を持つ高杯である。口縁端部の上面に端面を有し、内表面はヨコ方向のミガキにより仕上げられていた。(40)は皿形の体部と大きく外反する口縁部を持つ高杯である。口縁端部はほぼ丸くおさまられるが、下方にわずかに肥厚させている。(41)は中実の脚柱部を持つ高杯である。外反して広がる裾部には径1cm程度の円形透孔が2段にわたって穿たれているようであり、上段のものは3方に開けられている。脚部外表面にはタテ方向のミガキが施されていた。

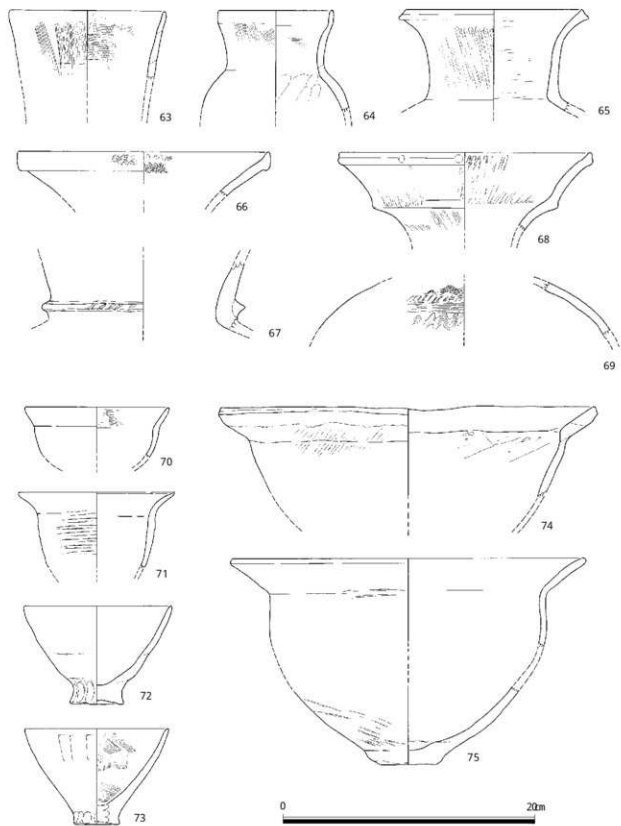
(42)は外反する口縁を有する甕で、体部内表面はケズリにより仕上げられる。(43)はS字状口縁台付甕の脚台部付近の破片である。外表面には明瞭なタテハケがみとめられた。(44)は小形の甕である。底部は突出しない平底で、肩部の張りはそれほど強いものではない。外表面の体部上半にはタタキが施されていた。(45)はわずかに内湾する口縁部を持つ甕で、口縁端部の内表面を肥厚させている。(46)は外反する口縁部を有する甕である。口縁端部は丸くおさまられ、体部外表面はタタキ調整がおこなわれている。口縁部外表面には整形時のものと思われる指頭圧痕が残存していた。(47)は甕で、直線的に広がり端部が丸くおさまられる口縁部を有している。体部外表面にはタタキが施されていた。(48)は外反する口縁部を持つ甕である。口縁端部はわずかにつまみ上げられている。体部の外表面はタタキ、内表面はケズリにより仕上げられていた。(49)は直線的に広がる口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方につまみ上げられており、口縁部外表面にはタタキが残存する。体部の内表面にはケズリが施されていた。(50)は肩部が丸く張る甕で、体部外表面にタタキがみとめられた。

(51)は底部付近の破片である。突出する底部の端部はやや外側へつまみ出されており、外表面には



[34・36・38・39・43・49・51・55・59] 3 tr その他は2 tr出土

図19 遺物包含層出土土器① (S=1/3)



[64・70] 3 tr その他は2 tr出土

図20 遺物包含層出土土器② (S=1/3)

整形時の指頭圧痕が明瞭にみとめられた。底部が厚く、端部をつまみ出す点などが図16の(3)と類似することから、小形の塊形鉢の底部であると考えられる。(52)もまた底部付近の破片であるが、端部のつまみ出しは(51)よりも顕著であり、短小な脚台状を呈している。体部は外側に大きく広がる形態が推定される。底部径が小さく接地面が少ないことなどから、小形の塊形鉢であると思われる。

(53)はやや内湾して外側に広がる脚台状の底部を有する個体である。その外面には整形時の指頭圧痕がみとめられた。小形の塊形鉢であろうか。(54)は突出する底部を有する甕と考えられる。底部形態は平底に近いが、中央がやや凹む形状を示している。底部の端部は外側へややつまみ出されており、内外面には整形時の指頭圧痕が残る。体部の外面にはミガキが施されていた。(55)は突出する平底を持つ甕と考えられる。底部の外面にはタタキの痕跡がみとめられた。(56)は甕と考えられる個体で、突出して中央が凹むドーナツ状の底部を有している。体部外面にはタタキが残存していた。

(57)は甕と考えられる個体で、突出して中央を凹ませる底部を持っている。(58)・(59)は突出する平底を呈しており、壺の底部付近の破片と考えられる。(60)・(61)は突出する平底を有する甕である。底部の端部は外側へつまみ出され、体部の外面にはタタキ、内面にはハケメが施されていた。

(62)は突出する底部を穿孔する個体で、甕あるいは鉢と考えられる。外面はタタキ、内面はハケメにより仕上げられている。

図20の(63)は長頸壺の口頸部で、外面はタテハケ、内面にはヨコハケが施されていた。(64)は比較的口頸部の短い長頸壺である。頸部はやや外反するが、口縁部付近はわずかに内湾させている。口縁端部は丸くおさめられる。頸部の外面はタテハケ調整がおこなわれ、内面にはヨコ方向のハケメがみとめられる。(65)は広口壺の口頸部である。頸部は直線的に上方に立ち上がり、口縁部付近は外反する。口縁端部には明瞭な端面を有している。頸部の外面はタテ方向のミガキで仕上げられ、内面にはハケメがみとめられた。(66)は壺の口縁部と考えられる個体である。外側に大きく広がる口縁の端部は上方と下方に肥厚する。口縁端部の内外面には波状文が施されていた。(67)は壺の頸部と考えられ、屈曲部外面に刻目を有する突帯が巡る。(68)は二重口縁壺の口頸部である。外反して広がる口縁の端部には端面が形成され、上方と下方にわずかに肥厚させている。内外面ともタテ方向のミガキが施されるが、頸部外面にはハケメもみとめられた。なお口縁端部外面には円形浮文の剝離痕が存在していた。(69)は壺の肩部付近の破片である。外面には横位の櫛描波状文や櫛描直線文が施されていた。

(70)は小形丸底鉢で、外傾して直線的に伸びる口縁部を持つ。口縁部の内面にはヨコ方向のハケメがみとめられた。(71)は外反して広がる口縁部を有する小形の鉢である。口縁端部は上方につまみ上げられ、体部の外面にはタタキが施されていた。(72)は、突出して中央が凹む底部を有し、やや内湾する体部を持つ小形の塊形鉢である。口縁端部は丸くおさめられ、底部の端部は外側につまみ出されている。底部外面には指頭圧痕が明瞭にみとめられた。(73)は小形の塊形鉢で、突出する平底とやや内湾する体部を有している。体部内面には不定方向のハケメが見られ、体部外面には板状工具によると思われる調整の痕跡がみとめられた。(74)は外側に大きく広がる口縁部を持つ鉢で、口

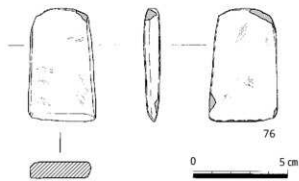


図21 3tr遺物包含層出土石器 (S=1/2)

遺物包含層の時期 包含層から出土した遺物は、溝1と同時期のものが大半を占めているが、一方で(45)などの布留式期の甕や、扁平片刃石斧(76)、そして後述の埴輪片なども含まれており、包含する遺物の時期にばらつきが見られる。このうち須恵器環(34)が最も新しい時期に考えられ、これにより黒褐色土層は7世紀以降の堆積と理解される。

(4) 石組関連遺構出土遺物 (図22)

遺物の概要 調査対象地の南縁を巡る石組の裏込め土からは、瓦器や土師器のほか埴輪や弥生土器・土製品などが出土した。各個体の破片の大きさは、溝1や黒褐色土層出土のものと比較すると小さなものが多かった。既に述べたように、石組は第2トレンチでは遺物包含層である黒褐色土層を、第3トレンチでは同じく遺物包含層と溝1埋土を切っていることから、石組の裏込め土にはそれらの層から巻き上げられた遺物が多数含まれていることが想定される。検出された遺物のうち、埴輪や古式土師器、弥生土器はそうした巻き上げによるものと考えられ、石組の構築時期を示すであろう遺物はわずかにすぎなかった。

出土土器 (77)・(78)は外反して開く口縁部を持つ高坏である。(77)は体部と口縁部の境界に明瞭な稜を有しており、口縁端部が外側上方へとつまみ上げられている。(78)の口縁端部は丸くおさめられており、坏部の内外面はミガキによって仕上げられていた。(79)はやや小形の高坏の脚部であると考えられる。外反して外側に広がる脚部を有しており、その端部は丸くおさめられる。脚部中程には凹形透孔が配されている。(80)は「く」字形に屈曲して広がる口縁部を持つ土師質の土釜である。口縁端部には外傾する端面が形成される。(81)は内湾する体部を持ち、口縁端部内面に明瞭な沈線を巡らせる瓦器塊である。(82)は瓦質の火鉢蓋と考えられるもので、天井部内面に段を有している。

(83)~(87)は小形の塊形鉢で、突出して端部が外側につまみ出される底部を持っている。内面にはハケメが施されていた。このうち(86)はやや内湾する体部を有し、口縁端部は丸くおさめられている。(88)は長頸壺の肩部付近の破片である。体部内面及び外面にはハケメが施されていた。(89)・(90)はいずれも突出する底部を持つ壺と考えられる。(91)~(93)はいずれも突出する底部を有する甕と考えられ、(92)は底面の中央が凹む形態である。(94)・(95)はわずかに突出する平底を有す

縁端部に端面を有する個体である。口縁部から体部にかけての外面には粗いハケメが見られ、体部の内面にはナナメ方向のケズリが施される。(75)は鉢で、外側に大きく開く口縁部から体部上半と、底部付近が残存する個体である。体部の外面にはタタキメが残存していた。

出土石器 図21の(76)は扁平片刃石斧である。ほぼ完形の状態で出土しており、全長5.9cm、刃部幅3.5cmで、重さは38.55gを測る。

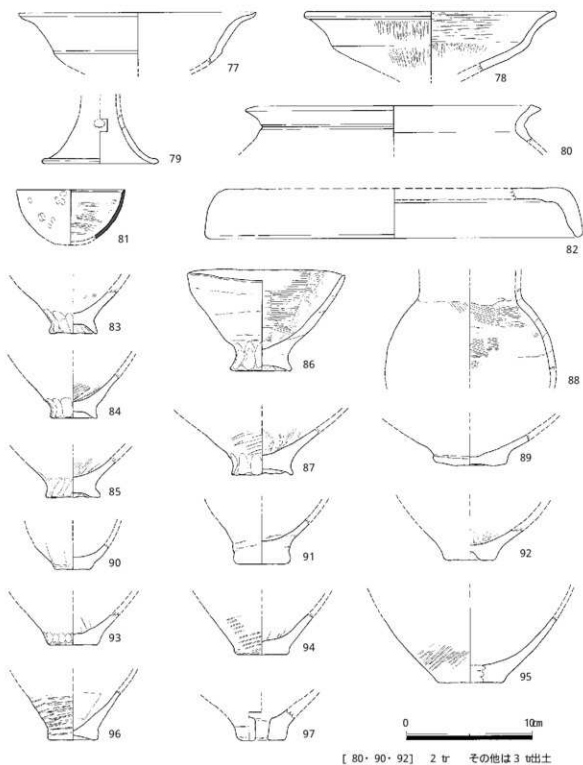


図22 石組裏込め出土土器 (S=1/3)

る甕である。外面にはタタキが施されている。(96)もタタキ調整がおこなわれる甕で、突出する底部は中央が凹む形態である。(97)は突出する底部を持つ甕あるいは鉢と考えられ、底部には焼成前におこなわれたであろう穿孔がみとめられる。

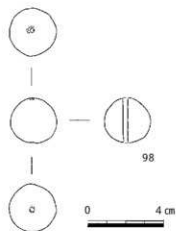


図23 3tr石組裏込め出土土製品 (S=1/2)

出土土製品 (図23) (98)は玉形の土製品である。径2.4cmを測り、直径約2mmの穿孔がある。焼成は良好で、外面の色調にはふい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

石組の時期 遺物包含層と同様に、時期幅を持つ遺物構成であった。(86)をはじめとして多くの土器が溝1からの巻き上げられたものと考えられる。

(81)は「湯呑形瓦器塊」に分類される個体で14世紀代に属するものとされ、(80)や(82)についてもこれに近い時期で理解される。これらの時期を参考にするなら、調査対象地の南縁を巡る石組は14世紀以降に築造されたものと考えられることができる。

(5) 平塚古墳関連遺物 (図24・25)

遺物の概要 今回の調査では平塚古墳に関連する遺構は確認されなかったが、遺物包含層より上の各層位より数十点の埴輪片が検出された。これらの埴輪は、出土状況から平塚古墳との関連性を検証することは難しいが、調査区の周囲には他に古墳が存在するとは考えにくく、平塚古墳に伴うものと判断してよいと考えられる。図24・25では、突帯付近などある程度部位がわかる個体を中心に、19点を図示することができた。確認された埴輪の種類としては、円筒埴輪が15点、朝顔形埴輪が2点で、このほか形象埴輪の可能性があるものが2点存在する。黒斑を有するものはみとめられず、須恵質の破片が2点含まれていた。以下では各個体の形態的特徴や調整について見ていくことにする。なお、埴輪の胎土に関しては付載2で考察することにする。

朝顔形埴輪 朝顔形埴輪は(99)・(100)の2点が確認された。いずれも壺形部分の肩部付近の破片であり、屈曲部の外面には断面三角形の突帯が巡らされる。(99)は屈曲部の約1/5周が残存する個体である。口縁部外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが施されており、その下端は突帯成形時にナデ消されている。肩部の内外面はナナメ方向のナデにより仕上げられる。(100)は屈曲部の約1/10周が残存する。肩部外面には一部にハケメがみとめられる。

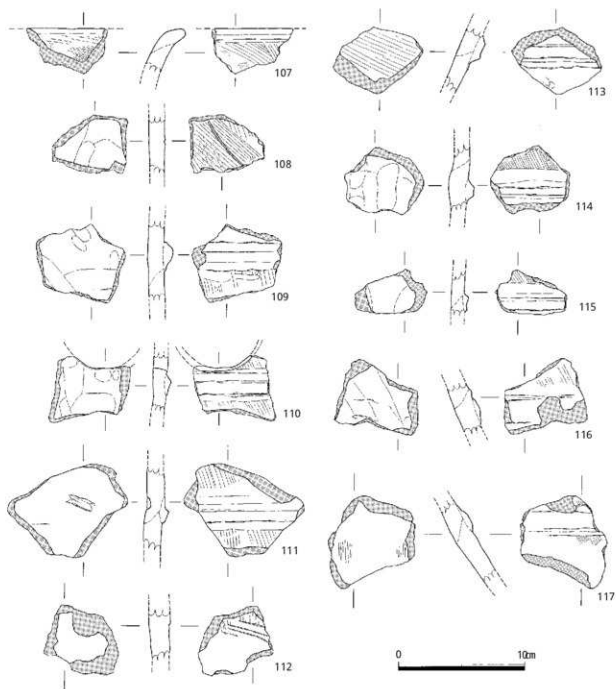
円筒埴輪 (101)～(115)は円筒埴輪と考えられる個体である。大半が小片であるが、6点については反転復元することができた。

(101)はやや外傾して直線的に立ち上がる口縁部付近の破片で、残存状況は1/10周程度である。口縁端部にはわずかに外傾する明瞭な端面を有する。外面にはナナメ方向のハケが施され、「×」形のヘラ記号が描かれている。外面のハケメは、破片の最下部と口縁端部付近においてヨコナデによりナデ消されており、破片のすぐ下に最上段突帯を復元することができる。内面にはナナメ方向のナデが見られ、ハケメはみとめられなかった。口径は18.5cmに復元される。(102)は図化した埴輪のうち唯一須恵質のもので、底部付近の約1/8周が残存する。外面はタテハケ、内面はナナメ方向のナデが施され、底面には沈線状の圧痕が数多くみとめられた。底径は14.4cmに復元される。(103)は底部付近の



図24 平塚古墳関連遺物① (S=1/3)

破片で、約1/8周分が残存する。外面にはナナメ方向の粗いハケメ、内面には指頭圧痕が残存していた。復元される底径は18.5cmである。(104)は突帯周辺の破片で、約1/5周が残存する。外面には三角形に近い断面形状を示す突帯が巡らされ、その上下にはタテハケがみとめられた。(105)は底部から2条目突帯にかけて残存する破片で、1条目突帯付近を中心に約1/4周が残存する。体部の外面にはタ



[107-109・114・116・117] 3 t裏込め [110・112] 2 t裏込め
 [113・115] 2 t表土層 [111] 3 t包含層

図25 平塚古墳関連遺物② (S=1/3)

テハケが施され、断面形状が台形の突帯を、水平に対して大きく波打った状態で貼り付けている。底部外面の下半にはタテハケが消される部分が存在しており、底部調整がおこなわれていると考えられる。内面はタテ方向のナデで仕上げられるが、底部下端付近には指頭圧痕が残存していた。なお底面には沈線状の圧痕がみとめられた。復元される底径は約19.2cmである。(106)は底部付近の約1/6周が残存する個体である。突帯の断面形状は三角形に近いもので、底部の外面はタテハケ、内面はケズリによ

り仕上げられていた。底径は22cmに復元される。

図25の(107)は円筒埴輪口縁部の小片である。口縁端部は外反して開き、端部は丸くおさまられている。内外面ともにハケメが施され、口縁端部付近はナデにより仕上げられる。(108)はヘラ記号を有する個体であるが、部位は不明である。(109)～(111)は円筒埴輪の小片で、いずれも断面が三角形に近い形状の突帯を持つ。外面には一次調整のタテハケが見られ、突帯及びその周辺はヨコナデにより仕上げられる。なお(110)では円形透孔の存在を確認することができる。(112)は、一次調整のタテハケの上に板状工具によると思われる押圧を施している個体である。底部付近の破片であると推定される。(113)～(115)は突帯の断面形状が台形を呈する個体である。このうち(113)は外傾するものと考えられ、内面にハケメを有していることから、最上段突帯付近の破片と推定される。

その他の埴輪 (116)・(117)は、他の個体に比して低く不明瞭な突帯を持つ個体である。突帯の形状は、突出するというよりも上下の沈線により画される程度のもので、これを参考に復元される傾きは他の個体と異なっている。小片であるため全容を推定するのは困難であるが、ここでは形象埴輪の破片である可能性を考えておきたい。

埴輪の時期と性格 図示した15点の円筒埴輪片は、いずれも外面に一次調整のタテハケがみとめられ、二次調整が省略されるものであった。黒斑を有するものは見られず、焼成は大半が土師質であったが、須恵質の個体(102)も含まれていた。突帯の形状は、断面形状が三角形に近いもの(104・106・109～111)と、台形のもの(105・113～115)の大きく2種類が存在している。また、(105)や(112)の外面には底部調整が施され、(106)の底部内面にはケズリ調整がおこなわれていた。

外面二次調整の省略や、底部調整などの特徴から、これらの埴輪は川西編年第V期に属するものとして⁵⁾することができる。これにより出土埴輪の時期は5世紀後半以降に位置付けることができる。さらに、今回出土の埴輪の性格を考える上で以下のことが参考となるであろう。

付載2で示したように、今回出土した埴輪の胎土の多くが、奈良市菅原東遺跡付近で産出されるものと類似することが明らかになった。菅原東遺跡では川西編年第V期の埴輪を生産する埴輪窯が確認されており、大和A類と呼ばれるタイプの円筒埴輪が生産されていることが知られる。今回出土した円筒埴輪は、断続ナデ技法の採用を確認することはできなかったものの、上記の技法的な特徴や、底部高と突帯間隔がほぼ一致する個体(105)が存在する点などが、大和A類とされる埴輪群と共通している。こうしたことから、平塚古墳に使用された埴輪の一部が、菅原東遺跡埴輪窯で生産された可能性が高いと言えるだろう。しかし、付載2で4類型とされた一群の中にも(106)など明らかに異なる製作技法が採用される個体も存在しており、すべてが菅原東遺跡で生産されたものかどうかは再考の余地がある。

一方で在地産の胎土を使用した埴輪も一定量存在している点に注意される。桜井市内で菅原東遺跡埴輪窯産の埴輪を使用するとされる古墳は、珠城山3号墳と毘沙門塚古墳の2基が知られているが、いずれも在地産の胎土を使用する埴輪が一定量含まれているとされている⁶⁾。こうした埴輪のあり方は、桜井市北部に築造される後期古墳の性格を考える上で興味深い点である。

このように、今回出土した埴輪の大半は、奈良市菅原東遺跡の埴輪窯で生産された可能性が高いと考えられる。菅原東遺跡産の埴輪は、奈良盆地北中部の古墳に供給されることが知られるが、その大半はMT15型式期以降の時期に属する古墳である。このことを参考にするなら、今回確認された埴輪の時期もまたMT15型式期以降、すなわち6世紀代に求めることができるだろう。

5. まとめ

纏向遺跡第135次調査では、纏向遺跡および平塚古墳に関していくつかの新しい知見を得ることができた。以下であらためて検出遺構や出土遺物の意義を考えておきたい。

溝1について 溝1からは多くの土器が出土したが、その形状や埋土の状況、遺物組成などから溝の性格を推定することは難しい。時期については、弥生時代後期後半に属するものとしてとることができる。纏向遺跡における弥生時代後期後半の遺構としては、東田土壙1・2³⁾や纏向石塚周溝北肩で検出された土坑のほか、第73次調査で確認された溝などが知られている。今回確認された溝1以外はいずれも遺跡の西半部に分布する傾向が見られるが、遺構密度は低く、散在的なあり方を示している。纏向遺跡は庄内式期初頭以降に急速な発展を見せ、布留0式期にかけて集落の最盛期を迎えるが、溝1はそうした発展期に先行する時期に位置付けられる。これら弥生時代後期後半の遺構は、纏向遺跡における大規模集落の形成過程を考える上で重要な資料であると言えるだろう。

平塚古墳について 今回の調査では墳丘施設に関する遺構は一切確認されなかったが、平塚古墳に埴輪が伴うことを明らかにすることができた。確認された埴輪から、平塚古墳の築造時期は古墳時代後期に推定することができる。

既に触れたように、平塚古墳の埴輪には菅原東遺跡埴輪窯から供給されたものが含まれる可能性が高い。桜井市北部には川西V期に属する埴輪を持つ古墳がいくつかみとめられるが、小規模な方墳である勝山東古墳などでは在地で製作された埴輪を使用しており、毘沙門塚古墳などの前方後円墳には菅原東遺跡埴輪窯から供給されたと考えられる埴輪が含まれる点は、既に指摘されているところである。¹²⁾平塚古墳の墳丘形態については今後の調査を待って検討する必要があるが、埴輪の使用傾向が周辺の方後円墳と類似する点は、この古墳の性格を考える上で参考にすべきであろう。

菅原東遺跡での埴輪生産の背景には、古墳時代中期末から後期前葉に見られる中央政権内の政治変動が大きく関わっていると考えられる。そこで生産された埴輪を採用したと考えられる平塚古墳の被葬者もまた、当時の政治変動に関わった人物と考えることができるだろう。また桜井市北部地域には、菅原東遺跡で生産されたとされる埴輪と、在地産とされる埴輪の両方を採用する古墳が複数存在しており、注意されるところである。こうした状況は、上記の政治変動期における桜井市北部地域の位置付けを考える上で重要な手がかりとなると思われる。機会をあらためて検討する必要がある。

纏向遺跡の南東部では、これまで調査事例が少なく不明な部分が多いのが現状であった。今回の調査では纏向遺跡の最盛期に先行する時期の遺構と、後出する時期の古墳に伴う埴輪を確認することができた。このほか出土遺物の中には庄内式期や布留式期に属する土器も含まれており、周辺に当該期

の居住域が存在することが想起される。依然として不明な部分が多い縄向遺跡東部の状況が明らかにすることは、遺跡の全体像を考える上で大きな前進となるであろう。(福辻)

【註記】

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所(編) 1988『奈良県遺跡地図』第2分冊 奈良県教育委員会
- 2) 秋山日出雄(編) 1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会
- 3) 9)、10)を参照
- 4) 松本洋明 1988『十六面・薬王寺遺跡の中・近世土器に関する考察』『十六面・薬王寺遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
- 6) 鎌方正樹・安井宣也・中島和彦 1992『菅原東遺跡埴輪窯跡をめぐる諸問題』『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1991 奈良市教育委員会
- 7) 奥田尚 1995『埴輪の表面に見られる砂礫』『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会
奥田尚 2003『大和・河内の埴輪の表面に見られる砂礫』『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会
ただし、珠城山3号墳の埴輪については、在地産ではなく奈良北部の2種類の胎土を使用するという分析結果もある。
三辻利一・秋森秀己 1993『珠城山古墳(3号墳)出土埴輪の蛍光X線分析』『国史跡 珠城山古墳群範囲確認調査報告書』桜井市教育委員会・花園大学考古学研究室
- 8) 6)、7)を参照
- 9) 石野博信・岡川高功(編) 1976『縄向』桜井市教育委員会
- 10) 森原儀征 1995『縄向石塚古墳の概要』『縄向石塚古墳第1期整備事業 範囲確認調査(第5～第7次)概報』(財)大和文化財保存会 桜井市教育委員会
- 11) 10)参照
- 12) 橋本輝彦 1995『縄向遺跡第79次発掘調査報告』『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会
- 13) 鎌方正樹・中島和彦・根上直子 1995『奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究(下)』『古代文化』47巻6号 古代学協会
鎌方正樹 2003『円筒埴輪の地域性と工人の動向』『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会

表2 縄向遺跡第135次出土土器一覧表

図番号	写真図版	器種	出土遺構・部位	口径(復元) [cm]	胎高(残存) [cm]	底径(復元) [cm]	色調(外面)	残存状況
図16-1	図版7-1	鉢	2r 溝1	(13.1)	7.4	4.1	にぶい褐色(7SYR6/4)	全体1/2
図16-2	図版7-2	鉢	2r 溝1	(12.4)	8.2	4.0	にぶい黄褐色(10YR6/4)	全体2/3
図16-3	図版7-3	鉢	2r 溝1	(12.4)	7.4	4.5	灰黄褐色(10YR5/2)	全体1/2
図16-4	図版7-4	鉢	3r 溝1	(13.1)	7.3	4.2	にぶい褐色(7SYR6/3)	全体90%以上
図16-5	図版7-5	鉢	3r 溝1		(3.0)	4.3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	底部分層
図16-6	図版7-6	鉢	2r 溝1		(4.8)	4.2	にぶい褐色(7SYR5/4)	底部分層
図16-7	図版7-7	鉢	2r 溝1	(14.0)	(6.7)		にぶい褐色(7SYR6/4)	口縁1/2
図16-8	図版8-8	有孔鉢	2r 溝1		(5.8)	4.1	褐色(7SYR7/6)	下下部全層
図16-9	図版8-9	実蓋	2r 溝1	つまみ径3.3	(4.3)		褐色(7SYR6/6)	つまみ部全層
図16-10	図版8-10	実	2r 溝1	(12.4)	(3.2)		にぶい褐色(7SYR5/4)	口縁1/6
図16-11	図版8-11	実	2r 溝1	(15.9)	(10.7)		にぶい褐色(7SYR5/4)	口縁～底部1/2
図16-12	図版8-12	実	2r 溝1	(16.4)	(10.8)		明褐色(7SYR5/6)	口縁～底部1/3
図16-13	図版8-13	実	2r 溝1	(15.5)	(2.9)		にぶい褐色(7SYR7/4)	口縁1/5
図16-14	図版8-14	実	2r 溝1	(17.4)	24.6	5.5	にぶい黄褐色(10YR6/4)	全体1/2
図17-15		広口壺	2r 溝1	(13.7)	(3.0)		にぶい褐色(7SYR6/4)	口縁1/5
図17-16		(広口長頸壺)	3r 溝1	(18.6)	(2.9)		褐色(5YR6/6)	口縁1/6
図17-17	図版9-17	長頸壺	2r 溝1	10.7	(0.6)		褐色(5YR6/6)	口縁部全層
図17-18	図版8-18	長頸壺	2r 溝1	(10.4)	(13.2)		にぶい褐色(7SYR6/4)	口縁部1/2
図17-19		長頸壺	2r 溝1	(9.0)	(3.2)		にぶい黄褐色(10YR6/4)	口縁部1/3
図17-20	図版8-20	長頸壺	2r 溝1	(10.2)	(8.0)		にぶい褐色(7SYR6/4)	口縁部1/2
図17-21	図版8-21	長頸壺	2r 溝1	(9.2)	(5.1)		にぶい黄褐色(10YR6/4)	口縁部1/4
図17-22	図版9-22	長頸壺	2r 溝1	(8.3)	18.0	3.5	褐色(7SYR6/6)	全体1/2

図17-23	図版9-23	長距離	3r	溝1	(11.5)	5.0	にんじん黄褐色 (10YR5/4)		体部以下全周
図17-24	図版9-24	長距離	2r	溝1	(12.1)	4.7	にんじん黄褐色 (10YR7/4)		体部以下2/3
図17-25	図版9-25	(要)	2r	溝1	(3.0)	4.1	灰褐色 (7.5YR4/2)		底部全周
図17-26	図版9-26	壺	2r	溝1	(4.2)	3.9	褐色 (7.5YR6/6)		底部全周
図17-27	図版9-27	壺	3r	溝1	(3.3)	3.7	灰赤褐色 (10YR4/2)		底部全周
図17-28	図版9-28	壺	2r	溝1	(3.9)	5.4	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		底部全周
図18-29		高坏	2r	溝1	(14.7)	3.7	灰赤褐色 (10YR4/2)		口縁1/6
図18-30	図版9-30	高坏	3r	溝1	(9.3)		にんじん赤褐色 (5YR5/4)		胴部4/5
図18-31	図版9-31	高坏	2r	溝1	(12.1)		にんじん黄褐色 (10YR6/4)		坏-胴部1部/2
図18-32	図版10-32	高坏	3r	溝1	(15.0)	13.4	にんじん黄褐色 (10YR6/4)	(脚注 11.7)	全体3/4
図18-33	図版10-33	壺台	2r	溝1	(14.2)	13.0	褐色 (7.5YR6/6)		受皿以下3/4
図19-34	図版10-34	須恵形・坏身	3r	黒褐色土層	12.6	5.1	黄灰色 (2.5Y5/1)		全体2/3
図19-35	図版10-35	(壺台)	2r	黒褐色土層	(10.6)	7.4	にんじん黄褐色 (10YR7/4)		体部全周
図19-36		高坏	3r	黒褐色土層	(11.1)	3.1	明赤褐色 (5YR5/6)		口縁1/6
図19-37		高坏	2r	黒褐色土層	(1.9)	(1.9)	にんじん褐色 (7.5YR5/4)		胴部上半全周
図19-38		高坏	3r	黒褐色土層	(5.4)	(脚注 8.6)	にんじん黄褐色 (10YR5/3)		胴部2/3
図19-39		高坏	3r	黒褐色土層	(17.4)	3.9	にんじん黄褐色 (10YR7/4)		口縁1/7
図19-40		高坏	2r	黒褐色土層	(20.4)	3.1	褐色 (5YR6/6)		口縁1/4
図19-41		高坏	2r	黒褐色土層	(7.0)	(7.0)	にんじん褐色 (7.5YR6/4)		胴部全周
図19-42		壺	2r	黒褐色土層	(10.8)	2.8	褐色 (5YR6/6)		口縁1/5
図19-43		台付壺	2r	黒褐色土層	(1.9)	(1.9)	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		胴部1/6
図19-44	図版10-44	壺	2r	黒褐色土層	(10.0)	2.7	褐色 (7.5YR6/6)		体部全周
図19-45		壺	2r	黒褐色土層	(14.0)	3.2	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		口縁1/10以下
図19-46		壺	2r	黒褐色土層	(14.9)	4.9	にんじん褐色 (7.5YR5/4)		口縁1/6
図19-47		壺	2r	黒褐色土層	(14.7)	4.6	にんじん黄褐色 (10YR6/3)		口縁1/6
図19-48		壺	2r	黒褐色土層	(14.6)	4.1	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		口縁1/10
図19-49		壺	3r	黒褐色土層	(17.5)	4.5	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		口縁1/8
図19-50		壺	2r	黒褐色土層	(6.4)		にんじん黄褐色 (10YR6/4)		胴部1/5
図19-51		鉢	3r	黒褐色土層	(2.9)	4.9	にんじん黄褐色 (10YR6/3)		底部全周
図19-52		鉢	2r	黒褐色土層	(2.8)	(3.2)	にんじん褐色 (7.5YR5/4)		底部1/2
図19-53		(鉢)	2r	黒褐色土層	(3.9)	4.6	にんじん黄褐色 (10YR5/3)		底部全周
図19-54		壺	2r	黒褐色土層	(4.4)	4.3	褐色 (7.5YR4/4)		底部全周
図19-55		壺	3r	黒褐色土層	(2.1)	(4.4)	にんじん黄褐色 (10YR5/4)		底部1/2
図19-56		壺	2r	黒褐色土層	(3.0)	4.6	にんじん褐色 (7.5YR5/4)		底部全周
図19-57		壺	2r	黒褐色土層	(4.5)	3.9	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		底部全周
図19-58		壺	2r	黒褐色土層	(3.2)	4.4	にんじん黄褐色 (10YR7/3)		底部全周
図19-59		壺	3r	黒褐色土層	(3.6)	(3.8)	にんじん黄褐色 (10YR5/4)		底部1/2
図19-60		壺	2r	黒褐色土層	(3.7)	4.9	にんじん黄褐色 (10YR5/4)		底部4/5
図19-61		壺	2r	黒褐色土層	(3.8)	4.9	にんじん黄褐色 (10YR5/4)		底部全周
図19-62		有孔鉢 (要)	2r	黒褐色土層	(3.8)	(3.8)	褐色 (7.5YR6/6)		底部1/2
図20-63		長距離	2r	黒褐色土層	(12.3)	3.4	灰褐色 (7.5YR4/2)		口縁1/4
図20-64		長距離	3r	黒褐色土層	(9.0)	8.1	にんじん赤褐色 (5YR5/4)		口縁部1/3
図20-65		仏口壺	2r	黒褐色土層	(14.1)	8.0	褐色 (5YR6/6)		口縁部1/6
図20-66		壺	2r	黒褐色土層	(20.0)	3.5	褐色 (7.5YR7/6)		口縁1/8
図20-67		壺	2r	黒褐色土層	(5.4)	3.4	褐色 (7.5YR6/6)		胴部1/6
図20-68		二重口縁壺	2r	黒褐色土層	(19.9)	6.1	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		口縁1/5
図20-69		壺	2r	黒褐色土層	(4.1)		褐色 (5YR7/8)		胴部1/6
図20-70		小形丸底鉢	3r	黒褐色土層	(11.4)	4.0	褐色 (5YR6/6)		胴部1/5
図20-71		鉢	2r	黒褐色土層	(12.4)	6.1	褐色 (5YR6/6)		口縁-体部1/8
図20-72		鉢	2r	黒褐色土層	(11.7)	7.8	4.1 褐色 (7.5YR7/6)		全体1/2
図20-73		鉢	2r	黒褐色土層	(11.5)	7.6	(3.4) にんじん黄褐色 (10YR6/4)		全体1/6
図20-74		鉢	2r	黒褐色土層	(29.9)	(7.2)	にんじん褐色 (7.5YR6/4)		口縁1/6
図20-75		鉢	2r	黒褐色土層	(28.1)		(4.5) 褐色 (5YR6/8)		口縁1/5底部全周
図22-77		高坏	3r	裏込め	(18.9)	(4.1)	にんじん褐色 (7.5YR5/4)		口縁1/10
図22-78		高坏	3r	裏込め	(19.8)	(4.8)	にんじん黄褐色 (10YR5/3)		坏部1/6
図22-79		高坏	3r	裏込め	(3.9)	(8.8)	にんじん黄褐色 (10YR6/3)		胴部1/8
図22-80		土蓋	2r	裏込め	(22.2)	(2.8)	にんじん黄褐色 (10YR7/4)		口縁1/8
図22-81	図版10-81	瓦器塊	3r	裏込め	(8.7)	(3.7)	灰白色 (2.5Y8/2)		口縁1/5
図22-82	図版10-82	瓦葺蓋	3r	裏込め	(29.3)	(3.9)	黄灰色 (2.5Y5/1)		全体1/10
図22-83		鉢	3r	裏込め	(3.4)	3.6	にんじん褐色 (7.5YR6/4)		底部全周
図22-84		鉢	3r	裏込め	(3.5)	3.5	にんじん黄褐色 (10YR6/3)		底部全周
図22-85		鉢	3r	裏込め	(3.3)	4.2	にんじん黄褐色 (10YR5/3)		底部全周
図22-86	図版10-86	鉢	3r	裏込め	12.5	8.1	4.5 にんじん黄褐色 (10YR5/3)		口縁1/8
図22-87		壺	3r	裏込め	(3.6)	4.8	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		底部全周
図22-88		長距離	3r	裏込め	(6.4)		にんじん黄褐色 (10YR6/4)		胴部1/2
図22-89		壺	3r	裏込め	(2.4)	5.6	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		底部全周
図22-90		壺	2r	裏込め	(2.1)	2.9	にんじん黄褐色 (10YR6/3)		底部全周
図22-91		壺	3r	裏込め	(3.7)	3.9	にんじん褐色 (5YR6/4)		底部全周
図22-92		壺	2r	裏込め	(2.4)	3.9	にんじん黄褐色 (10YR5/3)		底部全周
図22-93		壺	3r	裏込め	(2.4)	3.9	にんじん黄褐色 (10YR6/4)		底部全周
図22-94		壺	3r	裏込め	(3.3)	4.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2)		底部2/3
図22-95		壺	3r	裏込め	(5.2)	(3.1)	暗灰黄色 (2.5Y5/2)		底部1/2
図22-96		壺	3r	裏込め	(3.9)	3.9	暗灰色 (10YR4/1)		底部全周
図22-97		有孔鉢 (要)	3r	裏込め	(2.4)	(3.4)	褐色 (7.5YR6/6)		底部1/2

第5節 纏向遺跡第136次発掘調査報告

1. はじめに

纏向遺跡第136次調査は桜井市大字箸中506番地1において、纏向遺跡の範囲確認を目的として実施された(図26)。調査対象地は纏向遺跡の南東部に位置する水田耕作地で、南側約150mを西流する纏向川によって形成された扇状地上に立地している。周辺は東から西へと緩やかな傾斜をみせており、対象地の北縁付近には比高差1～2mの段丘崖が東西方向へと続いている。この段丘崖の南に沿う位置では以前から旧河川が存在が推定されており¹⁾、今回の調査ではこの旧河川が確認されることが想定された。また、これまで纏向遺跡の東側一帯ではほとんど発掘調査が行われていなかったことから、遺跡内の東側の状況を考える手がかりが得られることが期待された。なお、調査は平成16年2月5日から3月9日にかけて実施した。調査面積は65㎡である。

2. 調査方法と層序・遺構(図27)

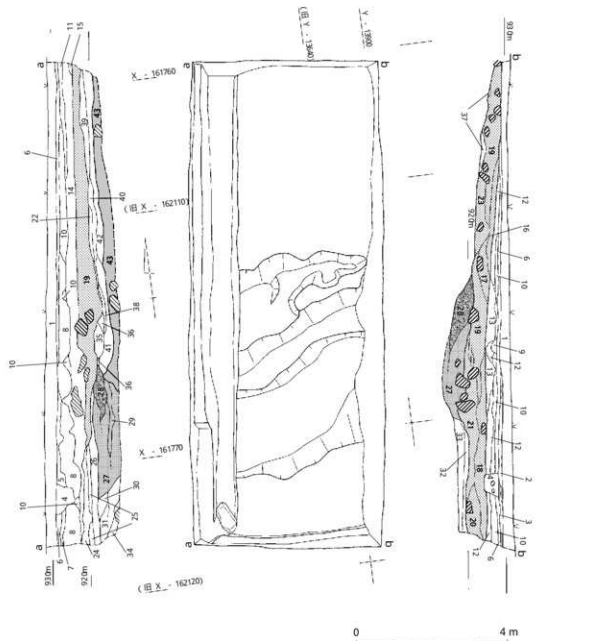
対象地の北側に南北13m、東西5mの調査区を設定し、人力によって掘削を開始した。地表下約30cmまでは現代の耕作土が堆積しており(1層)、その下層では一部の整地土(8層)を除くと、全てが流水によると考えられる堆積であった。

現代耕作土の直下に見られた灰黄褐色～暗オリーブ褐色の砂質土層(10～14層)を除去すると、最大で径50cm程度の石塊を含んだ砂礫層が、厚さ20～50cmにわたって堆積していた(砂礫層1、16～23層)。この砂礫層1には弥生土器や古式土師器の破片が大量に含まれており、その総量はコンテナケース6箱分に相当する。なおこの層からは、後述のように須臾器や土釜片などが少量ではあるが出土していることから、中世以降の洪水による堆積物と考えられる。

砂礫層1を掘削して除去したところ、調査区の北半部ではオリーブ黒色～黒色の砂質土(38～40層)が安定して広がる状況が確認された。一方調査区南半部では、砂礫層1と同様に人頭大の石塊を大量に含んだ砂礫層(砂礫層2、27層)と、黒色粘質土(28層)が確認された。砂礫層2は北東から南西方向へと走る洪水堆積と考えられ、幅約3mを測る。砂礫層2及び黒色粘質土は多くの土器片を含んでおり、それらから布留07式期頃に堆積したものと考えられる。なお砂礫層2とその南側下層の河川堆積層(30～34層)は、地表下約2m以上まで続くことが観察されたが、湧水による崩落の危険性があるためそれ以上の掘削を断念した。

調査区北半のオリーブ黒色土は厚さ30cm程度で、庄内式期に属すると考えられる土器小片が数点検出された。その下層のにぶい黄褐色を呈する砂質土層(基盤層、43層)からは、遺物が1点も確認されなかった。このことから、このにぶい黄褐色砂質土層は周辺の基盤をなす古い扇状地堆積であると考えられる。

遺構としては、現代耕作土直下において中～近世頃と考えられるものが検出されたが、それ以下は基盤層にいたるまで流水堆積層が続いており、遺構を確認することはできなかった。



- | | |
|---|---|
| <p>1 腐葉褐色 (2594 2) 細粒砂混シルト</p> <p>2 腐葉褐色 (2595 2) 細粒砂混シルト</p> <p>3 腐葉褐色 (2595 2) 細粒砂混粘細粒砂</p> <p>4 にじみ黄褐色 (109R5 4) 粘細粒砂混シルト (拳大の石を大量に含む)</p> <p>5 黄褐色 (2595 3) 粘細粒砂混シルト</p> <p>6 黄褐色 (2595 3) シルト混粘細粒砂</p> <p>7 黄褐色 (109R3 2) 粘細粒砂混シルト</p> <p>8 褐色 (109R4 6) 粘細粒砂混粘細粒砂 (拳大一人頭大の石塊含む)</p> <p>9 オリーブ褐色 (2594 3) シルト混粘細粒砂 (黄褐色)</p> <p>10 黄褐色 (109R4 2) 粘細粒砂混シルト</p> <p>11 黄褐色 (109R5 3) 粘細粒砂混シルト</p> <p>12 黄褐色 (109R5 2) 粘細粒砂混シルト</p> <p>13 灰オリーブ褐色 (2593 3) シルト混粘細粒砂を少量含む</p> <p>14 オリーブ褐色 (109R5 3) 粘細粒砂混粘細粒砂</p> <p>15 にじみ黄褐色 (109R5 3) 粘細粒砂混粘細粒砂</p> <p>16 黄褐色 (2597 4) 中粒砂混粘細粒砂</p> <p>17 黄褐色 (2597 4) 粘細粒砂混粘細粒砂 (黄褐色シルトを少量含む)</p> <p>18 にじみ黄褐色 (109R6 4) 中粒砂 (人頭大の石塊含む)</p> <p>19 黄褐色 (2595 3) 中粒砂混粘細粒砂 (人頭大以上の石塊を少量含む)</p> <p>20 にじみ黄褐色 (2596 4) 粘細粒砂混粘細粒砂 (人頭大以下の石塊含む)</p> <p>21 オリーブ褐色 (7593 1) シルト混粘細粒砂</p> <p>22 腐葉褐色 (2594 2) 粘細粒砂</p> <p>23 黄褐色 (109R3 2) 粘細粒砂混シルト (人頭大以下の石塊含む)</p> | <p>24 にじみ黄褐色 (2596 4) 粘細粒砂混粘細粒砂と黄褐色 (2593 2) シルトが少量含まれる互層をなす</p> <p>25 黄褐色 (2592 1) 粘細粒砂混シルト (木片含む)</p> <p>26 黄褐色 (2594 2) 中粒砂混粘細粒砂とオリーブ褐色 (593 3) シルトが少量含まれる互層をなす</p> <p>27 にじみ黄褐色 (109R5 4) 粘細粒砂混粘細粒砂 (人頭大以上の石塊を少量含む) 【砂層2】</p> <p>28 黄褐色 (2592 1) 粘細粒砂混シルト (炭化物を含む、拳大の硬石含む) 【黄色粘質土】</p> <p>29 灰黄褐色 (2594 2) 中粒砂混粘細粒砂 (拳大の硬石含む)</p> <p>30 黄褐色 (2592 1) 粘細粒砂混粘細粒砂</p> <p>31 にじみ黄褐色 (109R5 3) 粘細粒砂 (黄色シルトを少量含む)</p> <p>32 黄褐色 (592 1) 粘細粒砂混粘細粒砂</p> <p>33 にじみ黄褐色 (109R5 3) シルト混粘細粒砂 (径 10mm以下の硬石含む)</p> <p>34 黄褐色 (592 1) 粘細粒砂混シルト (木片含む)</p> <p>35 黄褐色 (2592 1) 粘細粒砂混粘細粒砂 (腐葉褐色粘細粒砂を少量含む)</p> <p>36 にじみ黄褐色 (2598 4) 粘細粒砂</p> <p>37 黄褐色 (759R3 3) 粘細粒砂混シルト (拳大以下の硬石含む)</p> <p>38 オリーブ褐色 (593 1) 粘細粒砂</p> <p>39 黄褐色 (2592 1) 粘細粒砂混シルト (小硬石含む)</p> <p>40 オリーブ褐色 (593 2) 粘細粒砂混粘細粒砂 (小硬石含む)</p> <p>41 灰褐色 (1094 1) 中粒砂混シルト (小硬石含む)</p> <p>42 オリーブ褐色 (7593 2) 中粒砂混シルト (小硬石含む)</p> <p>43 にじみ黄褐色 (109R4 3) シルト混粘細粒砂 (人頭大以下の硬石含む) 【黄褐色】</p> |
|---|---|

図27 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

3. 出土遺物

遺物の概要 わずか65㎡の小規模な調査であり、なおかつ顕著な遺構も確認されなかったが、コンテナケースで20箱以上に相当する遺物が出土している。出土遺物の大半は古墳時代前期を中心とする時期の土師器であり、このほか須恵器や土製品、木製品が検出された。以下で層別別に各遺物の形態的特徴や調整について示すことにする。なお土器の残存状況・分量・色調などについては一覧表(表3)に記している。

砂礫層1出土土器 図28の(1)は内面のみを黒化処理する黒色土器で、底部には高台を有している。内面はミガキ、外面は回転ナデにより仕上げられる。(2)は外反して広がる口縁を持つ広口形の土釜である。ほぼ水平方向にのびる鈔が貼り付けられ、内外面ともヨコナデ調整が見られた。

(3)は複合口縁を有する小形丸底壺である。口縁部はやや厚手で、その端部は丸くおさめられる。

(4)・(5)は小形丸底壺で、前者は内湾する口縁、後者はほぼ直線的に広がる口縁部形態を示している。(4)の外面はタテ方向のミガキにより仕上げられていた。(6)・(7)は有段口縁を持つ小形丸底鉢である。(7)の内面にはミガキが施されていた。(8)は体部に円孔が貫通する形態の小形器台である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がって外反し、その端部は丸くおさめられる。内外面ともにミガキにより仕上げられていた。(9)は小形器台で、皿状の体部に短く広がる口縁部を持つ個体である。内面にはミガキがみとめられた。(10)は小形器台の脚台部と考えられる。裾部中ほどの外面には、円筒状の工具によるであろう刺突が3方向に配されていた。(11)は脚径わずか4.4cmのミニチュア器台である。体部には円孔が貫通しており、脚部の内面にはハケメがみとめられた。(12)は体部に円孔が貫通する小形器台で、直線的に広がる脚部の中程には円形透孔が、開けられている。(13)は脚部下半が内湾する形態の小形器台である。脚部中程には円形の透孔が2個をセットとして2方向に配され、その他の1個を含めて計5ヶ所に穿たれていた。脚端部には端面を有する。(14)は器台で、円筒形の体部には上段に5方向、下段に4方向の円形透孔が配されている。外面はタテ方向のミガキが施されていた。(15)は外反して広がる口縁部を持つ器台である。口縁部と体部の境界の屈曲は不明瞭であり、体部には上下各5方向に計10個の円形透孔が開けられている。

(16)は高坏と考えられる個体である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がった後外側に大きく屈曲する形態で、その外面には波状文が施されていた。(17)は内湾する口頸部と丸く張った体部を持つ瓢壺である。体部外面には貝殻により施文された連弧文がみとめられる。(18)は、やや内傾する頸部と外反して広がる口縁部を持つ壺である。口縁部付近はわずかに内湾して上方に肥厚させる形態を示す。(19)は広口壺で、外反する口縁の端部には弱い端面を有する。内外面ともにハケメがみとめられた。(20)は大きく外反して広がる口縁部を持つ広口壺で、口縁端部の外側には2条の沈線が巡らされる。頸部外面には列点状の文様が施されていた。(21)は二重口縁壺の口頸部である。頸部は外反して広がり、その上方にはさらに外反して広がる口縁部が付く。頸部と口縁部の境界の外面下方には、突帯が巡らされていた。(22)は複合口縁壺の口頸部である。頸部は大きく外反し、その上方に内傾してわずかに外反する口縁部が付く形態を示す。口縁部の内面にはハケメが施され、外面はヨコナデにより仕上げら

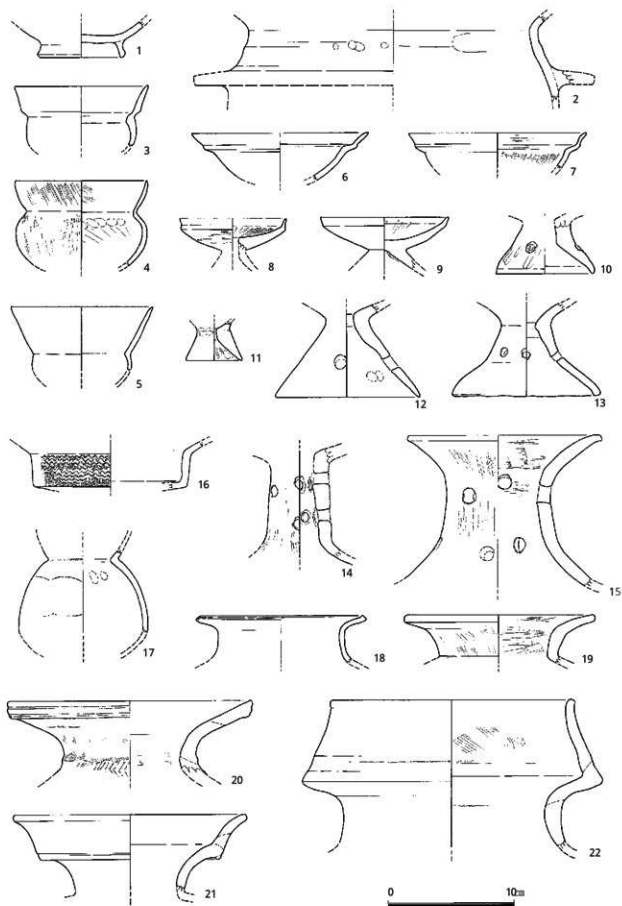


图28 砂礫層1出土土器① (S=1/3)

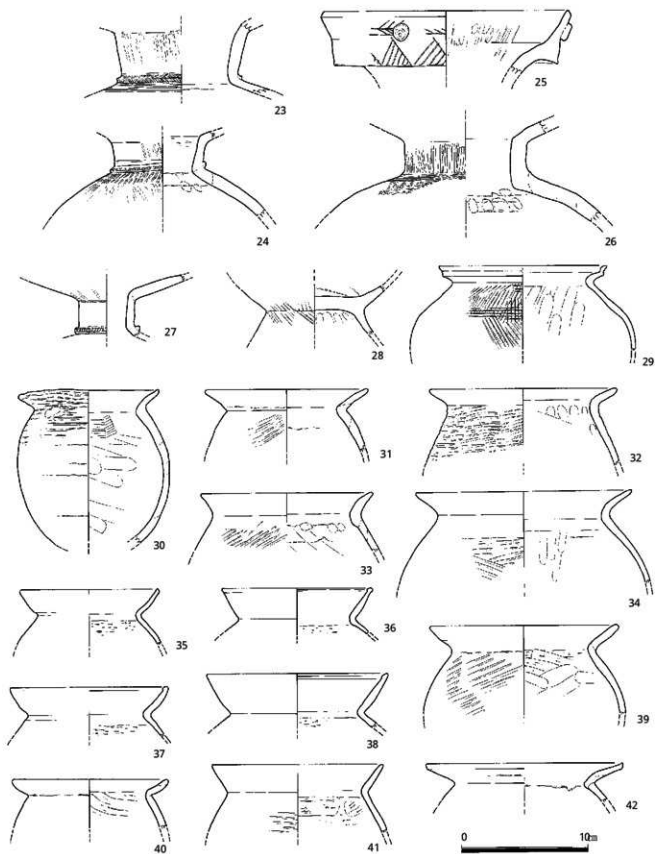


图29 砂礫層1出土土器② (S=1/3)

れていた。

図29の(23)・(24)は二重口縁壺で、やや外傾して直線的に立ち上がる頸部に、屈曲して広がる口縁部が付く個体である。頸部と体部の境界外面には刻目が施される突帯が巡らされ、頸部外面はミガキにより仕上げられる。体部外面は(23)ではヨコハケが見られ、(24)では2段の列点状刺突とミガキが施されていた。なお(24)の頸部内面にはケズリの痕跡がみとめられた。(25)は外反して広がる頸部に外傾する口縁部が付く二重口縁壺である。口縁部外面には鋸歯文・綾杉文などで構成される文様が施され、竹管円形浮文が貼り付けられている。(26)はほぼ垂直に立ち上がる頸部と、そこから屈曲して広がる口縁部を持つ二重口縁壺である。頸部外面にはタテハケ、体部外面にはヨコハケ及び波状文が施されている。(27)は二重口縁壺と考えられる個体である。細く締まった頸部はほぼ垂直に立ち上がり、屈曲して大きく外へと広がる口縁部を持つ。また、頸部と体部の境界外面には刻目を有する突帯がめぐらされている。(28)はS字状口縁台付甕の脚台部付近の破片である。外面にはタテハケが施される。(29)は受口状の口縁を持つ甕で、体部外面には平行沈線をタテ～ナメ方向の後にヨコ方向に施している。体部内面はナデにより仕上げられていた。

(30)はわずかに外反する口縁部と、やや縦長の球形を呈する体部を持つ甕である。口縁から肩部にかけての外面にはタタキメがみとめられ、内面には一部にハケメが見られる。(31)～(34)は甕で、外反して端部を丸くおさめる口縁部を有している。体部外面はタタキ、内面はナデにより仕上げられていた。(35)～(38)は、内湾して端部を内側に肥厚させる口縁を持つ甕である。体部内面にはケズリ調整がおこなわれていた。(39)は、直線的に広がる口縁部とやや丸みのある体部を持つ甕である。体部外面にはタタキメが見られ、内面はケズリ及びナデにより仕上げられている。(40)は甕で、内湾する口縁の端部を丸くおさめる個体である。体部内面はケズリ調整が施されていた。(41)は、直線的に斜め上方へ立ち上がる口縁を持つ甕である。口縁端部は丸くおさめられ、体部外面はタタキ、内面にはケズリ調整がみとめられた。(42)はやや外反して広がる口縁を持つ甕である。口縁端部は上方につまみ上げる形状を示している。

砂礫層 2 出土器 図30の(43)は、手培形土器の蔽部の破片である。端部には幅2～3cm程度の平坦面が形成されており、その前面に2条の線状の浮文と、3個で1セットをなす円形浮文が貼り付けられている。蔽部の外面には細かいハケメがみとめられ、数条の沈線で構成される文様が施されていた。(44)は小形の丸底鉢で、球形に近い体部と外傾する口縁部を有している。口縁部内面にはヨコハケ、体部外面にはタテハケが施されていた。(45)は半球形の体部を持つ丸底の鉢で、短く外側に広がる口縁部を持つ個体である。底部付近にはケズリの痕跡がわずかにみとめられた。(46)は外反する口縁を有する高坏である。口縁端部には外傾する端面が形成されている。(47)は壘形の坏部を持つ小形の高坏である。口縁端部は丸くおさめられ、坏部の内外面にはタテ方向のミガキが施される。

(48)は、外側上方へと直線的に広がる口縁を有する直口壺である。口縁から肩部の外面にかけてはナメ方向のハケメが施され、口縁部内面にはヨコ方向のハケメがみとめられる。(49)は二重口縁壺で、短い頸部とわずかに内湾する口縁部を持つ個体である。口縁端部には端面を有しており、弱い沈

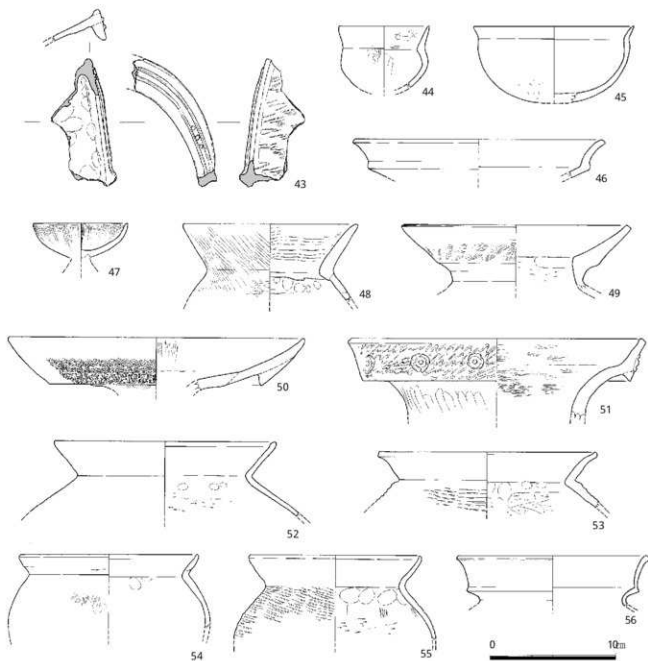


図30 砂礫層2出土土器 (S=1/3)

線が巡らされている。口縁外面にはハケメが施され、頸部内面にはケズリの痕跡がみとめられた。(50)は、大きく広がって内湾する口縁部の外面を垂下させる二重口縁壺である。口縁外面の垂下部分には波状文や細かい刺突文が施されていた。(51)は、外反する頸部に外側上方へと立ち上がる口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部外面には波状文を施し、竹管円形浮文が貼り付けられる。頸部外面はタテ方向のナデにより仕上げられていた。(52)は甕で、直線的に広がって端部を内側に肥厚させる口縁部を持つ。体部の内面にはケズリ調整がおこなわれている。(53)は外反する口縁部を持つ甕で、口縁端部を上方へつまみ上げる個体である。体部外面はタタキ、内面はケズリが施されていた。(54)は、短く内湾する口縁部と丸みのある体部を有する甕である。口縁端部はつまみ上げられ、体部外面にはハ

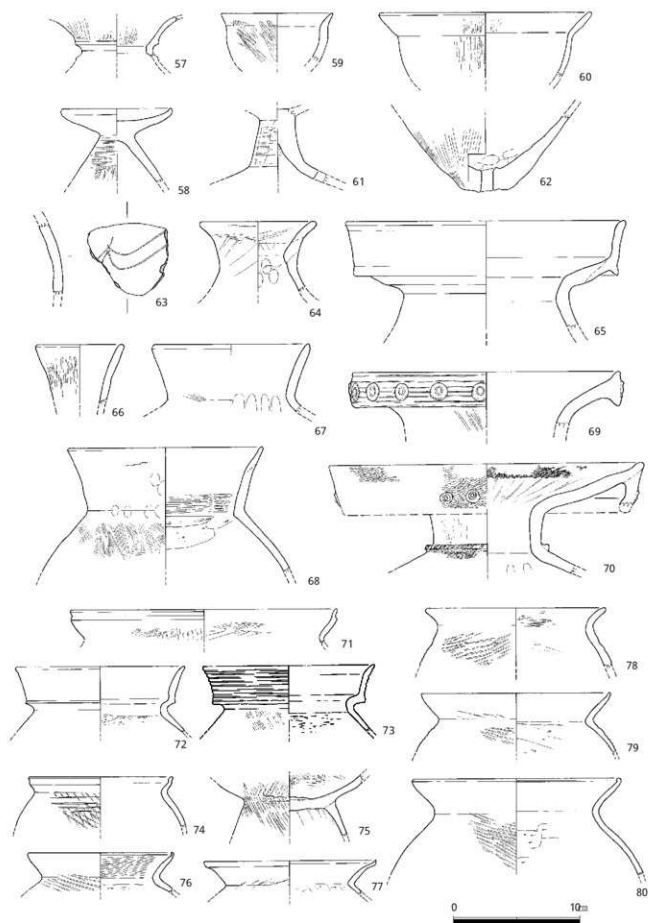


图31 黑色粘質土層出土土器 (S=1/3)

ケメがみとめられた。(55)は、内湾して端部がつまみ上げられる口縁部を持つ甕である。体部外面にはタタキ、内面にはケズリが施される。(56)は複合口縁を持つ甕である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がって外反し、端部を外側に肥厚させている。

黒色粘質土層出土土器 図31の(57)は小形の鼓形器台である。体部は短く、口縁部は外反して大きく広がる形状である。受部の内外面にはミガキが施されていた。(58)は小形器台で、皿状の受部につまみ上げた程度の口縁部が付く形態を示す。脚部外面にはミガキ調整がみとめられる。(59)は小さな口縁部を持つ小形鉢である。体部外面にはミガキが施される。(60)は直線的に広がる口縁部を持つ鉢で、内外面にミガキ調整がおこなわれていた。(61)は高坏で、中実の脚柱部と大きく広がる裾部を持つ個体である。(62)は底部に穿孔を持つ鉢と考えられる。外面にはハケメがほどこされる。(63)は壺の胴部付近の破片と考えられる。外面には主に4本の曲線で構成されるヘラ描きがみとめられた。(64)は小形の器台と思われる個体で、外面には板状工具による調整痕が観察される。

(65)は、やや外傾して直線的に立ち上がる複合口縁を持つ壺である。口縁部と頸部の境界にあたる屈曲部の外側には突帯がみとめられる。頸部下半は緩やかに外側へ広がる形態が推定される。(66)はわずかに外反する細頸壺の口縁部である。外面にはミガキが施されていた。(67)・(68)は、外傾してほぼ直線的にのびる口縁をもつ直口壺である。このうち(68)の体部外面には不定方向のハケメ、口縁内面にはヨコ方向のハケメ、体部内面にはケズリ調整がみとめられた。

(69)は外反して広がる口縁部を有する広口壺である。口縁端部には幅3cm弱の面が形成され、6条の沈線を巡らせた後に竹管円形浮文が貼り付けられている。(70)は垂下口縁を持つ壺で、頸部と体部の境界に刻目を施す突帯が巡らされる。垂下部の外面には、波状文を施した後に竹管円形浮文が貼り付けられる。口縁部内面及び肩部付近にも波状文がみとめられた。

(71)はS字状口縁を持つ甕である。頸部の内外面にハケメが観察される。(72)・(73)はともに複合口縁を持つ甕で、体部内面にはケズリ調整がおこなわれる。(73)の口縁外面には擬凹線文が施されていた。(74)は受口状口縁を持つ甕で、体部外面には平行沈線をナナメ方向の後にヨコ方向に施している。(75)はS字状口縁台付甕の脚部付近の破片である。外面には粗いナナメハケ、内面には細かいヨコハケが観察される。(76)は甕で、口縁端部を内側上方へつまみ上げる個体である。体部外面はタタキ、内面はケズリがみとめられ、口縁の内面にはハケメが施される。(77)は、外反する口縁の端部をつまみ上げる甕である。口縁外面にはタタキが残存し、体部内面はケズリにより仕上げられている。(78)は外反する口縁を持つ甕である。体部外面にはタタキが施される。(79)・(80)は内湾する口縁を有する甕で、体部外面はタタキ、内面はケズリ調整により仕上げられる。なお口縁端部は(79)では上方へつまみ上げられ、(80)は内面に肥厚する形態である。

南側河川堆積層出土土器 図32の(81)は直線的に広がる甕の口縁部で、その端部は上方へつまみ上げられている。(82)は、端部がつまみ上げられる口縁部を持つ甕で、口縁と体部の間に短い頸部が存在する。体部外面はタテハケ、内面はケズリにより仕上げられていた。(83)は、やや突出して中央が凹む底部を有する壺と考えられる個体である。外面にはタテハケが見られ、底部内面の胎土には

砂礫が多く含まれるという特徴がみとめられた。(84)は外反する口縁部を持つ広口壺である。口縁端部には明瞭な端部が形成されている。内面は粗いナデにより仕上げられていた。(85)はパレススタイル壺の口縁部である。口縁端部の外側には面を有しており、弱い沈線が巡らされている。また、口縁の内外面には赤彩が見られた。

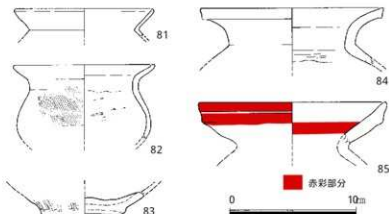


図32 南側河川堆積出土土器 (S=1/3)

砂礫層1出土土製品 図33の(86)は管状の土製品である。全長6.7cm、最大径2.7cmで重さは49.0gを測る。一部に欠損が見られるものの、ほぼ完形の状態を保っていた。穿孔は焼成前に両側からおこなわれており、穿孔の径は両端部で約1cmを測るのに対し、中央部では0.5cm程度であった。外面の色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)である。桜井市内では、これまでに同様の遺物が計14点確認されており、古墳時代初頭から飛鳥時代の時期が考えられている。本例については、砂礫層1に含まれる土器の大半が布留0式期~1式期のものであることから、同様の時期のものである可能性が高いと考えられる。

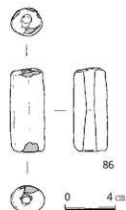


図33 砂礫層1出土土製品 (S=1/3)

南側河川堆積層出土木製品 計2点の木製品が確認されている。図34の(87)は針葉樹製の容器蓋と考えられる個体で、残存長は約30cm、残存高6.4cmを測る。楕円状の平面形態が想定され、ドーム状の天井部形態を持つものと考えられる。端部の下側には幅0.4~0.6cm、深さ0.5cm程度の溝が巡らされていた。大阪府新家遺跡出土の木製容器蓋に類似する形態のものが見られる。図35の(88)は残存長約20cmを測る個体で、厚さは0.5~0.8cmである。外形ラインは緩やかな曲線を描き、一部には傾斜する面が形成され刃部状を呈している。これらの形態的特徴から、木製農工具の刃部付近である可能性が考えられる。使用される樹種はアカガシ亜属である。

出土遺物と各層位の時期 砂礫層1出土土器の大半は布留式古相段階に属するものであったが、須恵器の小片が10数点程度検出されるなど、遺物に時期幅が存在することは明白である。このうち(1)や(2)は11世紀代に下るものと考えられ、砂礫層1の堆積時期はこの頃に考えることができる。一方砂礫層2やその下層の黒色粘質土層からは、須恵器等の出土は見られなかった。遺物の状況から概ね布留0式期頃の堆積と考えてよいであろう。南側河川堆積出土の遺物についても同様の時期を考えることができる。

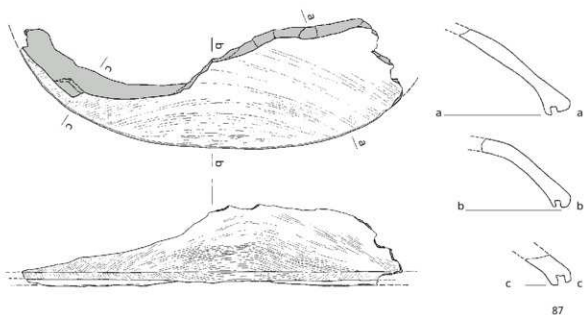


図34 南側河川堆積出土木製品① (S=1/3)

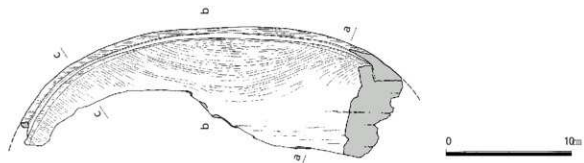


図35 南側河川堆積出土木製品② (S=1/3)

5. まとめ

今回の調査では当初予想されたように、調査地付近に古墳時代前期の河川が存在することを明らかにすることができた。注目すべき点は、河川堆積や洪水堆積層から、古墳時代前期を中心とする時期の土器片が多量に検出されたことである。このことは、今回の調査地から比較的近い上流域において、当該時期の居住域が存在したことを示唆するものとして注意される。調査地北東側の段丘崖上には、西側に眺望が開ける緩傾斜地が広がっているが、この一帯に布留0式期頃を中心とする時期の居住域を想定するこ

とができるのではないだろうか。

縦向遺跡では、以前より遺跡の西部や北東部において居住域や居館域の存在が想定されている。一方で遺跡の東部・南東部は調査事例が少なく、その状況は不明とされてきた。今回の調査成果は、この縦向遺跡東部にも古墳時代前期の集落域が広がることを明確に指摘するものであり、縦向遺跡の全体像を考える上で重要な資料であると言える。今後周辺で行なわれるであろう調査に注目していかねばならない。

(福辻)

【註記】

- 1) 寺沢薫 1984「縦向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館
- 2) 清水真一 1996「管状土製品についての一考察」『桜井市埋蔵文化財1995年度発掘調査報告書1』(財)桜井市文化財協会
- 3) 上原真人(編) 1993「木器集成図録 近畿原始編」奈良国立文化財研究所
中西靖人・森屋美佐子他 1987「新家(その1) - 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-」大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター
- 4) 橋本輝彦 1995「縦向遺跡第80次発掘調査報告書」『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会

表3 縦向遺跡第136次出土土器一覧表

図番号	写真図版	器種	出土遺構・層位	口径(匁元) [cm]	器高(残存) [cm]	底径(匁元) [cm]	色調(外面)	残存状況	備考
図28-1		黒色土器	砂礫層1		2.8	高台径6.4	明褐色(7.5YR5/6)	底部全周	
図28-2	図版15-2	土甕	砂礫層1		6.4		褐色(7.5YR6/6)	体部上平1/10	
図28-3	図版15-3	小形丸底甕	砂礫層1	(10.5)	(4.7)		にぶい黄褐色(10YR7/4)	口縁~体部1/3	
図28-4		小形丸底甕	砂礫層1	(10.4)	(6.7)		にぶい黄褐色(10YR6/4)	口縁~体部1/5	
図28-5		小形丸底甕	砂礫層1	(11.2)	(5.0)		明褐色(7.5YR5/6)	口縁~体部1/7	
図28-6		小形丸底甕	砂礫層1	(14.0)	(3.8)		褐色(5YR6/6)	口縁~体部1/8	
図28-7		小形丸底甕	砂礫層1	(14.1)	(2.8)		褐色(5YR6/6)	口縁~体部1/5	
図28-8		小形蹄台	砂礫層1	(8.4)	(2.5)		褐色(5YR6/6)	受部1/2	
図28-9		小形蹄台	砂礫層1	(10.1)	(4.1)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	受部~脚部1/3	
図28-10		小形蹄台	砂礫層1	(4.0)		脚径7.6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	蹄台部全周	
図28-11	図版15-11	ミニチュア器台	砂礫層1		(3.0)	脚径4.4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	蹄台部全周	
図28-12		小形蹄台	砂礫層1		(7.2)	脚径(11.3)	灰黄褐色(10YR6/2)	蹄台部1/3	
図28-13	図版15-13	小形蹄台	砂礫層1		(7.4)	脚径11.1	褐色(5YR7/6)	蹄台部全周	
図28-14	図版15-14	器台	砂礫層1		(8.5)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	体部全周	
図28-15	図版15-15	器台	砂礫層1	14.5	(11.9)		にぶい黄褐色(10YR5/4)	口縁~体部全周	
図28-16	図版15-16	高坏	砂礫層1		(3.8)		黒褐色(7.5YR3/1)	坏部付近1/5	
図28-17	図版15-17	瓢箪	砂礫層1		(6.4)		にぶい黄褐色(10YR7/4)	体部1/4	
図28-18		甕	砂礫層1	(12.9)	(3.7)		褐色(5YR6/6)	口縁~脚部1/3	東西関係
図28-19		広口甕	砂礫層1	(14.9)	(3.8)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁部全周	
図28-20		広口甕	砂礫層1	(19.1)	(5.9)		褐色(5YR6/6)	口縁周辺1/6	
図28-21		二重口縁甕	砂礫層1	(18.2)	(3.8)		褐色(5YR6/6)	口縁付近1/6	
図28-22	図版15-22	複合口縁甕	砂礫層1	(18.9)	(11.5)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁~体部1/5	瀬戸内系
図28-23		二重口縁甕	砂礫層1		(5.4)		にぶい褐色(7.5YR5/4)	肩部付近3/4	
図28-24	図版16-24	二重口縁甕	砂礫層1		(6.7)		にぶい黄褐色(10YR5/4)	肩部~脚部全周	
図28-25	図版15-25	二重口縁甕	砂礫層1	(19.3)	(5.0)		にぶい黄褐色(10YR6/4)	口縁1/7	
図28-26		二重口縁甕	砂礫層1		(7.9)		浅黄褐色(7.5YR8/4)	肩部~脚部全周	
図28-27		二重口縁甕	砂礫層1		(4.8)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	肩部付近全周	東海系
図28-28		台付甕	砂礫層1		(3.7)		灰黄褐色(10YR5/2)	蹄台付近全周	東海系
図28-29	図版16-29	甕	砂礫層1	(13.1)	(6.7)		灰褐色(7.5YR5/1)	口縁~体部1/5	近江系
図28-30	図版16-30	甕	砂礫層1	10.9	(12.2)		灰黄褐色(10YR5/2)	底部以外全周	
図28-31		甕	砂礫層1	(12.6)	(4.9)		にぶい黄褐色(10YR5/4)	口縁~脚部1/5	
図28-32		甕	砂礫層1	(14.6)	(6.1)		明褐色(7.5YR5/6)	口縁~脚部1/4	
図28-33		甕	砂礫層1	(13.5)	(4.7)		褐色(5YR6/6)	口縁~脚部1/5	
図28-34		甕	砂礫層1	(17.0)	(7.2)		にぶい黄褐色(10YR6/4)	口縁~体部1/7	
図28-35		甕	砂礫層1	(10.8)	(4.4)		灰黄褐色(10YR6/2)	口縁~脚部1/6	
図28-36		甕	砂礫層1	(11.7)	(3.7)		にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁~脚部1/5	
図28-37		甕	砂礫層1	(12.3)	(3.8)		にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁~脚部1/5	
図28-38		甕	砂礫層1	(14.3)	(4.3)		にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁付近1/5	

DE29-39		変	砂埋層 1	(147)	(7.1)		褐色 (5YR6/6)	口縁～体部1/5	
DE29-40		変	砂埋層 1	(121)	(3.7)		灰青褐色 (10YR4/2)	口縁～唇部1/5	
DE29-41		変	砂埋層 1	(134)	(5.3)		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	口縁～唇部1/8	
DE29-42		変	砂埋層 1	(154)	(3.1)		にぶい褐色 (7.5YR5/2)	口縁～唇部1/6	
DE30-43	図版16-43	手捻り土器	砂埋層 2		残存長(11.6)		にぶい黄褐色 (10YR7/4)	腹筋の一部	
DE30-44		小形鉢	砂埋層 2	(70)	(4.9)		にぶい黄褐色 (10YR6/4)	口縁～体部1/8	
DE30-45		鉢	砂埋層 2	(126)	(6.0)		にぶい褐色 (5YR6/4)	全体1/3	
DE30-46		高杯	砂埋層 2	(196)	(3.0)		灰青褐色 (10YR6/2)	口縁1/8	
DE30-47		小形高杯	砂埋層 2	7.4	(2.7)		明褐色 (7.5YR5/6)	杯底2/3	
DE30-48		直口壺	砂埋層 2	(137)	(6.0)		浅黄褐色 (10YR8/3)	口縁～唇部1/2	
DE30-49		二重口縁壺	砂埋層 2	17.6	(4.8)		にぶい黄褐色 (10YR6/4)	口縁付近全周	
DE30-50		二重口縁壺	砂埋層 2	(234)	(4.1)		褐色 (5YR6/6)	口縁付近1/6	
DE30-51	図版16-51	二重口縁壺	砂埋層 2	(231)	(6.3)		にぶい黄褐色 (10YR6/3)	口縁付近1/5	
DE30-52		変	砂埋層 2	(175)	(5.9)		褐色 (7.5YR7/6)	口縁～唇部1/6	
DE30-53		変	砂埋層 2	(172)	(4.4)		灰青褐色 (10YR4/2)	口縁～唇部1/5	
DE30-54		変	砂埋層 2	(140)	(5.8)		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	口縁～体部1/8	
DE30-55		変	砂埋層 2	(134)	(6.6)		にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁～体部1/5	
DE30-56		変	砂埋層 2	(148)	(4.1)		褐色 (7.5YR6/6)	口縁付近1/7	山形系
DE31-57	図版16-57	小形段形器台	黒色粘質土層		(3.7)		にぶい褐色 (7.5YR7/4)	受部1/5	山形系
DE31-58		小形器台	黒色粘質土層	(85)	(5.8)		にぶい褐色 (7.5YR6/4)	全体1/2	
DE31-59		小形鉢	黒色粘質土層	(87)	(3.8)		にぶい黄褐色 (10YR6/3)	口縁～体部1/7	
DE31-60		鉢	黒色粘質土層	(166)	(5.0)		褐色 (7.5YR7/6)	口縁～体部1/10	
DE31-61		高杯	黒色粘質土層		(5.8)		にぶい褐色 (7.5YR7/4)	脚柱部全周	
DE31-62		鉢 (或部穿孔)	黒色粘質土層			37	にぶい褐色 (10YR6/3)	底部全周	
DE31-63	図版16-63	壺	黒色粘質土層		(5.8)		褐色 (2.5YR6/8)	体部1/12以下	
DE31-64		器台	黒色粘質土層	(88)	(5.6)		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	口縁1/2	
DE31-65	図版16-65	二重口縁壺	黒色粘質土層	(220)	(8.4)		にぶい褐色 (7.5YR7/3)	口縁付近1/5	瀬戸内系
DE31-66		瓶蓋壺	黒色粘質土層	(66)	(4.6)		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	口縁1/4	
DE31-67		直口壺	黒色粘質土層	(121)	(5.4)		黄褐色 (10YR3/1)	口縁付近1/4	
DE31-68	図版16-68	直口壺	黒色粘質土層	(153)	(9.8)		灰青褐色 (10YR4/2)	口縁～唇部1/4	
DE31-69		壺	黒色粘質土層	(210)	(4.3)		にぶい褐色 (7.5YR5/3)	口縁付近1/5	
DE31-70		垂下口縁壺	黒色粘質土層	(247)	(8.6)		褐色 (5YR6/6)	口縁～唇部1/6	
DE31-71		台付壺	黒色粘質土層	(210)	(2.7)		にぶい黄褐色 (10YR7/2)	口縁1/10	東海系
DE31-72		変	黒色粘質土層	(132)	(5.2)		灰青褐色 (10YR6/2)	口縁～唇部1/8	山形系
DE31-73	図版17-73	変	黒色粘質土層	(135)	(5.2)		浅黄褐色 (10YR8/4)	口縁～唇部1/5	北陸系
DE31-74		変	黒色粘質土層	(113)	(4.0)		にぶい黄褐色 (10YR6/3)	口縁～唇部1/5	近江系
DE31-75		台付壺	黒色粘質土層		(4.8)		にぶい黄褐色 (10YR7/4)	脚台付近全周	東海系
DE31-76		変	黒色粘質土層	(114)	(3.2)		にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	口縁付近1/4	
DE31-77		変	黒色粘質土層	(136)	(2.7)		にぶい赤褐色 (5YR5/4)	口縁付近1/5	
DE31-78		変	黒色粘質土層	(140)	(4.7)		にぶい褐色 (7.5YR7/3)	口縁～唇部1/6	
DE31-79		変	黒色粘質土層	(148)	(4.7)		にぶい褐色 (7.5YR6/4)	口縁～唇部1/7	
DE31-80		変	黒色粘質土層	(162)	(7.6)		にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁～体部1/6	
DE32-81	変	南瀬河川海澄		(109)	(2.3)		にぶい褐色 (7.5YR6/2)	口縁周辺1/8	
DE32-82	変	南瀬河川海澄		(109)	(5.8)		にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁～体部1/4	
DE32-83	変	南瀬河川海澄		(144)	(1.8)	66	灰黄色 (2.5Y7/2)	底部付近2/3	
DE32-84	変	広口壺	南瀬河川海澄	(144)	(4.5)		灰黄褐色 (10YR6/2)	口縁～唇部1/2	
DE32-85	図版17-85	パレス壺	南瀬河川海澄	(147)	(3.2)		灰白色 (2.5Y8/2)	口縁部1/4	東海系

第6節 縦向遺跡第137次発掘調査報告

1. はじめに

縦向遺跡第137次調査は桜井市大字箸中515番地の1において縦向遺跡の範囲確認を主たる目的とし、平成16年2月6日～3月31日の期間発掘調査を行った。調査地は縦向遺跡の南東で、縦向川によって形成された扇状地の中央部に位置し、縦向川によって開析された河岸段丘にある(図26)。北は珠城山古墳群や渋谷山古墳を望み、南西には箸墓古墳の後円部を望むことができる。また、調査地周辺は西方にはホケノ山古墳をはじめとする前期古墳、慶運寺裏山古墳、平塚古墳などの後期古墳など古墳時代前期や後期に築造されたと思われる古墳が多数存在するところである。

調査区は敷地の南側に13m×12mに設定した「南区」。そのうち、調査区北西で古墳を検出したので、規模を確認するため、北側を一部(2.5m×13m)拡張した「北区」。最終の調査総面積は約188.5㎡である。調査方法は、現代盛土および旧耕作土をバックホーにより除去し、古墳時代後期の包含層を検出した後、人力により遺構の検出、掘削を行った。

なお、検出した埋没古墳は平塚古墳と直線距離にして約40mしか離れておらず、平塚古墳を含めた後期の古墳群としての評価を検討するべきであるが、未調査の部分も多いため、現段階では平塚古墳との関係は不明な点が多い。そのため、従来の慣例通り、調査区の小字名「池田」をとって、池田1号墳、2号墳と呼称することとする。

2. 基本層序

基本的に5層に大別される。①現代盛土(図38-2層)、②現代耕作に関連する層(5・6層)、③旧耕作土(灰オリブ色～緑灰色砂質土 8・11・13層など)、④黒褐色砂質土(小礫混 古墳時代後期包含層 10・32・33・37層など)、⑤黄褐色砂礫層(地山)であり、⑤層以下は砂層や礫層などが交互に堆積しており、一部はラミナ状に堆積しているなど河川堆積層であり、遺構や遺物が見られない地山層になる。地形は総じて西側に行くほど低くなり、現地表から地山面までが東側では0.6mしかないの比べ、西側では1～1.5mと深く、包含層も西側の方が厚く堆積している。④の遺物包含層は、細別すると数層に分かれるが、全ての層で須恵器の破片を少量含んでおり、古墳時代後期以降堆積した包含層である。遺構検出は④層上面と⑤層上面の計2面で行っている。

3. 検出遺構

先述したとおり、遺構検出は黒褐色砂質土(包含層)上面と黄褐色砂礫層(地山)上面で行った。以下概要を述べていく。

(1) 上層 黒褐色砂質土上面(図36)

素掘溝3条、溝2条、土坑2基、調査区南西側に傾斜していく落ち込みを検出した。素掘溝や落ち込み(SX1005)からは瓦器や土師皿と思われる中世に属する遺物が出土しているのでその時期の耕作

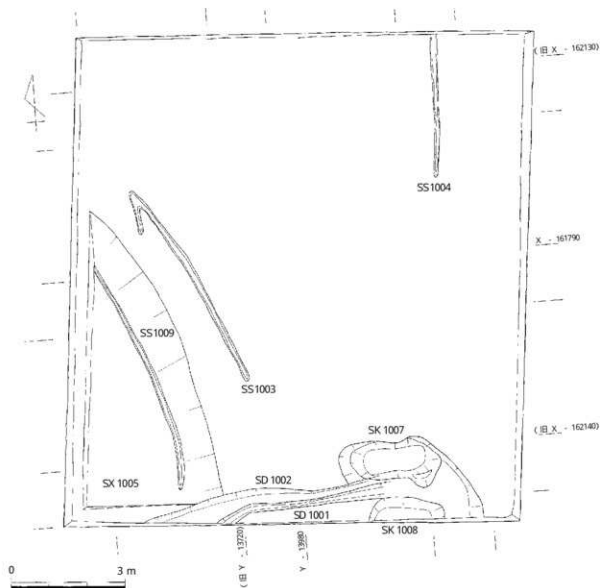


図36 上層遺構平面図 (S=1/100)

に伴うものと考えられる。また、溝 (SD1001・1002) や土坑 (SK1007・1008) からの遺物は小片が多く時期は確定できないが、SX1005との切り合いから中世以後のものである。

(2) 下層 黄褐色砂礫層上面 (図37)

調査区西側に古墳2基、東側にビット64基、落ち込みや土坑9基、溝状遺構2条南区北東隅と南東隅の壁際にビットを伴う方形状土坑2基を検出した。また、北区の古墳の下層より、堅穴式住居1基、土坑などを検出した。以下主なものについて詳述する。

池田1号墳

南区の北西隅において北側から西側に弧を描く溝を検出した。その状況から古墳の周溝である可能性が高く調査区の北西端を北に拡張したところ、その北端でも溝を確認でき、溝が円を描くことが判明した。このことにより、規模は直径約18m前後の円墳であることがわかった。南区で検出した周溝

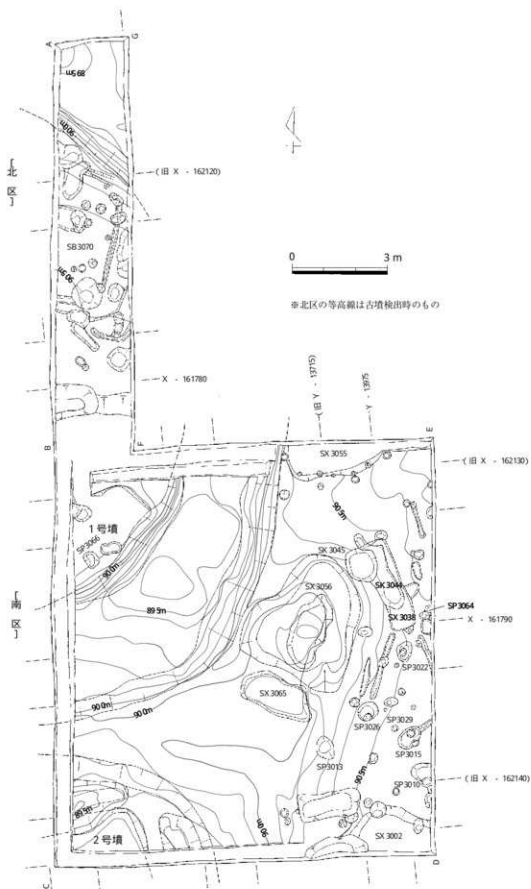


図37 下層遺構平面図 (S=1/120)

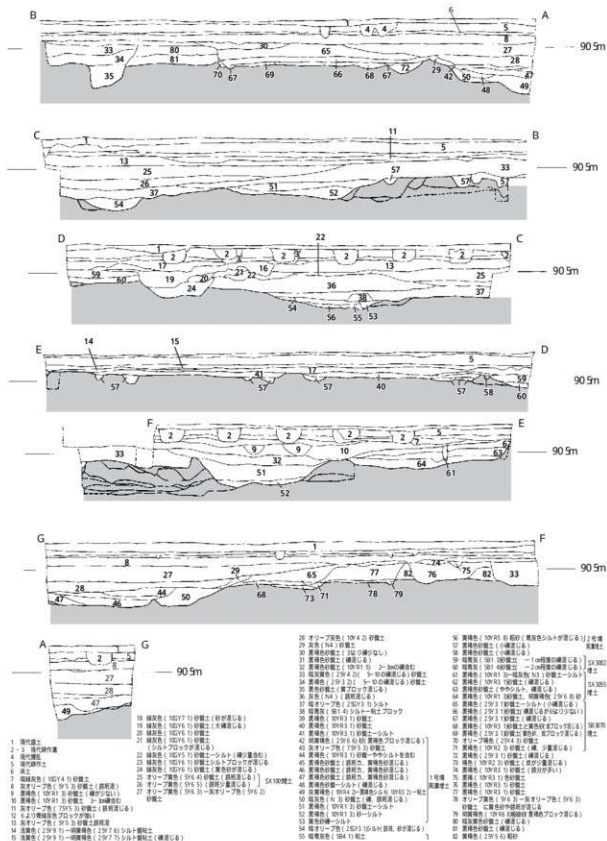


図38 調査区断面図 (S=1/100)

は幅約3.5～4mで、深さは検出面から0.5～0.8mであり、周溝の埋土は大きく分けて2層にわかれる。北区では周溝の外側の肩は確認できなかった。周溝埋土は、東壁断面で見ると、44～47層と50層(図38)との境で大きく分かれ、周溝がある程度埋没したのちに再掘削している可能性がある。そうすると、さらに北側に別の埋没古墳の周溝などの遺構を想定しなければならないが、平面では確認できなかった。現段階ではこの箇所埋土は1号墳周溝の埋土に伴うものとして考える。

墳丘部分に一部断割りを入れ、細粒砂～粗粒砂が不規則に堆積しているのを確認した。これらは東側の地山のレベルから考えると、全て河川に由来する自然堆積層で、盛土などは中世以前に削平され遺存していないと判断した。

遺物出土状況 南区では須恵器甕が出土している。甕の破片は上層～下層から出土しており、本来は墳丘上もしくは埋葬施設にあったものが、古墳が削平され、周溝埋土の中に混入したと考えられる。また、北区では、最下層(図38-47層)から須恵器坏身、坏蓋、土師器長頸壺がまとめて出土した(図39)。3個体とも完形に近く周溝が埋没していくかなり早い段階で投棄もしくは据えられていた可能性がある。前述した問題は残っているが現段階では1号墳に関連する遺物と考えたい。その他、古墳に関連する遺物は少なく須恵器の甕片と瓶類と思われる小片の2点しか出土していない。

池田2号墳

調査区の南東隅において検出した。周溝の幅は2～2.5mほどで、深さは0.3～0.4mである。周溝の深さは調査区南壁と西壁付近でやや深くなり、最下層には暗青灰色粘土が堆積していた。周溝は隅の部分がやや浅くなる方形の区画をもつもので方墳と考えられる。古墳の一部しか検出できなかったので規模は不明であるが、周溝の規模を考えると10m前後の小規模なものになると思われる。また、墳丘はかなり削平されており、盛土などは残っていない。周溝からは古式土師器の小片が少量混じるが、2号墳築造の時期を示すものは不明である。1号墳と近接していることを考慮すると1号墳と同時期か、近い時期に築造されたことも考えられるが、方形の墳形を持つことから古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性も残る。

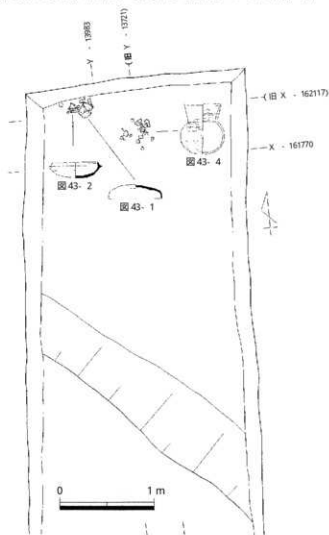


図39 1号墳周溝土器出土状況 (S=1/40)

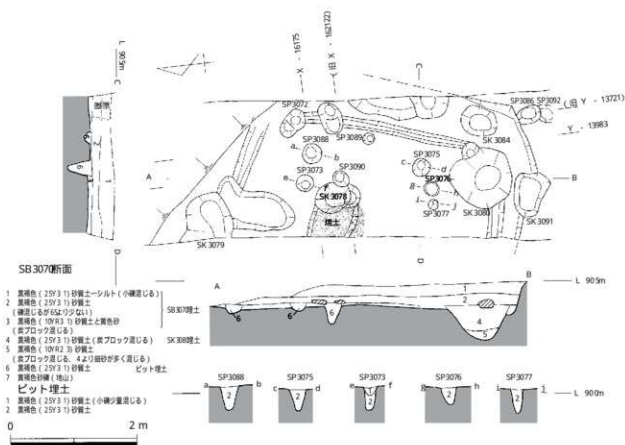


図40 竪穴住居 (SB3070) 平面・断面図 (S=1/60)

竪穴式住居 (SB3070) (図40)

1号墳の下層より、竪穴式住居1基が検出された。住居の主軸は北に向かって東へ約 17° 振る。住居の掘方は南東隅しか検出できなかったが、周壁溝を3辺検出することができ、それらから一辺5m前後の規模になると思われる。また、竪穴式住居に対応するものと思われるビットが東西に並んで2組で計4基 (SP3088・3075、3073・3076) みられることや、掘方の東壁と東周壁溝の間が約70cm離れていることなどから、東側に一度拡張した可能性がある。住居内の埋土は大きく3層にわかれる。最下層は黒褐色砂質土に地山の小礫や炭ブロックが多く混じり (図40-3層)、この上面から上層にかけて土器が多く出土している。この上面が住居使用時の床面だと考えられる。また、住居の中央付近にあたるSK3078の上面に焼土や炭が集中してみられたことから炉跡だと推定される。住居内の遺構で、住居埋土の遺物と接合したSK3084や、住居とほぼ同時期と思われる布冠甕体部片が出土したSK3080などが、周壁溝や先述したビットと同様に住居に付随する遺構である。

遺物出土状況 (図41) 遺物は二箇所に集中してみられた。一つは住居の南東壁と東側の周壁溝の間にみられる。土器は上層から床上面にわたって多くみられ、柳ヶ坪型壺 (図46-50) のように上層のものと下層のものが接合しているものもみられる。また有段鉢 (図44-11)、器台 (図44-23・24)、甕 (図46-40・44・45) などのようにほぼ完形に近いものがある一方で、明らかに欠損しているものや小片なども多く含まれることから、この一群は竪穴住居の廃絶期に一度に土器を投棄した一群と思われる。

次に遺物が集中してみられたのは住居中央の炉跡付近である。S字状口縁台付甕(図46-49)を含む甕類(図45-39・42など)や不明土製品(図47-63)などが出土している。さらに焼土周辺の調査区西壁面に土器が多くみられる状態で、西側の未調査区域にも土器の分布が広がると思われる。

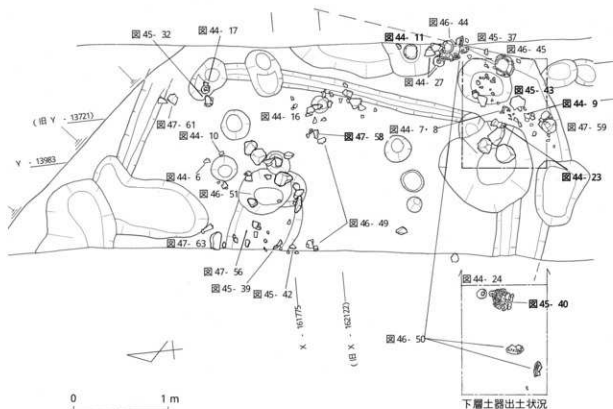


図41 竪穴住居 (SB3070) 土器出土状況 (S=1/40)

方形土坑 (SX3002、3055) (図42)

南側の調査区北東隅と南東隅で方形の土坑を検出した。それぞれ一部しか検出できていないので規模は不明であるが、掘方の深さは検出面から約0.4mで方形もしくは長方形の平面形をもつ。SX3002の方は北を向いて東に約30°、SX3055西に約12°と方位は異なる。これら二つの土坑の共通の特徴としてあげられるのは、壁際にピットが並ぶことである。SX3002では約1m間隔で、SX3055は0.5~0.6m間隔で、直径15cm前後、深さ20cm前後の小ピットが並ぶ。その規模から、これらの小ピットは方形

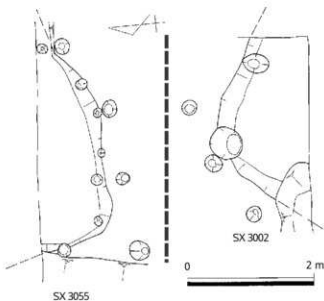


図42 方形土坑 (SX3002・3055) 平面図 (S=1/60)

土坑の覆屋もしくは屋壁などの補助柱的な役割が考えられる。また、やや方位がずれているが方形土坑から約0.2m離れて直径約30cmのピットが直線的に並ぶのも両方の遺構に共通しており、この遺構との関連も考えられる。遺物は古式土師器と思われる小片が数点出土しているが、時期を特定できるものは無かった。この遺構の性格は不明な点が多いが、小ピットの存在やその規模から簡易的な覆屋のつく建物だと考えたい。

SP 3015・3022・3026 (図37)

竪穴住居や方形土坑に伴うもの以外で、規則的に並んでいるピットとして、SP3015・3022・3026がみられる。3基とも直径25cm前後の柱跡がみられ、SP3022・3026間が2.4m、SP3026・3015間が1.6mで、ほぼ3つの柱穴がSP3026を角にして直角上に位置している。残念ながらその他は調査区外になるので不明だが、掘立柱建物もしくは柵列等になる可能性がある。柱穴から古式土師器片が数点出土しているが、小片のため時期を確定できるものではない。

4. 出土遺物

今回出土した遺物はコンテナケースに換算すると15箱になる。包含層中や1号墳の周溝では少量ながら須恵器が混じるが、そのほとんどは庄内～布留式期と考えられる古式土師器であり、大部分が古墳時代初頭に属する土器と思われる。以下、遺構ごとに出土遺物をみていく。なお、土器の量・色調・残存状況については一覧表(表5)において示している。

1号墳出土遺物 (図43) 1号墳周溝からの出土遺物である。なお、周溝埋土からは庄内～布留式期の土器片が多く出土しているが、二次的な混入のため包含層の遺物として取り扱っている(図49)。須恵器坏蓋(1)、坏身(2)、土師器長頸壺(4)は北区から、甕(3)は南区の周溝から出土した。坏蓋(1)は底部と口縁部のあいだにわずかに稜を残し、口縁端部を丸く仕上げている。口径14.8cm、器高は3.8cmで、天井部の3分の1程度まで回転ヘラケズリ調整を施す。坏身(2)のたちあがりはやや内傾し、口縁端部を丸く仕上げている。口径12.6cm、器高4.4cmで底部を3分の1程度まで回転ヘラケズリ調整を施す。土師器長頸壺は口径10.1cm、器高13.7cm、胴部下半の外面はケズリで整えられ、胴部上半～口縁部にかけてはミガキで仕上げられている。内面は頸部のみミガキが施され、それ以下は

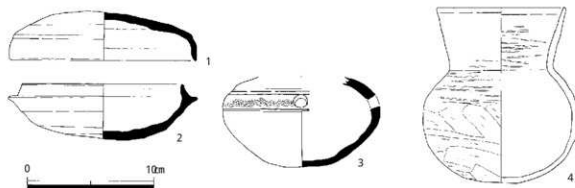


図43 1号墳出土土器 (S=1/3)

ナデによって仕上げられている。南区から出土した甕(3)は頸部より上半は欠損している。胴部最大径は12.6cmで、胴部下半はおそらくヘラケズリで形を整えたあと、ナデで仕上げられたと思われる。体部上半は回転ナデを施している。また、胴部には3条の波状文が施されている。これら1号墳周溝の土器のうち、坏身、坏蓋は、田辺編年のTK10型式期の特徴をもつと思われ、6世紀中頃の時期に該当すると考えられる。

竪穴住居(SB 3070)出土土器(図44~47) (5~10)は小形丸底鉢で外面はヨコミガキ、内面頸部には放射線状にミガキを施している。(11・12)は有段口縁をもつ有段鉢で、調整が観察できる(12)は内面の上半ではミガキが横方向に底部では放射線状に施される。(13~16)は小型丸底甕あるいは直口甕の口縁である。(17)は口縁部が無いが扁球体の体部をもつ頸部がくびれたもので、外面は比較的密にミガキが施されている。同一個体ではないが(16)のような形態の口縁部をもつと思われる。(20~24)は小形器台で、(20・21)は受部の口縁がころもち立ち上がっている。(23・24)は全体の脚台部の占める割合が低く、受部の口縁は直線的に外方にのびる「X」字の形態を持つものである。(25~27)は高坏で、坏部が直線的に外方にのびる口縁をもつ。とくに残りが良かった(27)は坏部と脚部の接合は、完成した脚部に坏部を付加する形で成形されたものと観察できる。(30~45)は口唇部を内傾させて肥厚させ、外面はハケメ、内面はケズリ調整を行ういわゆる布留甕である。(42)は体部上半に列点文を施し、外面のハケメが体部を回るように水平に長く施されるのが特徴的である。(44・45)は比較的残りが良く、球形に近い体部を持つことがわかる。(46~49)は東海系の台付甕でいわゆるS字甕である。(46~48)は灰白色で胎土も密なものである。それに比べ(49)の胎土は明黄褐色で、胎土に径1mm程の小礫を多く含み、他の東海系土器とは異なる。外面は上半部~下半部にかけてはハケメが用いられ、あわせて体部中ほどには横方向のケズリ、体部下方には縦方向のケズリがみられるなど、特徴的で東海以東の影響を受けた可能性がある。(50・51)は東海系の柳ヶ坪型甕と呼ばれるもので、外面の口縁部には綾杉状櫛刺突文が施され、受部から頸部にかけて外面は縦方向のミガキが施される。内面の口縁部~受部にかけても外面と同様綾杉状櫛刺突文が施され、横方向のミガキが施される。図化できなかったが、他に1個体の破片があり、竪穴住居からはこの形態の甕が少なくとも3個体出土している。(52~59)は甕類の口縁部で、(55)は、口縁端部付近はヨコナデで丸く仕上げられているが、頸部に向かっては縦方向にナデ調整で仕上げられている。(58・59)は二重口縁甕である。(59)の口縁部は残っていないが、球形に近い体部をもつ。(62)は外面にタタキを施す甕の底部である。竪穴住居の埋土中にこの種の甕の破片は他に数点含まれるが、いずれも小片で全体に占める割合も非常に少ない。(63)は用途不明の土製品である。外面はすべて丁寧にナデで仕上げられ平滑であり、一部ミガキの痕跡が残る。底部は比較的平らに成形している。内面には粘土の継ぎ目痕が残っており、板状の粘土を丸めて把手の形状をつくり、先端部は閉塞し丁寧にナデで平滑に成形されている。一部、口縁部が残っており、塊のようなものに反り上がっている中空の棒状把手が付いている、一見すると柄杓のような機能を持つ形態をしている。ただ、仮に把手だとすると把手と碗の接合部は貫通しており、水をすくうような用途は考えにくい。この土製品が、器としての機能をも

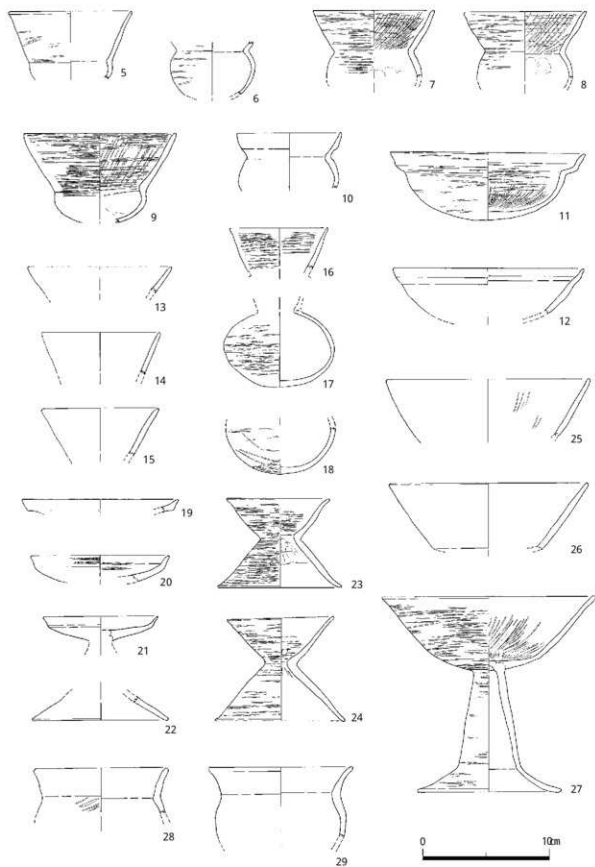


图44 竖穴住居 (SB3070) 出土土器① (S=1/3)

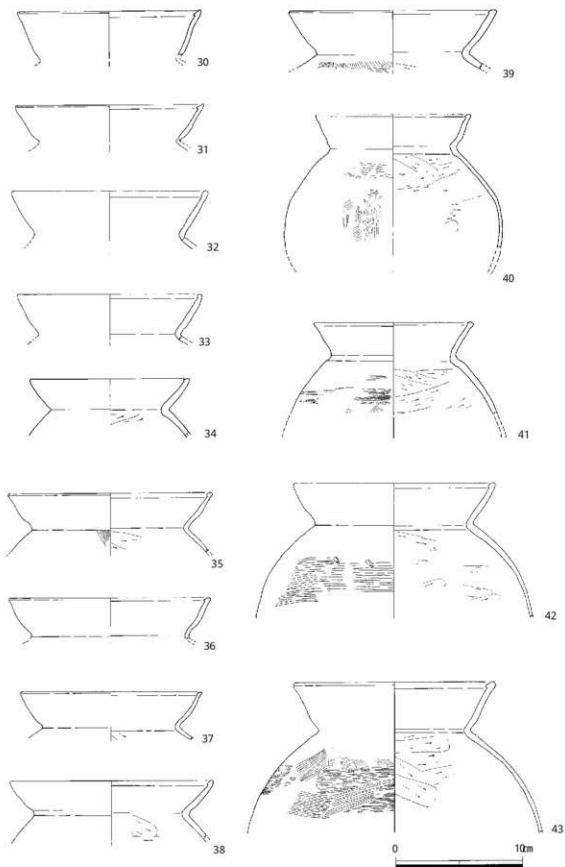


圖45 竪穴住居 (SB3070) 出土土器② (S=1/3)

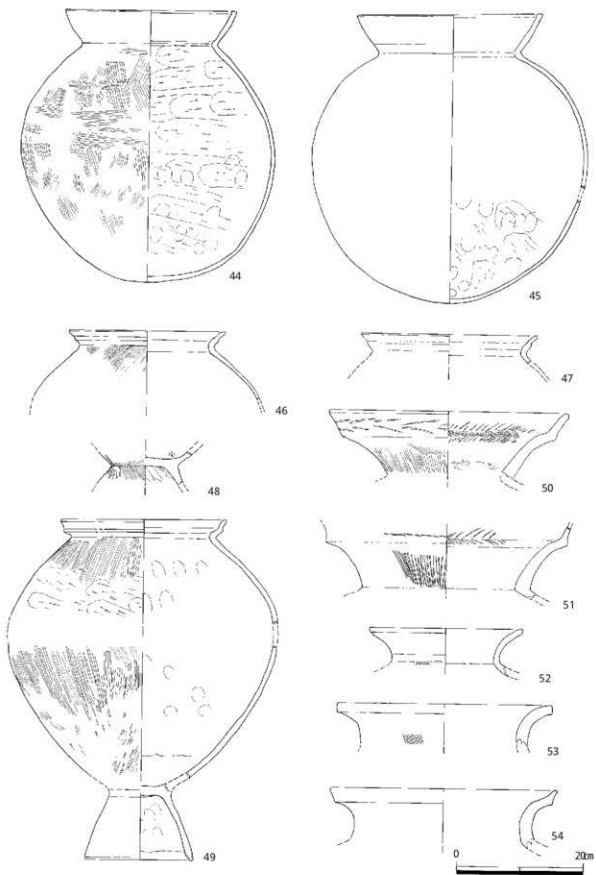


圖46 竪穴住居 (SB3070) 出土土器③ (S=1/3)

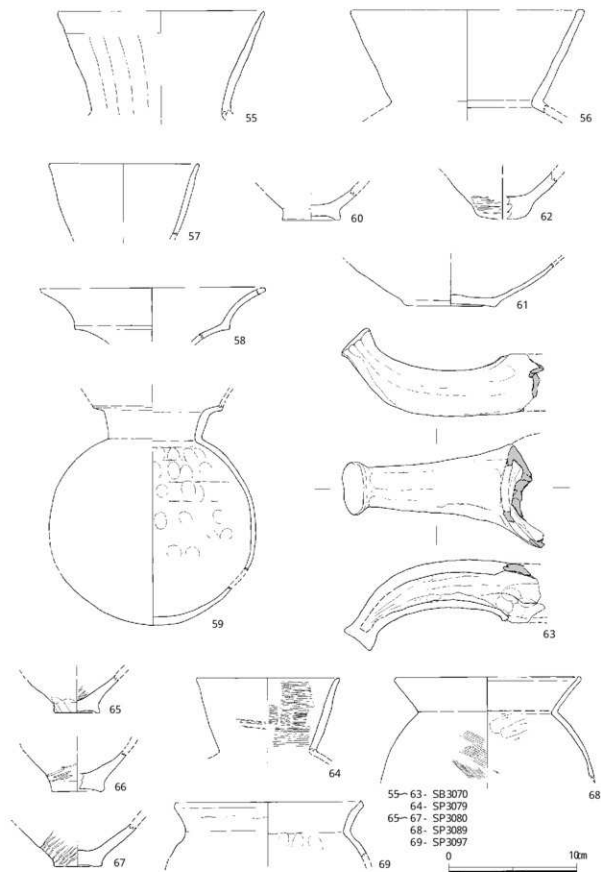


図47 竪穴住居 (SB3070) 出土土器④及び住居内ピット出土土器 (S=1/3)

つものなか、何かの形を模したもののなかは不明である。

布留甕が圧倒的な割合を占めることや小形丸底鉢や有段鉢の形態からこれらの土器は布留1式期の特徴をもつ。器種構成も多様で、当時の土器の構成を考える上でも重要である。ただ、完形の土器がいくつかみられるのに対し、細片の土器も多量に含まれる。一括遺物として考えるとき二次的な混入の可能性を考慮して細片のものまでを含めるかどうかは厳密には区別をする必要があろう。しかしながら、南東隅から出土している一群は、完形の土器の隙間などから出土し、細片であっても同時性の高いものが存在する非常に一括性の高い資料といえるだろう。

住居内の遺構出土土器 (図47) ここでは堅穴住居 (SB3070) 内もしくはその周辺の遺構から出土した土器をみていく。(64)はSK3079、(65~67)はSK3080、(68)はSP3089、(69)はSP3097から出土している。SK3080は住居に伴う遺構の可能性が高いが、その他の遺構に関しては、堅穴住居に関連するものかは不明である。(66・67)は外面にタタキを施す底部で、(68)は口縁端部を肥厚させる布留甕である。(69)の甕の口縁端部は上方に若干つまみ上げられており、外面に端面をもつ。ここに上げた土器は堅穴住居から出土した土器に比べ古い様相をみせているが、小片が多く必ずしも出土遺構の時期を決定できるものではない。

遺構出土土器 (図48) 南区を中心としたピット群や落ち込みなどの遺物をあげている。(71)は小形丸底鉢、(72)は器台脚部、(75)は二重口縁甕で、その他は壺や甕である。ピット群など遺構出土土器はいずれも小片であり、表面が摩滅しているものが多い。その出土状況からも遺構の時期を特定できるものはない。

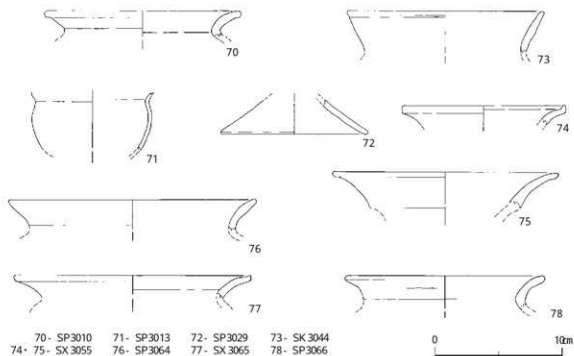


図48 遺構出土土器 (S=1/3)

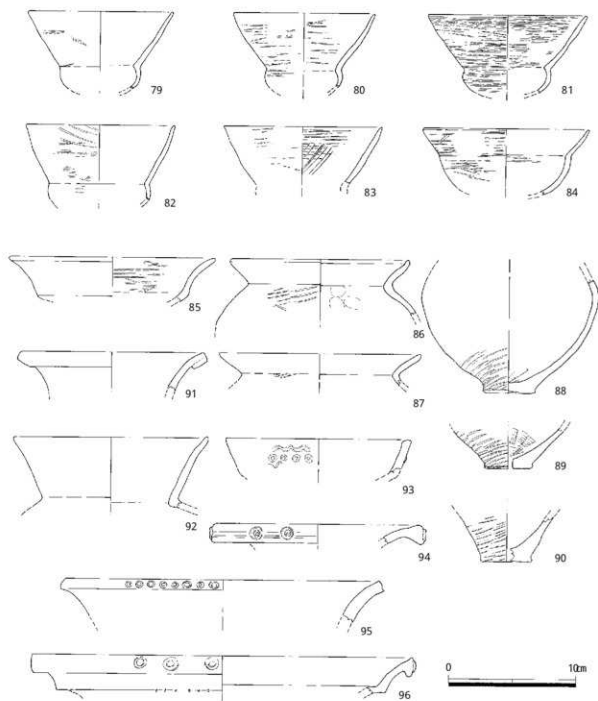


図49 包含層出土土器 (S=1/3)

包含層出土土器 (図49) ここでは包含層の遺物をみていく。なお (79~83) が北区の1号墳の周溝からの出土で、その他が遺物包含層である黒褐色砂質土から出土している。そのうち (88~95) が南区、(84~87・96) が北区の南半より出土している。(79~83) は小形丸底鉢で、摩滅により調整を確認できないものがあるが、外面は体部から口縁にかけて、内面は口縁部にミガキが施されている。形態や調整は堅穴住居 (SB3070) から出土した小形丸底鉢と類似しており、堅穴住居跡が削平された際に流れ込んだ可能性が高い。(86・87) は外面にタタキを施す甕の頸部~口縁部にかけてのものであ

る。(86)は口縁端部を丸く仕上げているが、(87)口縁端部を上方につまみあげている。(88~90)は外面にタタキを施す甕の底部で内面には板状の圧痕が残る。(89)は底部を穿孔している。(91)は外反する口縁をもち、口縁端部を一度外側に折り曲げている。(93~96)は口縁端部や口縁部に装飾を施している壺類である。(93)は竹管円形浮文でそれを扶んで上に2条の波状文、下には1条以上の波状文を施している。(94)と(96)は垂下口縁がつく壺であり、それぞれ口縁端部に竹管円形浮文を施す。(95)は口縁端部に竹管文を施している。布留式期に属するものが顕著なのは、先述した1号墳の周溝から出土したもので、その他は比較的古い様相を持つものが多い。須恵器は包含層(黒褐色砂質土)出土土器の約1%にも満たない。小片のため図示できなかった。同様に布留式期に属するものは非常に少ない。

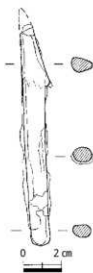


図50 包含層出土鉄器
(S=1/2)

包含層出土鉄器(図50) 鉄器は包含層(黒褐色砂質土)から出土している。先端を少し欠いるが、ほぼ完形である。残存長11.7cmで復元すると12.5cm程度になると思われる。断面は卵形をしており、先端は片方だけにかえりを持つが、刃部はない。出土位置は1号墳の南区周溝直上付近であり、古墳に関連する可能性もある。用途、時期などは不明である。

5. まとめ

今回の主な調査成果として、まず2基の埋没古墳が検出されたことがあげられる。1号墳は直径18m前後の後期古墳であることがわかった。北区の周溝から出土した須恵器によると6世紀中頃に築造された可能性がある。一方、南側の池田2号墳の時期は判然としない。北東側の縦向遺跡第138次調査(第2章第6節)の成果を考えると古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性もあるが、1号墳と近接して築かれていることから、1号墳と関連がある可能性もある。調査区のすぐ南西側の平塚古墳は縦向遺跡第135次調査の成果(第2章第4節)から後期古墳の可能性が高いと考えられ、その他、調査地周辺にはホケノ山古墳の横穴式石室や慶運寺裏古墳などの6世紀後半代の古墳が多くみられる。池田1号墳墳丘直上の包含層には中世などの新しい時期の遺物などはまったくみられないことから、早い段階で削平されたと考えられ、想像よりも多数の後期古墳がこの周辺で埋没していると思われる。このように6世紀代において当地域が墓域として利用され、密集した古墳群の様相を呈している可能性がある。

一方、1号墳の下層からは布留1式期と思われる竪穴住居を検出された。調査区の関係から一部の検出にとどまってしまったが、竪穴住居に伴う多量の土器が出土した。遺構に伴う一括遺物として、土器編年を考える上で重要な資料となる。すぐ東側で行われた縦向遺跡138次調査でも竪穴住居1棟が検出されており、この周辺が古墳時代前期における集落域になると思われる。集落域の存在に不明な点が多い縦向遺跡の中では大きな成果といえよう。また、南調査区東側では、方形土坑をはじめ、多数のピットが検出された。小片が多く時期を決めるのは難しいが、上層の包含層に庄内期の遺物が多く含まれていることなどや、縦向遺跡第138次調査の成果から、庄内期~布留1式期の遺構の可能性

がある。このように今回の調査では、古墳時代前期の纏向遺跡の集落域の動向や、纏向遺跡廃絶以後の6世紀代の古墳群を考えるうえで重要な成果を得ることができたとはいえよう。(丹羽)

【註記】

1) 本文における土器の編年観は以下の文献を参考にしている。

古式土師器：寺沢薫編 1986年「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
須惠器：田辺昭三 1981年「須惠器大成」角川書店

表4 纏向遺跡第137次出土土器一覧表

器種	種別	口径(部定)	器高(残存)	調査(外周)	内面	色調	残存状況	口縁部年	出土遺跡、部位	備考	
1	坏蓋	須惠器	14.8	3.8	ヘタズリ(灰赤部) 回転ナデ(口縁部)	ナデ(灰部)、回転ナデ	青灰(SPB6/1)	ほぼ完形	100%	1号墳噴溝	
2	坏身	須惠器	12.6	4.4	ヘタズリ(灰赤部) 回転ナデ(口縁部)	回転ナデ	灰(N6/)	ほぼ完形	100%	1号墳噴溝	
3	甕	須惠器	[12.6]	(7.0)	回転ナデ	ナデ、押さえ	灰(N6/～7/)	底部のみ欠	0%	1号墳噴溝	体部に黒縁波状文
4	高脚鉢	土師器	10.1	13.7	ミガキ、ケズリ	ミガキ、ナデ	明赤陶(SYR5/6)	口縁部のみ欠	75%	SB0070	
5	小形丸底鉢	土師器	9.6	(5.3)	ミガキ	不明	にぶい黄褐色(SYR4/4)	口縁部のみ欠	10%	SB0070	
6	小形丸底鉢	土師器	(6.8)	(4.1)	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色(SYR4/4)	体部上1/3	0%	SB0070	
7	小形丸底鉢	土師器	9.5	(5.3)	ミガキ	ミガキ	明赤陶(SYR5/6)	口縁部1/2	90%	SB0070	
8	小形丸底鉢	土師器	9.6	(5.3)	ミガキ	ミガキ(口縁部)、指圧痕(体部)	にぶい赤褐色(SYR4/4)	口縁部口縁部～体部上1/2	50%	SB0070	
9	小形丸底鉢	土師器	11.9	(6.9)	ミガキ	ミガキ(口縁部～頸)、ナデ(体部)	黄(2SYR6/8)	口縁部～体部	20%	SB0070	
10	小形丸底鉢	土師器	8.2	(4.5)	不明	不明	明赤陶(SYR5/6)	底部のみ欠	100%	SB0070	
11	有段鉢	土師器	15.4	5.3	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色(SYR7/4)	ほぼ完形	98%	SB0070	
12	有段鉢	土師器	14.9	(3.6)	不明	不明	黄(SYR6/6)～にぶい黄褐色(10YR6/2)	口縁部のみ	15%	SB0070	
13	直口壺	土師器	11.2	(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色(7SYR6/4)～7/4)	口縁部のみ	8%	SB0070	
14	直口壺	土師器	9.3	(3.2)	不明	不明	黄(SYR6/6～2SYR6/6)	口縁部のみ	15%	SB0070	
15	直口壺	土師器	9.1	(3.8)	不明	不明	黄(SYR6/6～6/8)	口縁部のみ	10%	SB0070	
16	直口壺	土師器	7.8	(3.2)	ミガキ	ミガキ	明赤陶(2SYR5/3)	口縁部のみ	25%	SB0070	
17	直口壺	土師器	(8.8)	(6)	ミガキ	ナデ	黄(SYR6/6)	体部のみ完形	0%	SB0070	
18	小形丸底鉢?	土師器	(8.6)	(3.6)	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色(7SYR6/4)～にぶい黄褐色(2SYR6/3)	体部下4/5	0%	SB0070	
19	甕	土師器	12.3	(1)	不明	不明	黄(7SYR7/6)	口縁のみ	8%	SB0070	
20	小形甕	土師器	10.9	(2)	ミガキ?	ミガキ?	にぶい黄褐色(7SYR5/4)～5/3)	受部のみ	8%	SB0070	
21	小形甕	土師器	9	(1.9)	不明	不明	灰黄陶(10YR5/2)	受部のみ	10%	SB0070	
22	甕	土師器	(10.4)	(1.9)	不明	不明	黄(SYR6/6～6/6)	甕部のみ	0%	SB0070	
23	小形甕	土師器	8.1	7	ミガキ	ミガキ(受部)、脚部(灰子陶)	黄(SYR6/6)	完形	100%	SB0070	
24	小形甕	土師器	8.5	8	ミガキ	ミガキ(受部)、脚部(ミガキ・ナデ)	明赤陶(SYR5/6)	口縁部が一部欠	90%	SB0070	
25	高坏	土師器	16	(4.5)	ヨコナデ?	ミガキ	黄(SYR6/6)	口縁部のみ	25%	SB0070	
26	高坏	土師器	15.6	(5.2)	不明	不明	黄(SYR6/6)	口縁部のみ	20%	SB0070	
27	高坏	土師器	16.7	11.4	ミガキ	ミガキ、ケズリ(柱状部)、ナデ脚	黄(2SYR6/6)	坏部が一部欠	95%	SB0070	
28	小形甕	土師器	10.4	(3.5)	ヨコナデ(口縁部、ナデ(体部)	ヨコナデ(口縁部)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁部のみ	5%	SB0070	
29	小形甕	土師器	11.3	(5.6)	ヨコナデ	不明	黄(2SYR6/6)	口縁部～体部	1/6	10%	SB0070
30	甕	土師器	14.4	(3.7)	不明	不明	にぶい黄褐色(7SYR7/4)	口縁部のみ	15%	SB0070	
31	甕	土師器	14.8	(2.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口縁部のみ	10%	SB0070	
32	甕	土師器	15.4	(3.7)	不明	不明	黄(SYR6/4)	口縁部のみ	15%	SB0070	
33	甕	土師器	14.3	3.4	不明	不明	灰黄陶(SYR2/2)	口縁部のみ	12%	SB0070	
34	甕	土師器	12.5	4.4	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口縁～体部上1/5	15%	SB0070	
35	甕	土師器	16	5.5	ヨコナデ	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(7SYR7/4)	口縁部のみ	10%	SB0070	
36	甕	土師器	15.8	(3.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色(7SYR6/4)～7/4)	口縁部のみ	8%	SB0070	
37	甕	土師器	14.2	(3.7)	ヨコナデ	ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(7SYR6/4)～黄褐色(3)	口縁部のみ	15%	SB0070	
38	甕	土師器	15.8	(4.4)	ヨコナデか	ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(7SYR6/4)～黄褐色(3)	口縁部～体部	上1/6	15%	SB0070
39	甕	土師器	16.3	(4.5)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、体部(ケズリ)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	口縁部のみ	15%	SB0070	
40	甕	土師器	12.2	(10.5)	ナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ナデ(口縁部)ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(7SYR7/4)	口縁～体部上1/2	100%	SB0070	
41	甕	土師器	12.6	(7.3)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ(体部)	明赤陶(10YR6/6)	口縁部～体部	上1/2	40%	SB0070
42	甕	土師器	15.5	(10.5)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ(体部)	にぶい黄褐色(10YR7/4)～黄褐色(7SYR7/6)	口縁～体部上1/4	20%	SB0070	
43	甕	土師器	15.2	(11.8)	ハケ(体部)	ケズリ(体部)	黄(7SYR7/6～5YR7/6)	口縁部～体部	1/4	35%	SB0070
44	甕	土師器	13.6	21.3	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	指圧痕(体部)	にぶい黄褐色(10YR4/2)～黄褐色(10YR7/4)	ほぼ完形	90%	SB0070	
45	甕	土師器	14.7	22.6	不明	指圧痕・ケズリ	明赤陶(10YR6/6)	全体のみ	2/3	60%	SB0070

46	台付栗	土師部	122	(5.3)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ?(体部)	にぶい甕(SY86/4)	口縁～肩2/3	90%	SB3070	
47	台付栗	土師部	14	(2.3)	ヨコナデ	不明	にぶい甕(HOY87/3)	口縁のみ	12%	SB3070	東海系
48	台付栗	土師部		(2.3)	ハケ	不明	にぶい甕(7.5YR7/3)	腹部のみ	0%	SB3070	東海系
49	台付栗	土師部	132	(26.7)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)ケズリ、肩庄(体部)	明赤陶(SY85/6)	腹部の2/3	30%	SB3070	東海系か
50	甕	土師部	19	(5.3)	ナデ、板杉状曲線変文、ミガキ(腹部)	ナデ、板杉状曲線変文	にぶい甕(HOY87/2)	口縁部のみ	100%	SB3070	東海系・柳ノ坪型
51	甕	土師部	[106]	(5.3)	板杉状曲線変文、ミガキ(腹部)	板杉状曲線変文	甕(SY87/8-6/6)	口縁部のみ	5%	SB3070	東海系・柳ノ坪型
52	直口甕	土師部	12.1	(3.7)	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)	にぶい甕	口縁部のみ	10%	SB3070	
53	直口甕	土師部	16.8	(3.2)	ヨコナデ	不明	にぶい甕(HOY87/3-6/3)	口縁部のみ	12%	SB3070	
54	直口甕	土師部	17.8	(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄陶(HOY84/2)	口縁部のみ	30%	SB3070	
55	直口甕	土師部	16	(7.8)	ヨコナデ(口縁部)肩庄(体部)	不明	甕(7.5YR7/6)	口縁部のみ	10%	SB3070	
56	直口甕	土師部	182	(7.5)	ヨコナデ?	ヨコナデ?	にぶい甕(7.5YR7/4)～甕(7.5YR7/6)	口縁部のみ	5%	SB3070	
57	直口甕	土師部	11.6	(5.6)	ナデ	不明	にぶい甕(7.5YR7/4)	口縁部のみ	20%	SB3070	
58	二重口縁甕	土師部	[176]	(3.6)	不明	不明	にぶい甕(SY87/4)	口縁部のみ	0%	SB3070	
59	二重口縁甕	土師部	[162]	[13]	不明	板庄瓦(体部)	明赤陶(HOY86/6)	口縁部、体部トナシ欠損	70%	SB3070	
60	甕底部	土師部	[4.4]	(2.1)	不明	不明	黒陶(HOY83/2)～黒灰(N3?)	底部のみ	0%	SB3070	
61	甕	土師部	[7]	(3.2)	不明	不明	にぶい甕(7.5YR6/4)	底部のみ	0%	SB3070	
62	甕	土師部	[36]	(3.1)	タタキ	不明	にぶい甕(2.5YR6/4)	底部のみ	0%	SB3070	
63	用途不明土製品	土師部	(15.5)	(6.7)	ナデ、ミガキ	板庄瓦	にぶい甕(7.5YR7/4)	?	?	SB3070	
64	直口甕	土師部	11	(5.7)	ミガキ	ヨコハケ	甕(SY86/8-6/6)	口縁部のみ	18%	SB3070	
65	甕	土師部	[3.4]	(2.6)	ナデ	板状の圧痕	甕(SY86/6)	底部のみ	0%	SP1080	
66	甕	土師部	[4]	(2.9)	タタキ	不明	にぶい甕(7.5YR5/3)～甕(7.5YR4/2)	底部のみ	0%	SP1080	
67	甕	土師部	[36]	(3)	タタキ	ナデ	にぶい甕(SY86/4)	底部のみ	0%	SP1080	
68	甕	土師部	143	6.6	ヨコナデ(口縁部)、ハケ(体部)	ヨコナデ(口縁部)、ケズリ(体部)	甕(SY86/6)～黒灰(N3?)	口縁部口縁部～体部上1/5	30%	SP1080	
69	甕	土師部	146	(4.2)	不明	板庄瓦(体部)	にぶい甕(HOY86/3)	口縁部～肩1/7	15%	SP1097	
70	甕	土師部	131	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄陶(HOY84/2)	口縁部のみ	15%	SP1010	
71	小形丸底鉢	土師部	[9]	(4.6)	ナデ	不明	淡黄(2.5YR8-3)	口縁～体部上1/2	8%	SP1013	
72	器台部	土師部	(11.7)	(2.6)	ヨコナデ	不明	にぶい甕(7.5YR5/3)	腹部1/3	0%	SP1029	
73	皿類	土師部	15.3	(3.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄陶(2.5Y5/2)	口縁部のみ	8%	SD3044	
74	甕	土師部	12.6	(1.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい甕(7.5YR5/4)	口縁部のみ	12%	SX3055	
75	二重口縁甕	土師部	17.5	(2.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい甕(HOY83/3)	口縁部のみ	8%	SX3055	
76	甕	土師部	19.6	(2.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	甕(SY85/5)～黄灰陶(HOY88/3)	口縁部のみ	7%	SP1064	
77	甕	土師部	18.5	(1.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤陶(HOY84/2)	口縁部1/2	8%	SX3056	
78	甕	土師部	15.2	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい甕(HOY83/3)	口縁部のみ	12%	SP1066	
79	小形丸底鉢	土師部	11.4	(6.1)	ミガキ	不明	甕(SY86/6)	口縁部～体部上1/4	20%	1号墳周溝	
80	小形丸底鉢	土師部	11	(5.9)	ミガキ	ミガキ	明赤陶(SY85/6)	口縁部～体部上1/4	20%	1号墳周溝	
81	小形丸底鉢	土師部	12.4	(6.1)	ミガキ	ミガキ(口縁部)、ナデ(体部)	甕(SY86/6)	口縁部～体部上1/3	33%	1号墳周溝	
82	小形丸底鉢	土師部	11.4	(5.9)	ミガキ	不明	灰黄(7.5YR4/2)	口縁部のみ	5%	1号墳周溝	
83	小形丸底鉢	土師部	12.4	(4.6)	ミガキ	ミガキ	黒灰(5YR4/1)～甕(SY86/6)	口縁部のみ	10%	1号墳周溝	
84	小形丸底鉢	土師部	13	(5.2)	ミガキ	ミガキ	甕(SY86/6)	口縁部～体部上1/4	25%	1号墳周溝	
85	高坏	土師部	16	(3.4)	ヨコナデ	ミガキ	にぶい甕(SY86/4)	口縁部のみ	5%	1号墳周溝	
86	甕	土師部	14	(4.2)	タタキ	板庄瓦	にぶい甕(HOY85/4)	口縁部～体部上1/7	10%	黒陶色土(北区)	
87	甕	土師部	16	(2.5)	タタキ	不明	にぶい甕(HOY84/3)	口縁部のみ	10%	黒陶色土(北区)	
88	甕	土師部	[36]	(9.1)	タタキ	板状の圧痕	にぶい甕(HOY85/4)	底部のみ	底部	黒陶色土(南区)	
89	甕	土師部	[35]	(3)	タタキ	板状の圧痕	灰黄陶(HOY84/2-5/2)	底部のみ	0%	黒陶色土(南区)	底部穿孔あり
90	甕	土師部	[38]	(3.5)	タタキ	ナデ	にぶい甕(HOY86/3)	底部のみ	0%	黒陶色土(南区)	
91	甕	土師部	146	(2)	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤陶(SY85/6)	口縁部のみ	15%	黒陶色土(南区)	
92	直口甕	土師部	15.1	(5.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	甕(SY86/6)	口縁部のみ	12%	黒陶色土(南区)	
93	甕	土師部	146	(2.3)	不明	ヨコナデ	甕(SY86/6)	口縁部のみ	30%	黒陶色土(南区)	円形浮文、波状文
94	甕	土師部	16	1.5	ヨコナデ	不明	灰(SY5/1)～甕(SY4/1)	口縁部のみ	5%	黒陶色土(北区)	
95	甕	土師部	248	(3.2)	ヨコナデ	不明	灰黄陶(HOY84/2-5/2)	口縁部のみ	5%	黒陶色土(南区)	口縁部に竹管文
96	甕	土師部	30	(3)	ヨコナデ	不明	にぶい甕(7.5YR6/3)	口縁部のみ	10%	黒陶色土(北区)	円形浮文、刷目目

※番号は図10-1の器物番号に対応する。口径で「」付きものは断面の測定口径、「?」付きものは断面が現在見えない状態。現在見なければ現在の最大径である。器高で「?」付きものは現在見えず、ともに単位はcmである。なお、80)の不明土製品の器の縁には黒陶質を入れている。

第7節 纏向遺跡第138次発掘調査報告

1. はじめに

纏向遺跡第138次調査は、桜井市大字箸中515番地3における纏向遺跡の範囲確認調査である。

調査は、JR巻向駅の南東約750mに位置する水田部分を対象とし、南北19m×東西10m・面積190㎡の調査区を設定した。調査過程において、調査区の北西端で堅穴住居跡の北東コーナー部分が検出されたことから、西側へ南北5.5m×東西4.5mの拡張区を設定し、さらに、北西コーナー部分を確認するため、拡張区の北側約1.5㎡を追加拡張している。したがって、最終的な調査面積は約216.5㎡となった。調査期間は、平成16年3月8日～平成16年3月31日までの実働19日間であった。

調査地は、纏向遺跡南東部の標高91.3mを測る扇状地扇尖部付近に位置する(図26)。しかし、調査地周辺の微地形についてみると、扇状地南端を流れる纏向川によって開析された河岸段丘の様相を呈しており、調査地はその上位の段丘面に立地しているといえる。調査地の真北には珠城山古墳群と、その丘陵越しに渋谷向山古墳を同一線上に望むことができ、南西約650mには箸墓古墳の後円部が位置している。また、南西330mの地点には全長80mのホケノ山古墳、北西約340mの地点には全長60mの前方後円墳に推定される巻内石塚古墳があり、調査地から両古墳をみた扇状の範囲内には、小川塚古墳、平塚古墳、北口塚古墳、茶ノ木塚古墳など、径13～35mを測る十数基の古墳が現在もその円丘を残している。

2. 基本層序(図52 層番号は<調査区北端>に対応)

調査地の基本層序は、現地表から水田耕土と床土、遺物包含層、地山に相当する扇状地堆積物の3層に大別される。ただし、遺物包含層は部分的に遺存する程度であり、調査区の大半は耕作土層が地山と直に接する状況であった。以下、各層の特徴を詳述する。

水田耕土は灰オリーブ色粗粒砂混じり極細粒砂(1層)、床土は鉄分の沈着が著しい褐色～にぶい黄褐色中～細粒砂混じり極細粒砂(2～3層)である。両層はほぼ水平に堆積しており、層厚は約45cmを測る。また、調査区の北西部では、下部に層厚10cm以下のにぶい黄褐色シルト混じり細粒砂(4層)が認められた。層中にはラミナが観察され、局所的な洪水に伴うものと考えられる。

遺物包含層は、耕地化以前の旧表土層と考えられる。調査区北端～北西部にかけて面的に広がり、調査区南東部では不定形なシミ状に遺存する箇所がみられた。黒褐色小礫～中粒砂混じりシルト(6層)からなり、層厚は調査区北西隅で最大15cmを測っている。遺物は主に庄内式期～布留式期前半代の古式土師器が出土しているが、摩滅した細片が多く、二次的に混入した可能性も考えられる。

地山は、扇状地の基盤となる堆積物であり、灰黄褐色小礫～中粒砂混じり粘質シルト(22層)を主体とし、上面には鉄分やマンガン斑の沈着が著しい。同層は下部で均質な灰オリーブ色～明青灰色細粒砂となり、検出面下約70cm(標高90.0m)では湧水が認められた。

3. 検出遺構 (図51・52・53)

調査の概要 調査は、まず、現地表の水田耕土と床土をバックホーで除去した面において、遺構検出を行っている。遺構面は、遺物包含層が調査区北西部を中心に広がっていたが、それより南側では、基本的に地山が露出する状況であった。したがって、旧来の地表面は、後世の農耕活動によって削平されていることが想定される。

遺構は、中世以降の農耕活動に伴う素掘溝と古墳時代に帰属すると考えられる遺構群が重複しており、特に、古墳時代の遺構群に関しては、調査区全面にかなり高い密度で分布していることが判明した。このことから、素掘溝を完掘し、遺物包含層を除去した段階で、遺構の切り合いを正確に把握すべく、素掘溝の凹凸が消えるところまで遺構面全体を任意で掘り下げている。掘り下げ後の遺構面は、標高90.9～90.7mを測っている。検出遺構は、竪穴住居1棟、溝14条、土坑9基、柱穴69基を確認している。

以下、古墳時代の主要な遺構の解説を行っていくが、本文中で触れなかったものについては、章末に「表5 縦向遺跡第138次検出遺構一覧表」を掲載しており、そちらを参照して頂きたい。

竪穴住居1 調査区北西部および拡張区において検出した竪穴住居である。平面形はほぼ正方形で、規模は南北長5.1m、東西長4.8m、床面積24.5㎡を測り、南北軸はN-28°-E方向である。

住居は地山を掘り込んで構築されており、床面は層厚8cmのふい黄褐色小礫～細粒砂混じりシルトで整地を行った上に、層厚2cmの褐色極細粒砂混じりシルトからなる貼り床を施している。検出面から貼り床上面までの深さは20cmを測り、貼り床上面の標高は90.60～57mとほぼ水平である。

覆土は、炭化物粒を含むふい黄褐色粗～極細粒砂混じりシルトである。

炉跡については、住居中央部に位置すると推定されたが、溝3に切られているために未確認であった。ただし、住居の北東コーナー付近を中心に、焼土と炭化物が面的に広がる箇所を検出している。焼土と炭化物は、特に東側の壁際で厚く集積しており、周辺には数個の拳大の角礫が散在する状況が観察された。また、分布範囲は、壁際から半ドーナツ形に広がるようにみえたが形状が不定形であることから、旧状を把握することはできなかった。

周壁溝は、地山の壁面から約10cm内側に位置し、住居内を全周していると推定される。溝は断面「U」字形を呈し、幅約15cm、深さ約15cmを測る。部分的には、東側中央付近の長さ1.5mの範囲が幅25cm前後に広がっている。土層断面の観察では、周壁溝と地山の壁面との間に褐色細粒砂混じりシルトが認められた。土留め材を固定する裏込めの痕跡と考えられる。

主柱穴は、Pit101(北西)・Pit102(北東)・Pit103(南西)・Pit104(南東)の4基を確認している。各コーナーより1.4～1.2m内側へ正方形に配置され、柱間距離は2.6mを測っている。主柱穴の平面形は長径約60cm、短径約45cmの楕円形で、貼り床上面からの深さは70cm前後である。西側のPit101・103では径13cmの柱痕を確認したが、東側のPit102・104は抜き取りの痕跡が認められた。

北側のPit101・102と西側のPit101・103の柱間では、Pit105とPit106の2基の柱穴を検出している。Pit105は、径約60cmの不整形円形であり、深さは15cmを測る。Pit106は、溝3に切られているため正確

な規模は分からなかったが、残存部分は幅39cm、深さ22cmを測り、Pit105と同規模の柱穴であったと推定される。また、北東のPit102からは西・南側に住居の壁面と並行する2条の小溝がのびている。西側の溝101は、Pit102とPit106をつなぐ位置にあり、全長60cm、幅12cm、深さ3cmを測る。南側の溝102は、Pit104との中位位置までのびており、全長100cm、幅14cm、深さ5cmを測っている。

住居のコーナー付近では、土坑101・土坑102の2基の土坑を検出した。土坑101は、南東コーナーに位置し、平面形は長径113cm、短径78cmの不整楕円形で、深さ40cmを測る。埋土は中位に粘土や細粒砂からなる自然堆積層を挟み、上部は地山ブロックを含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。土坑102は、北西コーナー部に位置する隅丸方形の土坑で、長辺65cm、短辺39cm、深さ25cmを測っている。埋土は褐色シルト～粘質シルトを主体とし、層中には炭化物・焼土の小片が含まれていた。これらの土坑には遺物がほとんど含まれなかったため、機能を明らかにできなかったが、貯蔵穴の可能性が考えられる。

竪穴住居1の出土遺物については、床面直上に伴うものが皆無であり、覆土中から若干の古式土師器片と小鉄片1点を採集するにとどまった(図58・62)。したがって、住居の機能時期を特定する資料は得られなかったが、廃絶時期は覆土中の出土遺物から、布留1式期段階と考えられる。

溝1 調査区南西に位置しており、検出長8.8mを確認している。南北方向にのび、北端が西側へ屈曲する平面形状である。溝の西肩ラインはN-12°-E方向に直線的であるのに対し、東肩ラインは緩やかなカーブを描く。幅は、最も広い中央部で2.4mを測り、北側の屈曲部で最も狭くなり1.5mである。深さも中央部が深く、北・南側に向かって浅くなっており、最深部で70cm、北側の屈曲部で45cm、南端で50cmを測っている。溝の断面形は、溝底に多少の凹凸はみられるが、概ね逆台形を呈し、西肩側には浅い段が付いている。埋土は上・中・下の3層に大別される。上層は褐色小礫～中粒砂混じり粘質シルトであり、近接する溝2と一連の堆積物である。中層は褐色粘土と黄灰色細粒砂が互層をなし、ある程度滞水した状態で堆積した様相を示す。下層は、褐色細粒砂と褐色粘質シルトがブロック状に混在し、掘削直後から溝の周囲より崩落・流入した土層と考えられる。

溝2 溝1の東側に近接する検出長15.0mの溝である。平面形は、西肩ラインが不整形な円弧状を呈し、東肩ラインは直線的にN-19°-E方向を指向する。東肩ラインについては、北・南端で東側に屈曲しており、屈曲部間では約12mを測っている。規模は中央部で最大幅3.5m、深さ65cmを測り、溝1と同様に北・南側に向かって狭く、浅くなる。北側の屈曲部付近では、幅1.0m、深さ8cmの最小値を測り、上端幅1.3m程のテラス状の平坦面が存在する。この平坦面より東側は再び溝幅が広がり、深くなっており、調査区外へと続いている。断面形は溝壁が急勾配で立ち上がる逆台形である。埋土は上・中・下の3層から構成される。上層は溝1と一連をなす褐色小礫～中粒砂混じり粘質シルトである。中層は褐色粘土を主体とする粘質の土層が、溝の中央部を中心に広がっており、下部には植物遺体が押し潰されたような状態で残存していた。下層は崩落・流入土と考えられるにふい褐色細粒砂や褐色粘質シルト等のブロック土層からなる。

溝1・溝2の堆積過程についてみると、当初空壕のような状態であり、次に下層のブロック土の堆

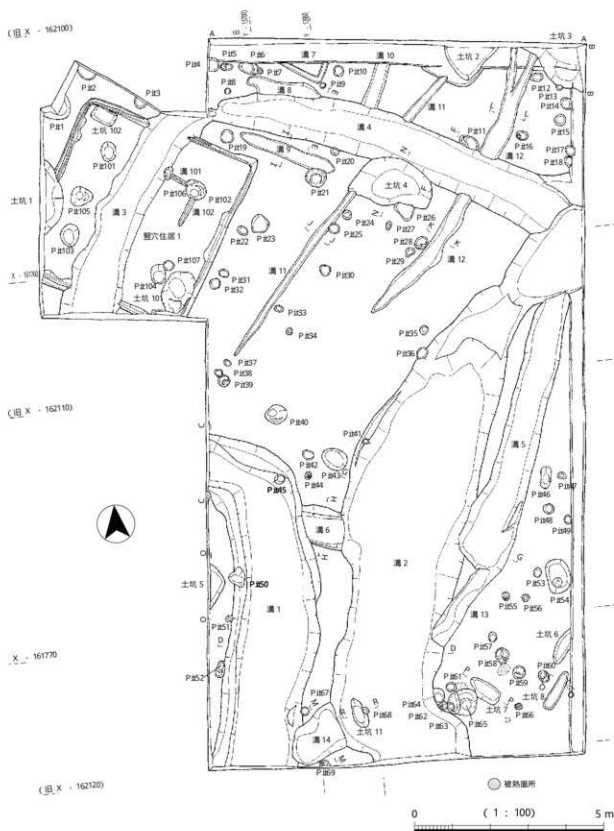


图 51 掘向遺跡第 138 次調査区平面図 (S 1 100)



図2 調査区北壁・溝・土境断面図 (S=1/80)

積にみられる土砂の崩落・流入がはじまり、中層の粘土が溜まるような滞水した状態を経て、浅い窪地状となった段階で、上層にあたる一連の土層が堆積し、溝の機能が失われるに至ったと考えられる。溝1と溝2の各段階で堆積した土層の特徴には大きな差異が認められず、両溝はほぼ同時期に併存していた可能性が高い。ただし、下層のブロック土についてみると、溝2は両側の肩部からの流入が認められる一方、溝1は西側の層厚が厚く、東側に下降する様相が観察され、西側肩部からの土砂供給が顕著であった。このことは、溝1が掘削された段階で、すでに溝2が存在していたために東側から流入する土砂の量が少なかったことを示している。したがって、溝2→溝1の先後関係が想定される。

溝の時期は、他の遺構との切り合い関係から、検出した遺構の中では最も新しい段階に位置づけられる。掘削時期は、後述する溝3～6を切っていることから、布留1式期を上限とするが、埋土の中層以下からは、二次的に混入したと考えられる古式土師器の細片が出土したのみであり、明確な時期をおさえることはできなかった。最終埋没の時期については、埋土の上層から6世紀中頃～後半の時期とみられる須恵器の細片が出土している（図61）。

ここで、溝1と溝2の機能と性格を検討しておきたい。溝1・溝2は、埋土の状況から、近い時期に相前後して掘削され当初は空濠のような状態であった可能性が考えられた。近接した位置に掘削されているにもかかわらず、切り合いが認められないことは、両溝がほぼ同時期に機能していたことを裏付けるものである。また、溝の機能は、取排水を目的としたものよりも、「区画」としての性格が強いことがうかがえ、溝によって区画される空間は、溝1は西側、溝2は東側に存在することが推定される。さらに、形態的には、両溝あるいは一端が直角気味に屈曲する平面形をもち、その内側は直線的なラインを指向し、外縁は緩やかなカーブ、または不整形な円弧状を呈する点で共通する特徴がみられ、これらの特徴から、方形の平面形を推定することが可能であり、幅、深さの最大値を測る溝の中央部を中心として線対称に展開すると、溝1は内法の一辺が約8m、溝2では一辺約12mの方形区画を復元することができる。以上の点から、溝1・溝2の性格について積極的な評価を与えるならば、2基の方形周溝墓の周溝になる可能性を提示しておきたい。しかし、出土遺物等から補完する成果が得られなかったため、今後の調査に期するところが大きい。

溝3 調査区北西の拡張区で検出している。溝の方向はN-28°-Eで、規模は、検出長6m、最大幅1.5m、検出面からの深さは36cmを測る。北端で溝4に繋がっており、接続部では幅0.5m、深さ21cmを測っている。遺物は、中層相当の暗褐色細粒砂～シルト混じり極細粒砂層中に多く含まれる。同層は、拡張区中央で幅約3mの不整形な範囲に広がっており、残存率の高い高環・二重口縁壺・甕・小形丸底壺など、布留1式期と考えられる古式土師器がまとめて出土している（図53・59）。

溝4 調査区北側に位置している。溝3の北端から東側へ直角に屈曲し、9.5mのびている。東端を溝2に切られている。規模は、幅1.3～0.5m、深さ45～21cmを測り、溝底は中央部が深く、東西に浅くなっている。断面形は逆台形で、区画内側の方が壁面の傾斜が緩やかである。溝の西寄りの地点において、埋土中層の暗褐色小礫～極細粒砂混じりシルト層より用途不明の鉄製品が出土している。

溝5 調査区の東側に位置し、北・南端を溝2に切られている。溝はN-21°-Eを指向し、規模は検出長7.7m、幅1.2~1.0m、深さ22cmである。溝の南端付近で、ほぼ完形の鉄製鉢が出土している(図54・62)。出土層位は、埋土中層にあたる暗褐色小礫混じりシルト層である。

溝6 調査区の中央南寄りて検出した。溝の両側を溝1・2に切られるため、長さ1.0m分しか残存していない。溝はN-80°-W方向に掘削されており、規模は幅1.1m、深さ16cmを測っている。

溝3~6は、先述の溝1・2によって寸断されているが、溝の規模や埋土の状況から本来、一連の溝であったと判断された。埋土は、上層の灰黄褐色粘土・中層の暗褐色砂礫混じりシルト・下層の地山ブロックを含む暗灰黄色極細粒砂混じりシルトの3層に大別され、場所ごとに色調の濃淡や土質の粗細はあるものの、面的にも同一の堆積物として把握されるものであった。溝の時期については、溝3~5より出土した

古式土師器(図59・60)から、布留1式期頃に比定される。これらの溝は、東西長11m・南北長9mの方形区画を構成する位置関係にあり、方形周溝墓の周溝になる可能性が高い。溝4・溝5より出土している鉢などの鉄製品は、本来、埋葬施設に伴う副葬品と推定される。

溝7 調査区北端西寄りの地点で検出した平面「L」字形の溝である。幅17cm、検出面からの深さ12~5cmで、溝の底は西側到低くなる。断面は「U」字形で、埋土は灰色粗粒砂を主体とする。

溝11 調査区北半に位置し、北東方向へ直線的にのびている。溝4・土坑2・土坑4と切り合っており、土坑4→溝11→溝4・土坑2の先後関係が明らかになっている。検出長9.3m、最大幅26cm、深さ17cmを測り、浅い皿状の断面形状である。溝底は北東方向に下っており、溝の両端で10cm前後の比高差がある。埋土は暗褐色~褐色の細粒砂混じりシルトであり、色調から上下2層に細分が可能であったが、特に流水の痕跡等は観察されなかった。

溝12 調査区の北東側で検出しており、北端は土坑3に切られている。概ね北東方向を指向し、緩やかに湾曲しながら北側で二又に分岐する溝である。検出長8.4m、最大幅56cm、深さ25cm、分岐後は幅25cm前後を測る。溝底は北東側が低く、両端で約30cmの比高差が付いている。

溝13 調査区の南東側で検出した溝で、溝2・5に切られている。溝5の南端から南西方向にのびるかたちで4.4m分を検出しており、幅52~44cm、深さ45~39cmを測っている。埋土は径10cm以下の砂粒や地山ブロックを含む褐色シルトからなり、下部に灰黄褐色シルトの薄層が認められた。

溝14 溝13の南西延長線上に位置する。溝2を挟んで、溝の規模や埋土の様相が若干異なるため、別番号を付しているが、本来、溝13と同一遺構であった可能性が高い。東西を溝1・2に切られてい

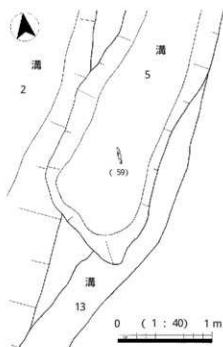


図54 溝5・鉢出土状況(S=1/40)

るため不明な点が多いが、南西端では溝底が取東気味に立ち上がる形状であった。幅1.2m、深さ53cmであり、断面形は逆台形を呈し、南側壁面がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、上層が小礫以下の砂粒を含む褐色極細粒砂～シルト、中層が軟質な灰黄褐色粘質シルト、下層が小礫以下の砂粒を含む褐色灰色シルト～粘質シルトの大別3層に分けられる。また、各層間には、南側肩部から土砂の流入が顕著に認められ、砂礫層やブロック土層からなる薄層が挟まれている。

上記の小溝群は、溝1～6との切り合いから、これらに先行する時期のものである。しかし、いずれも出土遺物が希少であり、機能や性格、遺構の相関関係などは不明な点が多い。

土坑3 調査区北東隅に位置する土坑である。検出規模は、長軸1.7m、短軸1.2m、深さ102cmを測るが、輪郭線から長楕円形の平面形状を復元することが可能であり、かなり大型の土坑（長軸4m以上か？）になることが推定される。埋土の上層から中層は、ブロック状の構造が残る黒褐色シルト～粘質シルトが認められ、人為的に埋め戻された様相が観察された。下層は、炭化物を多量に含む黒褐色粘質シルトで、残存率の高い古式土師器片も多く出土している（図56）。土器の時期は、布留0式期に比定される。最下部では湧水が認められ、水成の灰色粘質シルトが堆積し、壁面は大きく抉れている。以上の埋土の状況から、当初、湧水を利用した井戸としての機能が考えられる。

土坑4 調査区中央のやや北寄りで検出しており、溝4・11に切られている。形状は不整楕円形であり、規模は長軸2.0m、短軸1.4m、深さ68cmを測っている。埋土は旧地表面からの土砂流入によって徐々に埋没した様相を示し、砂礫の混入する暗褐色～黒色粘質シルトが互層状をなし、下部はやや粘性を帯びている。他の遺構との切り合いから、検出遺構の中では古い段階に位置づけられるが、出土遺物は皆無であり、時期は特定できなかった。

土坑8 土坑8は、調査区南東端で検出した長楕円形の土坑である。規模は、長軸1.1m、短軸0.3m、深さ7cm測り、長軸は北東方向を指向する。遺物包含層の除去作業中には、土坑8の直上にあたる位置から、小形丸底鉢と小形器台が出土している（図55・57）。小形丸底鉢はほぼ正位に置かれ、小形器台も上から押し潰された状況で出土していることから、人為的に埋納された可能性が高く、本来、土坑8に伴っていたものと考えられる。土器は布留0～1式期の範囲で捉えられるもので、先述の堅穴住居1よりも先行する時期と考えられる。また、この土坑8周辺では、地山上面で被熱により赤変した箇所が点在しており、土坑との関連性が注目される。

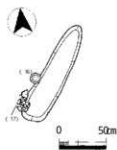


図55 土坑8
土器出土状況
(S=1/40)

柱穴群 調査区の全域に分布しており、検出数は69基を数える。先述の溝1・溝2・溝3～6を方形周溝墓とした場合、その墳丘下に相当する場所でも、分布状況に差異はみられない。このことから、いずれも溝の開削を遡る時期に構築された可能性が高く、布留1式期以前のものと考えられる。今回の調査では、調査区の制約があり、上部構造を復元することはできなかった。しかし、堅穴住居や小溝と同様に南西～北東方向、あるいはこれと直交する方向を主軸として並列する傾向が認められ、掘立柱建物や枕列など、居住域に関連する施設の存在を示唆するものである。（清水）

4. 出土遺物 (図56~62)

(1) 出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナケースで約6箱分の遺物が出土した。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・鉄器などで構成されるが、古墳時代前期に属する古式土師器が大多数を占めている。大半の個体は小片であり、完形に近い状態に復元されるものはわずかにすぎなかった。以下ではまず出土土器・鉄器の形態的特徴について記述し、その後に出土遺物及び遺構の時期について検討することにする。

なお、土器の法量・色調・残存状況については、一覧表(表6)において示している。

(2) 出土土器

土坑3出土土器 土坑3では数十点の土師器片が出土したが、このうち比較的大きな破片は、いずれも下層の粘質土(図18・19層)に含まれていた。器種は甕や壺、高坏、鉢などで構成され、完形に近い状態で検出されたのは埴形鉢(14)の1点のみであった。図56では出土した土器のうち15個体を図示している。調査区の都合上、土坑の全容は明らかにできなかったが、土坑の下層埋土には多量の土器片が含まれていたと推定される。

図56の(1)~(3)は、体部の外面にタタキを施す甕である。口縁部の形態はそれぞれ特徴的で、(1)はわずかに内湾して端部に面を有し、(2)は外反する口縁の端部を外側に肥厚させる。(3)の口縁は直線的のびて端部を丸くおさめるものであった。(4)はわずかに内湾する口縁部を持つ甕である。口縁端部はほぼ丸くおさめており、肩部は張りの弱い面である。体部の外面はミガキにより仕上げ、内面はハケ調整の後にナデを施している。(5)は突出する平底を持つ甕である。体部下半は若干丸みを帯びており、球形に近い体部形態が想定される。外面はタタキ、内面はハケ調整により仕上げられている。

(6)は皿状の体部に、直線的に広がる口縁部が付く高坏である。体部と口縁部の境界には明瞭な稜を有している。脚部は、短い脚柱部と外反して広がる裾部で構成されており、裾部の中程に円形透孔が3方向に配されている。脚端部はナデにより仕上げられ、上方に肥厚する形状を示す。なお外面の大半および坏部の内面にはミガキが施されていた。(7)・(8)は高坏の脚部である。いずれも中空の脚柱部と大きく広がる裾部を有しており、円形の透孔が開けられている。外面にはタテ方向のミガキが施されており、(8)の裾部内面にはハケメがみとめられた。

(9)は短く外反する広口壺の口縁部である。端部に面を有しており、口縁の中程に円形の小孔が穿たれている。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のハケメがみとめられた。(10)は広口壺の口頭部で、外側へ屈曲する口縁部を持つ。頸部から肩部の外面にはハケメが残存していた。(11)はやや扁平な球形を示す体部と、細くしまった頸部が推定される個体である。体部外面はミガキ、内面はハケ調整及びナデにより仕上げられている。細頸壺の体部と考えてよいであろう。(12)は短く外反する口頭部を持つ短頸壺である。体部はやや縦長の球形を呈しており、内面にはハケメがみとめられた。

(13)は小形鉢で、短く外傾する口縁部を有している。体部の内面はケズリが施されており、外面にはタタキの痕跡が観察される。(14)は小形の埴形鉢で、わずかに内湾して外側に広がる体部を持つ。

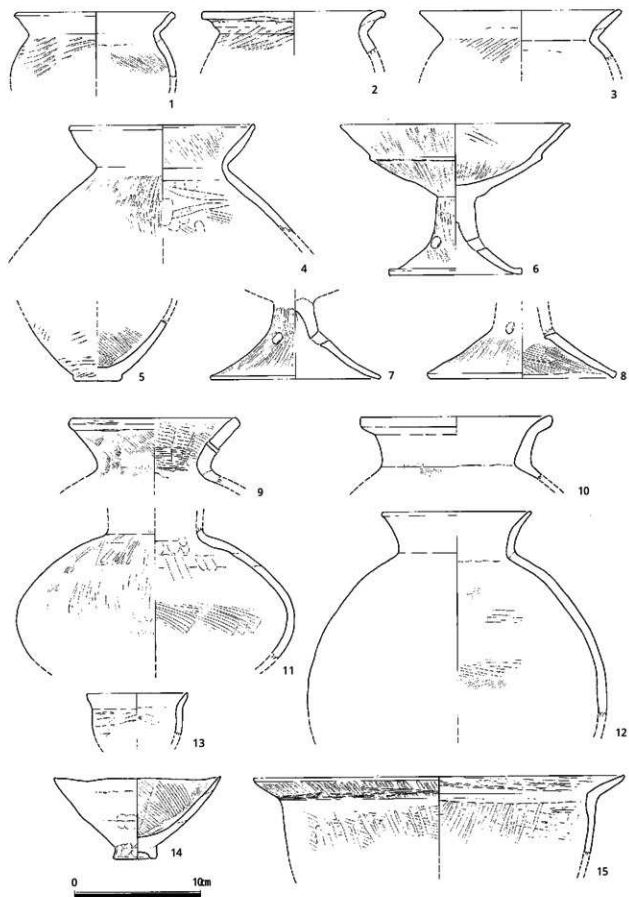


图56 土坑3出土土器 (S=1/3)

口縁端部は丸くおさまられていた。底部は突出して中央をくぼませる形態で、その外面には整形時の指頭圧痕が残存する。なお体部の内面には、ナナメ方向のハケメがみとめられた。(15)は鉢で、丸みを帯びた体部に大きく外傾する口縁部を伴う個体である。体部の外面はハケ調整、内面はケズリ調整をおこなうが、いずれもその後にはタテ方向のミガキを施している。口縁部の内面はヨコハケ、外面にはタテ方向のミガキがみとめられた。

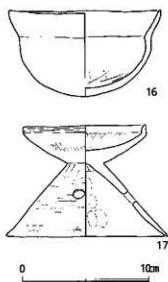


図57 土坑8出土土器 (S=1/3)

土坑8出土土器 図57の(16)は小形丸底鉢である。体部は半球形を呈し、短くわずかに内湾する口縁部を有している。内面底部付近には板状工具によると思われる調整痕がみとめられた。(17)は小形器台である。体部は皿状で、口縁部は短く垂直に立ち上がって外反させている。脚部は直線的に広がる形態で、その中程には円形の透孔が3方向に配されている。体部の外面にはハケメ、内面にはミガキがみとめられた。脚部の外面にはヨコ方向のミガキを施し、その内面には指頭圧痕が残存していた。

竪穴住居1出土土器 竪穴住居1からは、住居内の土坑・ピット及び上層の埋土から土器の小片が出土した。図58では土師器6点を図示している。

(18)～(20)は竪穴住居の埋土より出土した。(18)は小形器台の受部である。皿状の体部に、ほぼ垂直に立ち上がって外反する口縁部が付く形態である。口縁端部は丸くおさまられている。(19)はS字状口縁台付甕の脚台接合部付近の破片である。外面には明瞭なハケメが見られた。(20)はわずかに内湾して端部の内面を肥厚する口縁部を有する甕である。体部の内面はケズリが施されていた。

(21)は住居内のPit101から出土した甕である。口縁部は内湾して端部を丸くおさめている。体部の内面はケズリ調整がおこなわれていた。

(22)・(23)は住居内の土坑101から出土した。(22)は複合口縁を持つ甕である。口縁部は外反する形状を示している。器壁の摩滅が著しいが、口縁部の外面には擬凹線文と思われる数条の沈線が観察される。(23)は突出する平底を持つ甕である。外面にはタタキがみとめられた。

溝3出土土器 竪穴住居1を切る状態で検出された溝3からは、多くの土師器片が出土している。確認された器種としては、小形丸底鉢、小形丸底壺、高坏、直口壺、二重口縁壺、甕などがあり、甕

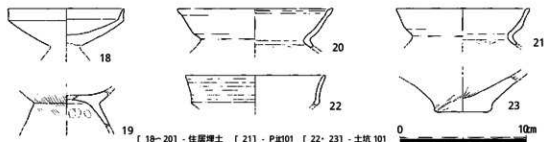


図58 竪穴住居1出土土器 (S=1/3)

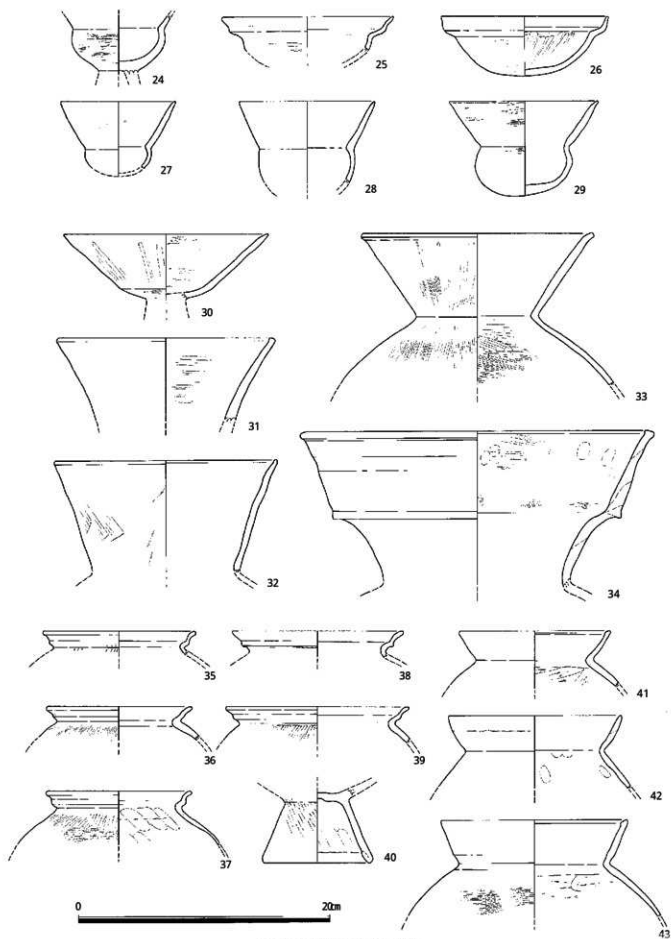


图59 清3出土土器 (S=1/3)

は図化できた9点のうち6点がS字状口縁台付甕であった。

図59の(24)は脚台付小形鉢である。口縁部は外傾して広がるが、端部は欠失している。半球形の体部外面にはヨコ方向のミガキが施されていた。(25)は有段口縁を持つ小形丸底鉢である。口縁の屈曲部より上の部分は外反して外側に広がり、端部は丸くおさめている。体部外面はミガキにより仕上げられていた。(26)も有段口縁を持つ小形丸底鉢である。体部は浅い境状を呈し、屈曲する口縁の上半は(25)ほど外反しない。体部外面はヨコ方向のミガキ、内面はタテ方向のミガキが施されていた。(27)～(29)は小形丸底壺である。いずれも直線的に広がる口縁部を有しており、端部は丸くおさめている。体部はやや扁平な球形を示しており、外面にはヨコ方向のミガキがみとめられた。

(30)は高杯の坏部である。短い体部に直線的に長くのびて広がる口縁部を有しており、端部は丸くおさめられる。口縁部外面はタテ方向のミガキ、体部外面及び坏部内面はヨコ方向のハケメが施される。(31)・(32)はわずかに外反する直口壺の口縁部である。口縁端部は内側上方に肥厚させている。

(31)の内面にはヨコ方向のハケメ、(32)の外面にはナナメ方向のハケメがみとめられた。(33)は直口壺で、直線的に広がる口縁の端部付近を外側へわずかに屈曲させている。口縁から肩部にかけての外面にはタテハケを施し、体部の内面には指オサエの後にヨコハケ調整をおこなっている。(34)は二重口縁壺の口頸部である。外反して広がる頸部に直線的にのびる口縁部が付く形態で、頸部と口縁部の境界には外側下方へ突出する稜が形成される。口縁部の内外面はヨコ方向のナデにより仕上げられているが、内面にはヨコハケが残存していた。

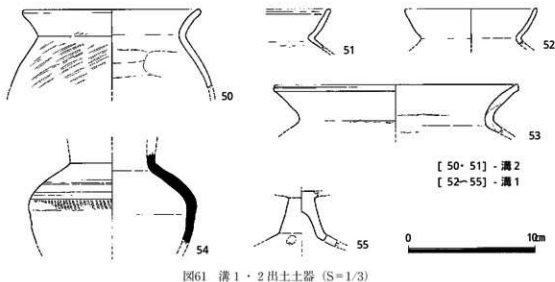
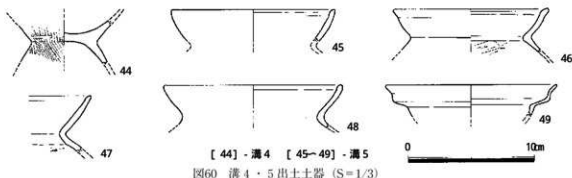
(35)～(39)はS字状口縁台付甕の口縁部付近の破片である。口縁部は断面形態がS字状を呈し、肩部にはタテハケが施される。(37)の外面には一部ヨコハケもみとめられた。(40)はS字状口縁台付甕の脚台部である。脚端部は内側に折り返して丸くおさめている。外面にはナナメ方向のハケ調整を放射状に施しており、内面は指ナデにより仕上げられる。(41)は内湾する口縁を有する甕で、口縁端部の内面を肥厚させる個体である。体部の内面にはケズリ調整がおこなわれている。(42)は内湾する口縁部を持つ甕で、口縁端部は丸くおさめられている。口縁外面に粘土接合痕が明瞭に残存していた。

(43)は直線的にのびる口縁部を持つ甕で、口縁端部は内側に肥厚させている。体部の外面はヨコハケ、内面はケズリにより仕上げられていた。

溝4・5出土土器 調査区北半で確認された溝4からは土師器の小片が出土したが、図化することができたのはわずかに1点のみであった。調査区中央東寄りの位置で検出された溝5からは、甕や小形丸底壺などの土師器片が出土した。

図60の(44)は、溝4で検出されたS字状口縁台付甕の脚台部付近の破片である。外面には明瞭なタテハケが観察された。(45)～(48)は、溝5出土の内湾する口縁を持つ甕である。口縁端部は内側に肥厚させており、(46)や(47)の体部内面にはケズリを施していた。(49)は、溝5より出土した有段口縁を持つ小形丸底鉢である。口縁は外反して外側に開いており、その端部は丸くおさめられていた。

溝1・2出土土器 溝1・2からは土器の小片が出土している。上層から下層にかけて土師器及び弥生土器と思われる破片が含まれており、両方の溝で共有される上層埋土(1層)には須恵器片が



数点含まれていた。

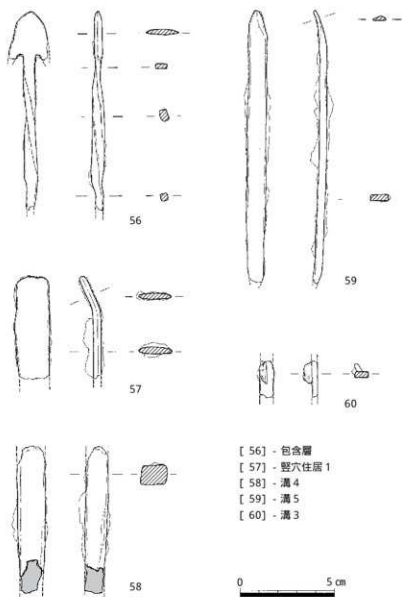
図61の(50)・(51)は溝2埋土中層(7層)出土の甕である。(50)は外反する口縁部を持つ甕で、体部外面にタタキを施し、内面をナデにより仕上げている。(51)は内湾する口縁を有する甕で、口縁端部を内側に肥厚している。

(52)～(55)は溝1出土の土器である。(52)・(53)は甕で、(52)の口縁は内湾して端部を丸くおさめている。(53)の口縁は外反するもので、端部に面を形成し、そこに弱い沈線を巡らせている。(54)は須恵器の直口壺と考えられる個体である。張りのある肩部付近の外面には梅揃列点文が施され、体部の上半にはカキメがみとめられた。(55)は短い脚柱部と大きく広がる裾部を持つ高坏である。裾部には円形の透孔が開けられていた。なお、(53)は溝1最下層出土、それ以外は上層より出土している。

(3) 出土鉄器

図62の(56)は包含層より出土した鉄鍔である。頸部長は6.5cmを測り、残存長は10.6cmである。鍔身部及び基部の一部を欠いており、頸部は約180度回転する振りを有する点が特徴的である。鍔身部には逆刺が見られ、断面形態は基部が正方形、頸部が長方形、鍔身部は凸レンズ形であった。頸部に振りを有する鉄鍔は古墳時代前期末に出現し、中期に盛行するものであることから²⁾、この個体の所属時期もまた古墳時代中期頃に求めるべきであろう。

(57)は、壑穴住居1の埋土より出土した用途不明の鉄器片である。幅1.6～1.8cm、厚さ約0.4cmを測



- [56] - 包含層
- [57] - 竪穴住居 1
- [58] - 溝 4
- [59] - 溝 5
- [60] - 溝 3

図62 出土鉄器 (S=1/2)

る短冊形を呈し、端部から約2cmのところでは屈曲が見られた。この屈曲が当初からのものであるかどうかは不明である。(58)は溝4より出土した棒状の鉄器である。断面形態は幅約1.4cm、厚さ約1.1cmの長方形で、長さ7.8cm分が残存していた。この個体の用途も不明である。(59)は溝5より出土した鉋である。残存長14.4cmで、基部の末端をわずかに欠いている。刃部は長さ1.4cmを測り、その断面形は三角形であった。なお木質や布等の付着はみとめられなかった。(60)は溝3より出土した鉄器の小片である。断面形態は幅0.7cm程度、厚さ0.3cmの長方形で、残存長は1.9cmであった。片面に木質の残存が見られ、木装を伴う製品であったと推定される。

なお (58) ~ (60) について

では、方形周溝墓を構成する溝3~5より出土していることから、本来埋葬施設に伴う副葬品であった可能性が考えられる。

(4) 出土遺物と遺構の時期

土坑3出土土器の時期 図示した遺物はすべて下層(18・19層)に含まれていたものであり、その出土状況から一括性の高い遺物群として理解することができる。

全体の形状が復元される高坏(6)は、口縁部の外反度合は小さいものの、体部高と口縁部高がほぼ等しいことなどから、弥生土器の第五様式的な器形であると言えるだろう。(9)・(10)などの広口壺や(11)のような細頸壺もまた第五様式期に多く見られる器種である。これに対し、短頸壺(12)や小形丸底鉢(13)は庄内式期に盛行する器種であり、また甕(4)は内湾する口縁を有する布留形甕である。

このように土坑3出土土器は、かなりの時期幅におよぶ資料を包括しているように考えられる。しかし出土状況を参考とするなら、これらは比較的短期間に集積されたものであると考えるべきであろう。出土土器のうち型式的に最も新しく考えられるのは甕(4)であり、布留式期の古相段階に位置付けることができる。これに古い様相を示す個体が共存する状況を考え合わせると、土坑5出土土器は布留0式期に属する資料群であると理解される。

土坑8出土土器の時期 これら2個体の土器は、近接して検出された状況からセット関係にあったものと考えられる。小形器台(17)はその形態から布留0～1式期頃の時期が与えられ、小形丸底鉢(16)についても同時期のものと理解される。

竪穴住居1出土土器の時期 口縁部が外反する小形器台(18)や布留形甕(20)・(21)の存在などから、布留式古相段階の土器群と考えられる。この住居を切り込み溝3の出土遺物の時期を下限とするなら、竪穴住居1の所属時期は布留1式期頃と考えてよいであろう。

溝3出土土器の時期 各個体を概観すると、布留形甕や短頸の直口壺、小形丸底壺などの存在から、布留式期の所産であることがわかる。小形丸底壺の形態に目を向けると、口縁部高と体部高がほぼ同等の個体(28・29)と、前者が後者を凌駕する個体(27)が存在している。また小形丸底鉢は有段口縁を備えるものが目立つ(25・26)。これらの個体の形態的特徴から、溝3出土土器は概ね布留1式期に位置付けることができるだろう。

溝4・5出土土器の時期 溝5からは布留形甕(45～48)や有段口縁を持つ小形丸底鉢(49)が出土しており、溝3と同様に布留1式期頃に考えてよいであろう。溝4については、すでに述べたように溝3・溝5とともに方形周溝墓の周溝を構成すると考えられ、両者と同時期のものとすることができる。

溝1・2出土土器の時期 溝1・2出土遺物については時期幅をみとめることができる。(51)・(52)は布留形甕で、(50)・(53)にはもう少し古い時期が考えられそうである。(54)は須恵器の直口壺で、脚台部を有するものであろうか。6世紀中頃から後半頃の時期を与えることができる。

(福辻)

5. まとめ

今回の調査では、縦向遺跡南東部の標高90m前後を測る扇状地上において、古墳時代の遺構群が高密度に分布する状況を確認した。竪穴住居1をはじめ、井戸と考えられる土坑3や土器を埋納した土坑8、溝や柱穴群など、集落の居住域に関連する遺構が数多く検出されたほか、鉢などの鉄製品が出土した溝3～6や屈曲部をもつ溝1・2は方形周溝墓の周溝の可能性があり、調査地周辺が墓域としても利用されていたことをうかがわせる。

出土遺物については、土坑3・8、溝3～5から残存率の高い古式土師器が纏まって出土している。土坑3が布留0式期、土坑8が布留0～1式期、溝3～6が布留1式期の所産であり、古墳時代前期初頭～前半の時期に構築されたものであることが判明している。また、少量ではあるが、竪穴住居1の覆土から布留1式期の古式土師器片、溝1・2の埋土上層から古墳時代後後半頃の須恵器片が出

土しており、各遺構の最終的な埋没時期をおさえることができた。ただし、溝1・2の掘削時期については、古墳時代の前期前半から後期後半の間でかなり流動的である点は注意が必要である。遺構の性格の問題も含め、周辺での調査例の増加を待って慎重に検討したい。

以上の成果から、調査地における土地利用の状況についてみると、溝3～6の間削を契機として、居住域から墓域へと変容した可能性が考えられる。調査地周辺は、これまでの発掘調査例が希薄な地域であり、当地において布留0～1式段階の居住域を確認したことは、縦向遺跡の集落構造を考える上で貴重な発見であったといえるだろう。また、布留1式期以降に展開する方形溝墓群の可能性を提示することができたことは、縦向遺跡の変遷課程を解明する重要な手がかりとなるものであり、調査地西側の巻向川北岸地域に形成された小規模古墳群との関連性についても、今後注目されるところである。

(清水)

【註記】

1) 本文における土器の調整技法・編年観は以下の文献に準拠する。

- 古式土師器：寺沢薫福 1986年『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
須志器：田辺昭三 1981年『須志器大成』角川書店
2) 杉山秀宏 1988『古墳時代の鉄鏡について』『橿原考古学研究所論集』第8巻 吉川弘文館

表5 縦向遺跡第138次検出遺構一覧表

遺構名	形状(単位)	規模		埋没	層位	土色(土相)	土質	出土遺物	
		平面	深さ						
期外遺跡1	平面：正方形	北辺長	約46m	埋没層：約25m	3	白帯層：L200-250m 褐色 L10YR4-3 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 土間に散在した布留あり 溝1埋布留を含む	一六式土師器 (全層1点) 小形鉄鏡片	
		東辺長	約46m						
		南辺長	約46m						
		西辺長	約46m						
		掘削長	約100m						
縦溝線：北	平面：直線	全長：約75m	掘削深さ：約15m	90.49～86m	1	埋土黄褐色 L10YR4-3 S.M.O. L10YR4-4	縦線状砂状じりシート	堀山ブロックを多く含む	
縦溝線：南	平面：直線	掘削深さ：233cm	掘削深さ：約13m	90.53～86m	1	---	---	---	
縦溝線：西	平面：直線	掘削深さ：435cm	掘削深さ：約14m	90.49～28m	1	埋土黄褐色 L10YR4-2	シート(真流のみ不明瞭)	---	
縦溝線：南	平面：折線	掘削深さ：約24～150m	掘削深さ：約44m	90.47～44m	1	埋土黄褐色 L10YR4-2 S.M.O. L10YR4-4	縦線状砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート	堀山ブロックを多く含む	
Pa101	平面：横長方形 縦溝：十字形 縦溝あり	長径	520m	埋没層：約13m 掘削深さ：約3m	800cm	1 2 4 5	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 5 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	300m						
		掘削深さ	約13m						
		掘削深さ	約3m						
Pa102	平面：正方形 縦溝：十字形	長径	320m	埋没層：約72m 掘削深さ：約44m	800cm	1 2 4 5	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 5 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	310m						
		掘削深さ	約72m						
		掘削深さ	約44m						
Pa103	平面：正方形 縦溝：十字形 縦溝あり	長径	620m	埋没層：約72m 掘削深さ：約74m	800cm	1 2 4 5	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 5 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	600m						
		掘削深さ	約72m						
		掘削深さ	約74m						
Pa104	平面：横長方形 縦溝：十字形	長径	310m	埋没層：約71m 掘削深さ：約27m	800cm	1 2 4 5	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 5 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	270m						
		掘削深さ	約71m						
		掘削深さ	約27m						
Pa105	平面：正方形 縦溝：十字形	長径	350m	埋没層：約52m 掘削深さ：約50m	80.40cm	1 2	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	350m						
Pa106	平面：正方形 縦溝：十字形	長径	350m	埋没層：約52m 掘削深さ：約50m	80.40cm	1 2	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	350m						
Pa107	平面：正方形 縦溝：十字形	長径	300m	埋没層：約26m 掘削深さ：約25m	80.37cm	1 2	1 柱礎 褐色色 L10YR3-2 2 瓦片 黄褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	300m						
溝1	平面：直線 縦溝：直線	全長	約90m	埋没層：約9m 掘削深さ：約14cm	90.51m	1	褐色色 L10YR4-6	縦一線形砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート
		掘削深さ	約9m						
溝2	平面：直線 縦溝：直線	全長	約90m	埋没層：約2m 掘削深さ：約14cm	90.47cm	1	L200-250m 褐色 L10YR4-3	縦一線形砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート
		掘削深さ	約2m						
土師101	平面：横長方形 縦溝：溝状	長径	113cm	埋没層：約58m 掘削深さ：約10.10m	90.10m	1 2 4 6 7	1 上層 褐色色 L10YR3-2 2 中層 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 6 赤褐色 L10YR4-2 7 下層 褐色色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	約39cm						
		掘削深さ	約10.10m						
		掘削深さ	約10.10m						
		掘削深さ	約10.10m						
		掘削深さ	約10.10m						
		掘削深さ	約10.10m						
土師102	平面：横長方形 縦溝：溝状	長径	60cm	埋没層：約28m 掘削深さ：約20.27m	90.27m	1 2	1 褐色色 L10YR4-6 2 褐色色 L10YR4-6	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	約39cm						
溝1	平面：横長方形 縦溝：溝状 西辺は直線 南辺は直線 東辺は直線 北辺は直線 掘削深さ：約130cm 掘削深さ：約220～180cm 掘削深さ：約220～180cm	長径	約74m	埋没層：約25m 掘削深さ：約20.27～90.00m	90.27～90.00m	1 2 4 5 6	1 上層 褐色色 L10YR3-2 2 中層 黄褐色 L10YR4-2 3 赤褐色 L10YR4-2 4 褐色 L10YR4-2 5 赤褐色 L10YR4-2 6 赤褐色 L10YR4-2	縦一線形砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート 縦線状砂状じりシート	縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート 縦一線形砂状じりシート
		短径	約20.27～90.00m						
		掘削深さ	約20.27～90.00m						
		掘削深さ	約20.27～90.00m						
		掘削深さ	約20.27～90.00m						
		掘削深さ	約20.27～90.00m						

F019	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：30m 幅：25m	積込量：24m	96327m	-	-	-	未設定		
F020	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：23m	積込量：11m	96377m	-	-	-	未設定		
F021	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：34m 幅：25m	積込量：32m	96489m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	小磯→中粒砂混じりシト粒質シト	嵐山ブロックを含む	
F022	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：30m 幅：25m	積込量：4m	96506m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	小磯混じりシト	嵐山ブロックを含む	
F023	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：13m	96536m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→細粒砂混じりシト	嵐山ブロック少量含む	
F024	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：23m	積込量：4m	96565m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	小磯→細粒砂混じりシト		
F025	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：14m	96606m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	小磯→細粒砂混じりシト		
F026	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：30m 幅：25m	積込量：13m	96616m	2	表裏側色 (10YR4/2)	2	表裏側色 (10YR3/2)	小磯→無粗粒砂混じり粒質シトシト	嵐山ブロックを多く含む
F027	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：21m 幅：25m	積込量：23m	96516m	1	柱状	2	表裏側色 (10YR4/2)	細粒砂混じり粒質シト	
F028	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：34m 幅：25m	積込量：13m	96677m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	小磯混じりシト	嵐山ブロックを含む	
F029	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：13m	96636m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	シト混じり無粗粒砂		
F030	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：31m 幅：25m	積込量：17m	96717m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	小磯混じりシト		
F031	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：23m	積込量：13m	96737m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	小磯→細粒砂混じりシト		
F032	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：25m	積込量：4m	96757m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	細粒砂混じりシト		
F033	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：25m 幅：25m	積込量：17m	96666m	2	表裏側色 (10YR3/2)	2	表裏側色 (10YR4/2)	粗→細粒砂混じりシト 粒質砂混じりシト	
F034	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：18m 幅：25m	積込量：23m	96686m	1	シト	2	シト		
F035	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：13m	96586m	-	-	-	未設定		
F036	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：34m 幅：25m	積込量：24m	96486m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	シト	嵐山ブロックを多く含む	
F037	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：14m	96686m	1	柱状	2	中→細粒砂混じり無粗粒砂→シト	若干の粗粒→粗粒砂・多量の嵐山ブロックを含む	
F038	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：4m	96766m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	小磯を含む	
F039	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：31m 幅：25m	積込量：13m	96636m	2	表裏側色 (10YR4/2)	2	表裏側色 (10YR3/2)	粗→中粒砂混じり粗粒シト	嵐山ブロックを含む
F040	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：30m 幅：25m	積込量：13m	96377m	1	柱状	2	表裏側色 (10YR4/2)	小磯→細粒砂混じりシト	粗と嵐山ブロックが混在
F041	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：16m 幅：25m	積込量：23m	96306m	3	表裏側色 (10YR3/2)	2	表裏側色 (10YR4/2)	粗→細粒砂混じり粗粒シト	嵐山ブロックを含む
F042	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：7m	96606m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	粗粒物を多く含む	
F043	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：22m	96486m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	表裏側色 (10YR3/2)	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む
F044	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：13m	96606m	2	表裏側色 (10YR4/2)	2	表裏側色 (10YR4/2)	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む
F045	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：43m	96326m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	高層の粗粒 柱状混在	
F046	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：36m 幅：25m	積込量：13m	96506m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F047	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：7m	96747m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F048	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：41m	96426m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F049	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：15m	96666m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F050	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：14m 幅：25m	積込量：13m	96377m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F051	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：16m 幅：25m	積込量：9m	96326m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F052	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：15m 幅：25m	積込量：21m	96477m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F053	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：24m 幅：25m	積込量：4m	96757m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F054	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：30m	96536m	2	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F055	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：23m	96486m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F056	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：18m 幅：25m	積込量：7m	96636m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	小磯→無粗粒砂を含む	
F057	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：27m	積込量：13m	96306m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	
F058	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：43m 幅：25m	積込量：16m	96616m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F059	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：13m	96666m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F060	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：30m 幅：25m	積込量：33m	96306m	2	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F061	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：43m	96356m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F062	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：22m 幅：25m	積込量：12m	96606m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F063	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：15m 幅：25m	積込量：43m	96177m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F064	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：43m 幅：25m	積込量：20m	96486m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを多く含む	
F065	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：20m 幅：25m	積込量：46m	96217m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	下部は粒質シト主体 粗粒ブロックを含む	
F066	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：18m	積込量：13m	96666m	2	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	
F067	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：21m	積込量：17m	96526m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	小磯→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	
F068	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：25m	積込量：11m	96506m	1	表裏側色 (10YR4/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	
F069	種類：F型 構造：普通 断面：普通 長さ：26m 幅：25m	積込量：4m	96586m	1	表裏側色 (10YR3/2)	2	粗→中粒砂混じり無粗粒砂→シト	嵐山ブロックを含む	

表6 繩向遺跡第138次出土土器一覽表

図番号	写真図版	器種	出土遺構	口径(仮元) (cm)	器高(残存) (cm)	底径(仮元) (cm)	色調(外面)	残存状況	備考
M56-1	図版33-1	甕	土坑3	122	5.2		灰青褐色(10YR5/2)	口縁付底3/4	
M56-2	図版33-2	甕	土坑3	(141)	3.4		黒色(N2/0)	口縁付底1/4	
M56-3	図版33-3	甕	土坑3	(157)	3.9		にぶい青褐色(10YR5/3)	口縁1/2	
M56-4	図版33-4	甕	土坑3	(145)	8.7		にぶい褐色(7.5YR7/3)	口一唇部1/3	
M56-5	図版33-5	甕	土坑3	(4.5)	3.5		にぶい青褐色(10YR6/3)	底部全周	
M56-6	図版33-6	高坏	土坑3	(178)	11.9	(10.4)	灰白色(10YR4/1)	全体1/3	
M56-7	図版33-7	高坏	土坑3		5.9	脚径13.4	灰白色(10YR4/1)	脚径2/3	
M56-8	図版33-8	高坏	土坑3		4.2	脚径(14.6)	灰青褐色(10YR5/2)	脚径1/3	
M56-9	図版33-9	正口甕	土坑3	(130)	5.1		灰白色(10YR7/1)	口縁部1/4	
M56-10	図版33-10	正口甕	土坑3	(148)	4.9		灰白色(10YR8/2)	口縁部1/4	
M56-11	図版33-11	竈頭甕	土坑3	(10.3)			にぶい青褐色(10YR6/3)	体部上半1/4	
M56-12	図版33-12	煎茶甕	土坑3	(11.6)	(16.0)		灰黄色(2.5Y7/2)	口一唇部1/3	
M56-13	図版33-13	小形鉢	土坑3	(7.9)	3.4		にぶい青褐色(10YR6/3)	口一唇部1/5	
M56-14	図版33-14	小形碗形鉢	土坑3	132	6.4	32	にぶい青褐色(10YR5/3)	ほぼ定形	
M56-15	図版33-15	鉢	土坑3	(29.4)	(6.1)		浅黄褐色(10YR8/4)	口一唇部1/3	
M57-16	図版34-16	小形丸底鉢	土坑8	12.0	6.9		褐色(5YR6/6)	定形	
M57-17	図版34-17	小形器台	土坑8	9.6	8.8	脚径12.8	褐色(7.5YR6/6)	ほぼ定形	
M58-18	図版34-18	小形器台	竈穴住居1上層	9.1	3.0		褐色(5YR6/6)	受全周	
M58-19	図版34-19	台付甕	竈穴住居1上層		(2.7)		褐色(5YR7/6)	脚台上半全周	東海系
M58-20	図版34-20	甕	竈穴住居1上層	(12.1)	(3.1)		褐色(5YR7/6)	口縁1/10	
M58-21	図版34-21	甕	竈穴住居1土坑101	(10.3)	(2.9)		褐色(2.5YR6/8)	口縁1/10以下	
M58-22	図版34-22	甕	竈穴住居1土坑101	(11.0)	(2.4)		褐色(7.5YR6/6)	口縁1/10以下	
M58-23	図版34-23	甕	竈穴住居1土坑101		(2.8)	40	黒褐色(10YR3/2)	底部2/3	
M59-24	図版34-24	台付鉢	溝3		(4.4)		褐色(7.5YR4/3)	体部1/2	
M59-25	図版34-25	小形丸底鉢	溝3	(13.5)	(2.7)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁付底1/5	
M59-26	図版34-26	小形丸底鉢	溝3	(13.2)	4.7		にぶい褐色(7.5YR6/4)	全体1/2	
M59-27	図版34-27	小形丸底鉢	溝3	(9.0)	5.3		にぶい青褐色(10YR7/4)	口一唇部1/5	
M59-28	図版34-28	小形丸底甕	溝3	(10.7)	(6.4)		にぶい青褐色(10YR6/4)	口一唇部1/5	
M59-29	図版34-29	小形丸底甕	溝3	(11.6)	7.5		褐色(5YR6/6)	全体1/2	
M59-30	図版34-30	高坏	溝3	(16.2)	(5.1)		褐色(5YR6/6)	坏部1/6	
M59-31	図版34-31	直口甕	溝3	(16.8)	(6.5)		にぶい青褐色(10YR7/3)	口縁1/5	
M59-32	図版34-32	直口甕	溝3	(17.4)	(8.7)		にぶい褐色(7.5YR5/4)	口縁1/5	
M59-33	図版34-33	直口甕	溝3	(18.1)	(11.9)		にぶい褐色(7.5YR5/4)	口一唇部1/3	
M59-34	図版34-34	二重口鉢甕	溝3	(27.0)	(12.2)		にぶい青褐色(10YR6/4)	口縁1/3	
M59-35	図版34-35	台付甕	溝3	(2.0)	(1.9)		にぶい褐色(5YR6/4)	口縁1/4	東海系
M59-36	図版34-36	台付甕	溝3	(11.4)	(2.5)		にぶい青褐色(10YR7/3)	口一唇部1/3	東海系
M59-37	図版34-37	台付甕	溝3	(11.3)	(4.2)		にぶい褐色(5YR6/4)	口一唇部1/5	東海系
M59-38	図版34-38	台付甕	溝3	(13.4)	(2.1)		にぶい青褐色(10YR6/3)	口縁1/8	東海系
M59-39	図版34-39	台付甕	溝3	(14.3)	(2.8)		褐色(5YR6/6)	口一唇1/10	東海系
M59-40	図版34-40	台付甕	溝3		(5.2)	脚径8.3	浅黄褐色(10YR8/3)	脚台部1/5	東海系
M59-41	図版34-41	甕	溝3	(11.7)	(4.4)		にぶい褐色(10YR7/4)	口一唇部1/6	
M59-42	図版34-42	甕	溝3	(13.6)	(5.8)		浅黄褐色(7.5YR8/4)	口一唇部1/5	
M59-43	図版34-43	甕	溝3	(14.6)	(7.6)		にぶい褐色(7.5YR5/4)	口一唇部1/6	
M60-44	図版34-44	台付甕	溝4		(3.4)		にぶい青褐色(7.5YR7/4)	脚台上半全周	東海系
M60-45	図版34-45	甕	溝5	(12.9)	(3.4)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁1/4	
M60-46	図版34-46	甕	溝5	(12.1)	(3.4)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口一唇部1/6	
M60-47	図版34-47	甕	溝5		(4.4)		にぶい褐色(7.5YR7/4)	口縁1/12	
M60-48	図版34-48	甕	溝5	(14.0)	(3.4)		にぶい褐色(7.5YR5/4)	口縁1/8	
M60-49	図版34-49	小形丸底鉢	溝5	(13.5)	(2.6)		明赤褐色(2.5Y5/6)	口縁付底1/6	
M61-50	図版34-50	甕	溝2中層	(13.8)	(6.3)		にぶい青褐色(10YR6/4)	口一唇部1/5	
M61-51	図版34-51	甕	溝2中層		(3.1)		にぶい褐色(7.5YR6/4)	口縁付底1/12	
M61-52	図版34-52	甕	溝1上層	(10.2)	(2.7)		にぶい褐色(7.5YR7/3)	口縁1/8	
M61-53	図版34-53	甕	溝1最下層	(19.1)	(3.9)		にぶい青褐色(10YR6/4)	口縁1/8	
M61-54	図版34-54	煎茶鉢・甕	溝1上層		(7.1)		灰白色(N7/0)	体部1/4	
M61-55	図版34-55	高坏	溝1上層		(4.4)		浅褐色(5YR8/4)	脚径部全周	

第3章 矢塚古墳の測量調査

1. はじめに

矢塚古墳は桜井市大字東田字矢塚所在の前方後円墳であり、廻向石塚古墳や東田大塚古墳・勝山古墳・ホケノ山古墳などとともに発生期の古墳として早くから注目されていたものの、昭和46年度の墳丘測量・周濠の部分的な調査以降は全く手付かずの状態にあり、実態については不明な部分が多い古墳である。今年度は墳丘の範囲やその構造などについての資料を得るために測量調査を行うこととなった。

古墳の現状をみると墳丘については畑や水田の耕作に伴い大きく改変を受けているうえ、大半が楡林や竹林として利用されており、あまり良好な状況とは言えない。周濠部分についても現在ではその多くが条里に則った水田として耕作されており、全くその痕跡を確認する事はできない状況にある。

2. 既往の調査

矢塚古墳が初めて文献に登場するのは「大和古墳墓取調書」である。この文献は明治26年に奈良県嘱託の野酒龍潜によって編纂された県内の古墳の実態調査報告であり、これには当時の絵図（図63）と観察記録が記載されている。解説文では「第二百三十号 式上郡廻向村大字東田字矢塚 第二百三十一号 同村同大字勝山 第二百三十二号同村大字大谷字石塚ニアリ三塚ハ其ニ宏壮ナル築造ニシテ往古ハ前方後円ナラント思惟スルモ今ハ皆開墾シテ蜜柑畑ト為シ且諸處発掘ノ痕アリテ其全形ヲ知ルアタハズ別ニ伝説等ノ考証スベキ無シト雖モ其構造ヨリ推考スルモ皇族以上ノ御墓所ナルハ疑フベカザルモノト考フ」と記載されている。

絵図では前方部は全く表現されていないが、本来は前方後円墳であったと推定されており、現状とは違って段築の名残と考えられる三段の墳丘が良好な状態で残っていたようである。

絵図に併記されている当時の墳丘高は三間半（約6.3m）、後円部墳丘の根廻は六十五間（約117m）で、現在の墳丘高6.3m根廻200mと比較すると根廻は大きな差があるが、これは誤差が大きすぎるため計測ミスと考えてよかろう。高さについてはほぼ当時のままであるが、明らかに墳頂部の平坦面が減少しており、大きな改変を受けている事は明白である。

この古墳の発掘調査は廻向小学校の建築に先立って行われたもので、トレンチは小学校西側の道路及びプール建設予定地にあたる墳丘東側の周濠部分に設定されている（図64）。

調査の結果、後円部墳丘に沿う形で幅17~23m、深さ60cmの

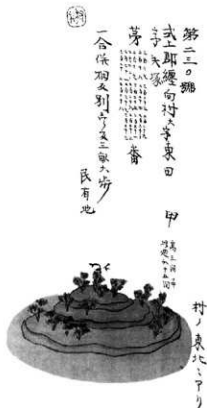


図63 矢塚古墳古絵図

【大和古墳墓取調書】より

周濠が検出されるとともに調査区東南部分からはこれに接続する幅約6mの溝が検出されている。

この溝は北へと派生し、周濠と併行して屈曲しつつ約28mにわたって確認されており、報告書では「恰も2重の周濠を持つようにも見える」とされているが、位置的には縦向小学校のグラウンド部分で検出されている東田北溝の南部に接続するとみられ、縦向石塚古墳の第4次調査で確認された導水溝の様な機能を果たしていたかと考えられる。

出土遺物には周濠からの出土土器があるが、導水溝と周濠の接続部分付近からは3層に分層される周濠埋土の下層から、多くの土器が約2m四方の範囲内から集中して出土しており、一括性の高い資料と考えられている。

器種構成は壺・甕・高坏などの他、ミニチュアの線刻土器などがあり、庄内3式期の典型的なものとして位置づけられる資料である。

築造時期については埋葬施設や墳丘の構造の手掛かりが無く特定は困難であるが、周濠出土の土器の時期が庄内3式期とまとまった様相を呈しており、築造時期もこの頃とする考えが多い。

3. 測量調査の成果

さて、墳丘測量図の作成にあたっては原図の縮尺は1/200で、25cmコンターで等高線を示している。測量図に基づく古墳の全長は約96mで、後円部径約64m、後円部高は周囲の水田との比高で約6.3mであり、細かな数値については従来の考え方と大きく異なる部分はない(図65、図版36・37)。後円部については墳丘の北側は本来段築が想定される墳丘の二段目から上が大きく改変を受けて平坦化されており、南側についても水田開発によって墳丘の裾部分が北側へと大きく侵食を受けている。

また、前方部は殆ど見えなくなっているが、墳丘の西南部分の水田区画の形状からは前方部の名残とみられる張り出しが僅かに確認できる。

埋葬施設についてはかつて墳頂部に石室材らしき板石が少量散乱していたようで、竪穴式石室の存在が推定された事もあったが、現在は確認できずその構造は一切不明である。ただし、推定復元に基づく後円部の中心は図66に示したように現在の墳頂の平坦面からは北へとずれており、竪穴式石室が存在したとすれば後円部北側の改変に際して石室の多くが破壊されたはずであり、斜面に多くの板石の露頭が確認されても良いはずであるが、そのような記録や痕跡は全く残っておらず、現時点では竪穴式石室の存在を考えるよりも木棺直葬や木槨墓などの構造を考えるほうが妥当ではないかと考える。

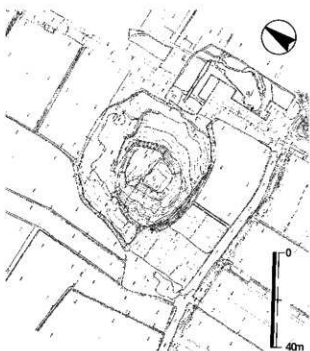


図64 矢塚古墳調査地位置図 (1/1,600)



图65 矢塚古墳墳丘測量図 (1/1,000)

周濠の形状は測量図からの観察では一切確認が出来ない。図64は今回再測量を行った墳丘図に当時のトレンチ図を合成したものであるが、当時の調査が国土座標での測点を残していないため完全な合成図とまではいかないものの、古墳との位置関係はほぼ間違いないものと考えている。これを見ると周濠は後円部の円弧とは同じラインを持たず、後円部南側では幅17m、北側では幅23mと調査区の南と北では6mものばらつきがあり、北に向かうほど徐々に外側へと開いている様子が良く解る。あるいは古墳主軸線上で周濠が最も広くなり側面に移行するに従って徐々に窄まってゆく様な形状となるのかもしれないが、全体的な形状の検討については今後の調査を待つこととしたい。

4. 築造企画について

図66には墳丘の企画について復元案を示している。この築造企画については従来考えられてきた縦向型前方後円墳の類型の一つとされる矢塚タイプと同じ形に設定を行っている。

このうち、後円部の形については残りの良い北側墳丘裾と調査によって確認されている東側墳丘部分とを結んで復元したもので、径は約64mとみてほぼ間違いないものと考えられるが、前方部についてはその形状を復元する手掛かりが前方部北側の水田と畑の形状のみであり、その幅やクビレ部の様相など不明な部分が多い。

ここでは前方部の幅やクビレ部については他の縦向型前方後円墳での調査成果から復元を試み前方部前面幅32m、クビレ部幅22.5mに設定を行った。

また、前方部長についても32mと現状で確認できる長さよりも若干長めに復元を行っている。これについても明確な根拠を持たないものの、縦向遺跡の他の古墳が具備する縦向型前方後円墳の築造企画である全長：後円部径：前方部長 = 3 : 2 : 1の比率に基づいて設定したものであり、正確な墳形復元については将来の範囲確認調査を待って再度検討することとしたい。

(橋本)

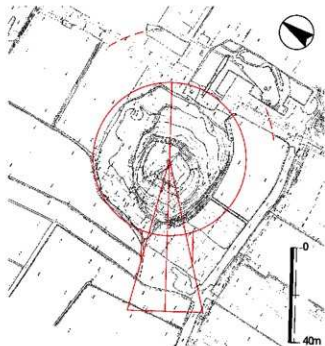


図66 矢塚古墳墳丘復元案 (1/1,600)

【註記】

- 1) 石野博信・岡川尚功編 1979『縦向』桜井市教育委員会
- 2) 野淵龍潜編 1893『大和古墳墓取調書』奈良県
- 3) 『大和古墳墓取調書』では大字大谷となっているので原文のままとするが、縦向石塚古墳所在地の大字は太田(オオタ)であり、誤植と考えられる。
- 4) 寺澤薫編 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 寺澤薫 1988『縦向型前方後円墳の築造』『考古学と技術』同志社大学

第4章 まとめ

平成15年度に行った国庫補助による調査のうち、磐余遺跡群第6次調査、大藤原京関連遺跡第43次を除く7件の発掘調査報告および矢塚古墳の測量調査を報告することができた。いずれも小規模な調査であるが、いくつかの調査について重要な成果が得られている。

東新堂遺跡第9次調査（第2章 第1節）は、当初期待されていた大藤原京の道路側溝や弥生時代の遺構などは発見されなかったが、13世紀代だと思われる柱穴3基を検出した。調査地周辺は、奈良盆地南部の幹線道路である中和幹線が開通しており、開発に伴う調査が増加している地域である。最近の調査では、この時代の遺構が多く中世集落の実態を解明する上での資料が蓄積されつつあり、今後注目される。

能登遺跡（第2章 第2節）は市立図書館建設工事に先立つ第1次調査で、古墳時代初頭（庄内式期）の独立棟持柱建物、堅穴住居などの遺構が確認されており、今回の2次調査もこれらと併行する時代の遺構、遺物が見つかることができた。狭小な面積での調査ではあったが、能登遺跡の更なる広がりを示すことができたことは重要な成果であった。

市内北部の纏向遺跡の調査は箸中地内の隣接した場所ですべて4件行われた（第2章 第4～7節）。纏向遺跡の南東部は、これまで調査事例が少なく不明な部分が多かった。今回の調査では、旧河川内から古墳時代前期の土器が多量に出土したこと（第136次）、古墳時代の堅穴住居2基（第137・138次）、古墳時代後期の古墳（第135・137次）などの大きく分けると3つの成果があった。以下その成果をみていきたい。

まず、第136次調査では、調査地が古墳時代前期の河川上に位置していたが、河川堆積や洪水堆積層から、古墳時代前期を中心とする時代の土器片が多量に検出された。このことは、今回の調査地から比較的近い上流域において、当該期の居住域が存在したことを示唆するものとして注意される。調査地北東側の段丘崖上には、西側に眺望が開ける緩傾斜地が広がっているが、この一帯に布留0式期頃を中心とする時代の居住域を想定することができるのではないだろうか。纏向遺跡では、これまで遺跡の西部や北東部において居住域や居館域の存在が想定されている²⁾。今回の調査成果は、この纏向遺跡東部にも古墳時代前期の集落域が広がることを明確に指摘するものであり、纏向遺跡の全体像を考える上で重要な資料であるといえることができる。

第137・138次調査で2基の堅穴住居の検出されている。両調査区の第137次調査の北端、第138次の西端で堅穴住居を検出しており、両調査区の遺構密度からみてその間にはさらに住居域が広がるものと考えられる。これまでの纏向遺跡における住居跡の検出例は、遺跡南西部の標高70m前後を測る低地部において、第59次調査（北飛塚地区）と第112次調査（ビハクビ地区³⁾）での2例が確認されているのみであった。住居の時期は第59次調査例が庄内3式期、第112次調査例が布留0～1式期と考えられている。今回検出された堅穴住居は、遺跡南東部の標高90mを測る扇状地上に立地しており、時期は

第137次調査、第138次調査とも、布留1式期に位置づけられる。特に第137次調査の堅穴住居（SB3070）では多量の土器が出土し、土器の編年や当時の土器組成などを考える上で重要な資料となる。第138次調査では、堅穴住居1と方形周溝墓（溝3～6）との遺構の切り合いから、布留1式期の溝3～6の開削を契機として、土地利用の状況が、居住域から墓域へと変容した可能性が考えられ、縦向遺跡の集落構造の変遷を考える上で重要な資料となるであろう。

また、もうひとつの大きな成果として、古墳時代後期の様相を明らかにできたことである。第135次調査から出土した埴輪から平塚古墳が6世紀代の古墳であることが確定でき、第137次調査では、直径約18mの円墳（池田1号墳）を検出した。その他でも第137次調査の方墳（池田2号墳）や第138次調査の2基（溝1・2）などは出土遺物が希少なため時期が特定できないが、後期古墳の可能性もあるものが検出されている。また、過去の調査で未報告であった第46次調査（付載1）でもSD01・02から6世紀後半～7世紀初頭の須恵器が多量に出土しており、溝が円弧を描くことや、土器の器種組成から見ても古墳の可能性が高いと思われる。特に、平塚古墳から出土した埴輪に菅原東遺跡埴輪窯から供給されたものが含まれる可能性があり（付載2）、その被葬者も中央政権に深く関わった人物の可能性が高い。時期や規模の点からみても今回明らかになった後期古墳の中では突出した存在で、平塚古墳の築造を契機にこれらの古墳群が形成されたものだと考えられる。この地域周辺で古墳時代後期に特定できるものとして、ホケノ山古墳後円部内の横穴式石室、前方部東側の4基の古墳、慶運寺裏の2基の古墳などがあげられ、ホケノ山古墳を中心にやや密集した様相を示している。また、その北側には30～15mほどの円墳が点在しており、後期古墳の可能性のあるものが多くみられる。これらを含めて後期古墳群としてのグルーピングなどを明らかにすることがこれからの課題である。古墳時代前期のいわゆる「縦向」の時代だけでなく、古墳時代後期の様相も注目しなければならないであろう。これら平成15年度に行われた縦向遺跡の調査は不明な点の多い南東部の様相の一端を明らかにするものであり、縦向遺跡の全体像に新たな展開をみせるものである。周辺の今後の調査に期待したい。

国庫補助による発掘調査はいずれも小規模な調査である。しかしながら、小規模な調査であっても今回報告したように重要な成果も多く、こういった成果の積み重ねによって、遺跡の性格、ひいては地域の歴史的な位置づけを明らかにしていくものである。こういったことを意識しながら、過去の痕跡である遺構や遺物に対して、真摯に向き合うことが大切である。

（丹羽）

【註記】

- 1) 清水真一 1997「能登遺跡発掘調査報告」[1996年度発掘調査報告書1]（財）桜井市文化財協会
- 2) 橋本輝彦 1995「縦向遺跡第80次発掘調査報告書」[桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2] 桜井市教育委員会
- 3) 橋本輝彦 2003「縦向へ行く1～初期ヤマト政権発祥の地を歩く～」桜井市立埋蔵文化財センター
- 4) 岡林孝作 2001「V 4 横穴式石室」『ホケノ山古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編
第1・2次調査担当者橋本輝彦氏（桜井市教育委員会）によると、前方部東側では、第1次-5、第1次-6、第2次-2、第2次-3の各トレンチから、6世紀後半代と思われる横穴式石室の残骸や周溝などを確認している。

付載 1 纏向遺跡第46次調査報告

1. はじめに

纏向遺跡第46次調査は、桜井市箸中556番地の2及び563の一部地内で行われた個人住宅建築に伴い行った発掘調査である。調査区は東西12m、南北5mの調査面積60㎡である。調査期間は昭和61年4月2日～5月18日にかけて行われた。本書報告の纏向遺跡第135～137次の近接した場所(図26)で調査であり、未報告であったため今回報告することになった。当時の調査体制は以下のとおりである。古い段階の調査でもあり、遺漏、誤記があれば御容赦願いたい。

桜井市教育委員会事務局

教育長 外嶋尚春、教育次長 坂本昌弘、社会教育課長 内藤新治、文化財係長 萩原儀征、
主任技師 清水真一、主事 松田有司

調査担当者 萩原儀征

調査補助員 木場幸弘、中村麻里子、福島有美

調査作業員 植田光雄、植西靖治、嶋岡道子、杉本増雄、辻カズ子、藤本ミサヲ、堀内和江、
堀内安子、松下京一、山口勇、山口平治郎

2. 基本層序

基本層序を上からみていくと、①淡灰色粗砂泥じり土(現代耕作土)(図67-1~4)、②淡黄灰褐色粗粒泥じり土~灰褐色粗粒砂・小礫泥じり土(図67-6・7)、③暗灰褐色土(図67-12~14)、④淡黄灰色砂礫層(地山層)になる。②は瓦器片などを含み鎌倉時代以降に堆積したもので、③層は須恵器の細片を含む古墳時代後期以降の包含層だと思われる。地山層以下は、大きいものでは20cm程度の礫を含む層もあり、河川による自然堆積層だと思われる。なお、遺構検出は、地山層上面で行っている。

3. 検出遺構

地山上面で、調査区北東隅と中央で溝2条検出している。また、中央の溝(SD02)の底に円形の落ち込み(SX03)を検出している。以下、各遺構について詳述していく。

SD 01 調査区北東隅で北東側に落ち込んでいく溝を検出している。溝の北側の肩は検出していないが、断面では溝の中心(最深部)が検出されているので、それから推測すると幅約2~2.5m、深さは検出面から約0.4mある。溝の平面形は南西側に張り出す弧状の曲線を描いている。埋土からは須恵器環類、短頸壺、提瓶などが出土している。

SD 02 調査区の南東隅から北西隅にかけて、ちょうど中心部を流れる溝を検出している。若干、北東側に張り出すように弧を描いているようにも見える。幅約2.5~3mで、深さは最大で約0.8mを測

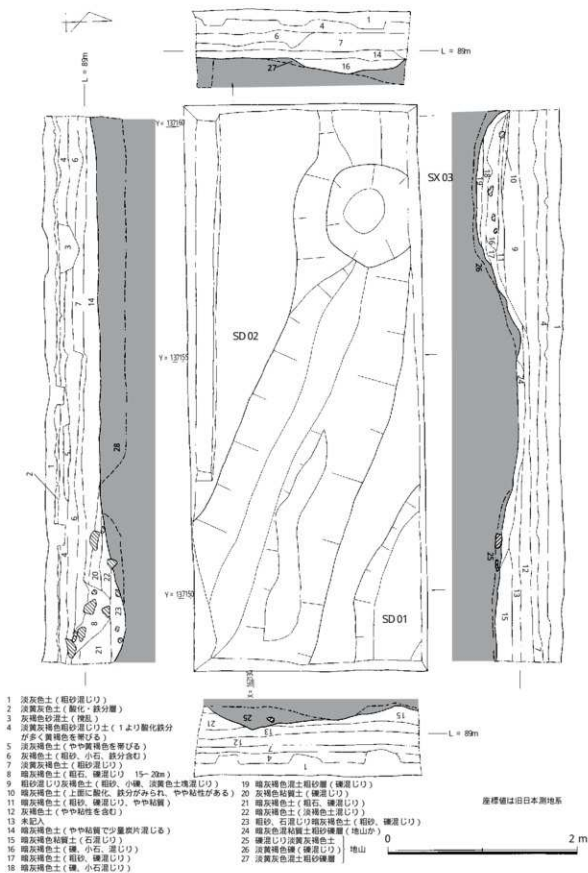


図67 調査区平面・断面図 (S=1/80)

る。溝の埋土からは須恵器坏類、甕、長頸壺などが出土しており、特に溝の東側と中央で比較的多く出土している。

SD 03 SD02の西端の底に直径約2 m、深さ約0.4mの円形の落ち込みがある。SD02の北西部の底から検出されている。SD02と一連の遺構の可能性もある。出土遺物は須恵器坏や大甕片などが出土している。坏身は完形で出土している。図示できなかったが大甕の破片はコンテナケース1箱ほど出土しており、大きいものでは30cm四方ほどある。ただ、口縁部は残っておらず、全体の規模から考えても1/3程度の破片しか出土していない。しかしながら、他の遺構ではこのような大甕の破片がほとんどみられないことから、この場所に意図的に埋納された可能性がある。

4. 出土土器

縦向遺跡46次調査の出土土器はコンテナケースに換算すると約9箱分出土している。大半は古墳時代後期の須恵器を占めるが、包含層中や各遺構の埋土からは古墳時代初頭と思われる古式土師器の小片も多く見られた。以下、遺構ごとに詳細をみていく。

SD 01 出土土器 (図68-1-13) 坏蓋(1-3)の口縁部は外方に下降し、口縁部端部を丸くおさめている。天井部外面は1/2ほどヘラケズリ調整が行われている。坏蓋の口径は13-14.6cmである。

(2)は天井部と口縁部の境に稜を意識したような浅い沈線が施されている。坏身(4-9)のたがひは約1cm程度で内傾している。底部外面はヘラケズリ調整が行われている。坏身の口径は10.8-13.8cmあるが、12.4cm前後のものが大半を占める。(10)は無蓋高坏の坏部であるが脚部は欠損している。体部には櫛描き列点文が施されている。(11)は短頸壺で口径8.6cm、器高は12.4cmである。口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。(12・13)は提瓶で、(12)は口縁部と体部の一部を欠いているが(13)はほぼ完形で出土している。両方とも体部外面全体には同心円文状にカキメが施され、特に(13)はカキメを施す工具の尻痕が残っており、その上からさらにカキメ調整を施しているようである。

SD 02 出土土器 (図68-14-18) (14・15)は坏身である。底部外面にはヘラケズリ調整が行われる。たがひは1cm未満で内傾して、口縁部は丸く仕上げている。口径は、(14)は12.4cmで、

(15)は13.4cmである。(16)は台付長頸壺で、口縁部と脚台部の端部を欠いている。肩部には櫛描き列点文が施されそれをはさむように2条の沈線が施され、口縁部近くにも2条の沈線が施されている。

(17)は平瓶である。口縁部を欠いており体部は削れているもののほぼ完形である。口縁部付近には2条の沈線が施されている。底部から体部下半にかけてヘラケズリを行い、上半はカキメを施している。肩部には1-2条の波状文が施されている。天井部の装飾は特徴的で竹管文が3つ兩脇の2箇所に施されている。また、天井部中央付近にボタン状の浮文が1つ貼り付けられている。(18)は口径16.4cm、器高26.8cmで、胴部最大径26cmの須恵器の甕で、底部は穿孔されている。体部上半を欠いており、全体の3/5程度残存している。口縁部は外方し、端部を丸く仕上げている。体部内面には同心円状の当て具痕があり、外面にはタタキ調整をおこなったあと、一部にカキメ調整を行っている。口縁部

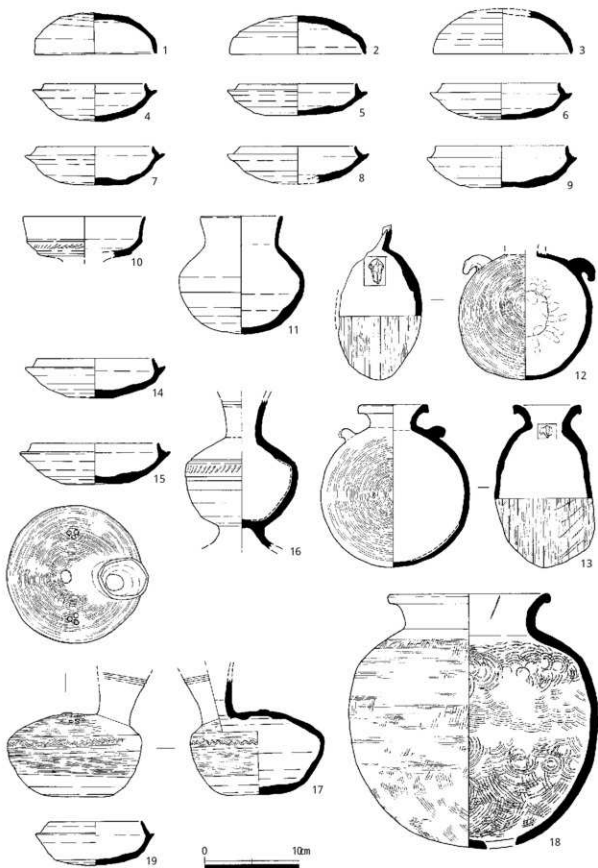


図68 縦向道跡第46次調査出土土器① (S=1/4)

内面には縦方向にヘラ記号が刻まれる。

SX03 出土土器 (図68-19) (19)は坏身で、口径は9.8cmで器高は4.6cmである。たちあがりは約1.5cmで他の遺構出土の坏身と比べやや長い。底部はヘラケズリ調整が行われている。完形で出土している。

各遺構の時期 SD01とSD02の出土土器で共通している坏身を比較してみると形態や法量が非常に似ている。底部にヘラケズリ調整を施し、たちあがりが短く内傾している。一方、SD01出土の坏蓋をみると(2)の口縁部と天井部の境に稜線の名残のようなものが観察できるものがあるなどやや古い様相を見せるものも含まれるものの、他の坏蓋にはそのようなものがまったくみられない。これら坏類などの形態などあわせて考慮すると、田辺編年のTK43式期におおよそあてはまるものだと考えられる。しかしながら、SD01からは平瓶(17)が出土しており、それを考慮するとやや時期幅を持たせて6世紀後半から7世紀初頭の時期を考えたい。一方、SK03から出土した坏身(18)は口径9.8cmと先にあげたものよりやや小さく、たちあがりがやや長いなど先述した坏類とは形態がやや異なる。一見、古い様相をみせているが、口縁端部は特に面などを持たず、底部のヘラケズリ調整の範囲も他の坏類より若干狭いなど新しい様相もみられる。SD01やSD02と比較するのは難しい。SX03はSD02と一連の遺構である可能性もあり、ほぼ同時期のものであると考えるのが妥当であろう。

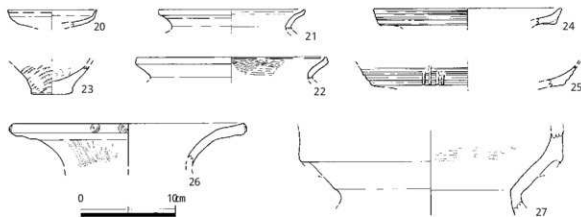


図69 縄向遺跡第46次調査出土土器② (S=1/4)

その他出土土器 (図69) ここでは主に包含層や遺構から出土したものであっても明らかに二次的な混入だと考えられる古墳時代初頭の土器についてみていく。これらの古式土師器は小片が多いため、器種が特定でき口径等の法量が復元できるもの、特徴的な文様が施されている土器の図面を優先的に図示している。

(20)は口縁を外方につまみあげた受部を持つ器台の口縁部である。(21~23)は甕である。(22)は口縁部内面にハケメ調整が施される。(24)は受口状の口縁部を持つ壺で口縁端部に浅い沈線を4条施し、灰白色の胎土を持つ。(25)は外方に広がる口縁端部に3条以上の沈線を施し、4本の棒状浮文を付している。(24・25)の壺の特徴は東海以東の壺の形態に類似していると考えられ、搬入品の可能性がある。(26)は口縁端部に竹管円形浮文を付している壺で、頸部外面にハケメ調整を施す。(27)は

器壁の厚さが1.5cmある大型壺の口縁部であり、口縁部と受部の接合部の外面下部に粘土がはがれた痕跡が残っており、その接合部からさらに垂下するようなものがつく形態を持つと考えられる。

5. まとめ

縦向遺跡46次調査では溝が2条（SD01・02）、SD02の底に円形状の窪み（SX03）の遺構が検出された。これらの遺構は出土した須恵器からおおよそ6世紀後半から7世紀初頭の時期に当てはまるものだと考えられる。出土した土器が提瓶や平瓶、台付長頸壺、穿孔した甕などがみられ、通常の集落などではあまりみられない器種構成になっている。2つの溝はそれぞれ弧を描いているようにみえることなども考慮すると、これらの遺構は後期古墳の周溝である可能性がある。近隣の調査である本書所収の縦向遺跡第135・137次の調査成果（第2章 第4・6節）を考えると、当調査地周辺に後期古墳が集中しており、古墳群を形成している可能性がある。仮に、二つの溝が周溝だとするとSD01は10～15m規模の円墳の周溝、SD02は約30m前後の円墳の周溝を復元できる。たとえ、周溝でないとしても、少なくとも出土遺物は古墳などに関連する祭祀等に関連するものであろう。調査地周辺は、6世紀前半代だと推定される平塚古墳に始まり、7世紀初頭にかけて継続的に墓域を形成していったと思われ、現在想定するよりも多くの後期古墳が築造されていた可能性がある。今後、縦向遺跡の東部に位置する後期古墳群の様相も注目していかなければならないであろう。（丹羽）

【註記】

- 1) 須恵器の形式、編年観は以下の文献による。
田辺昭三 1981年『須恵器大成』角川書店

縦向遺跡第46次調査は、過去の調査であったため遺構に関してはすべて写真や当時の図面などをもとに報告している。遺物は平成15年度に再整理し、実測をおこなった。遺構、遺物の解釈や遺漏、誤記などについての一切の責は筆者にある。

付載 2 平塚古墳出土埴輪の表面にみられる砂礫

奥田 尚

1. はじめに

平塚古墳南側から出土した川西編年のV期に相当する埴輪の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。観察は裸眼により資料全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察した砂礫、砂礫構成から砂礫の採取推定地について述べる。

2. 観察した砂礫

埴輪の表面にみられる砂礫は、岩石片として花崗岩・流紋岩・チャート・火山ガラス、鉱物片として石英・長石・黒雲母・角閃石である。砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大6mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色・灰色・褐色・赤褐色・淡赤褐色・黄土色と様々で、粒形が亜角～亜円、粒径が最大7mmである。石英の斑晶が認められるものもあり、石基がガラス質である。

チャート：色は灰白色・暗灰色・褐色・暗褐色・赤茶色と様々で、粒形が亜角、粒径が最大8mmである。

火山ガラス：黒色透明で、粒径が0.4mm、貝殻状をなす。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大2mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

黒雲母：色は金色で、粒径が最大1mmである。板状をなす。

角閃石：色は黒色で、粒形が角、粒径が最大1mmである。粒状のものが多く、稀に、柱状のものもある。

3. 砂礫の採取推定地

砂礫構成をもとに類型区分すれば、花崗岩質岩起源と推定される1b類型と流紋岩質岩起源と推定される4b類型となる。更に、細分すれば、1b類型は1b1類型に、4b類型は4agn類型・4an類型・4gn類型・4n類型に区分される。各類型の砂礫について述べる。

1b1類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる砂礫からなる。

4agn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、チャート、他形の角閃石が僅かに含まれる砂礫からなる。

4an類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石が僅かに含まれる砂礫からなる。



調査区全景 (西より)



柱穴SP01~03 (南より)



下層ビット群 (南より)



出土遺物



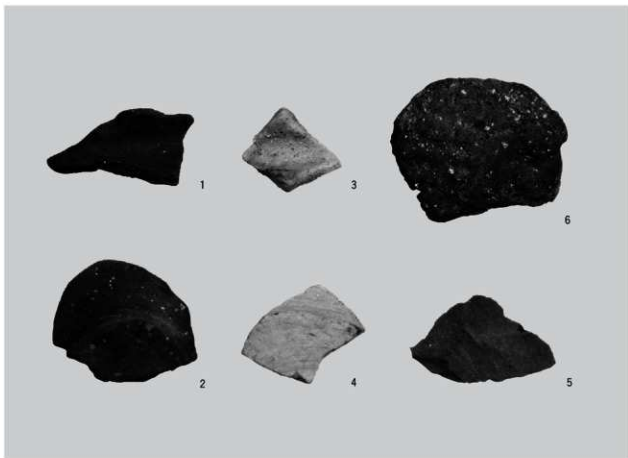
調査区全景(北より)



溝SD02(東より)



土層堆積状況(北西より)



出土遺物



調査区全景（東より）



土層堆積状況（北東より）



上空から見た平塚古墳(上が北、下端駐車場が調査地)



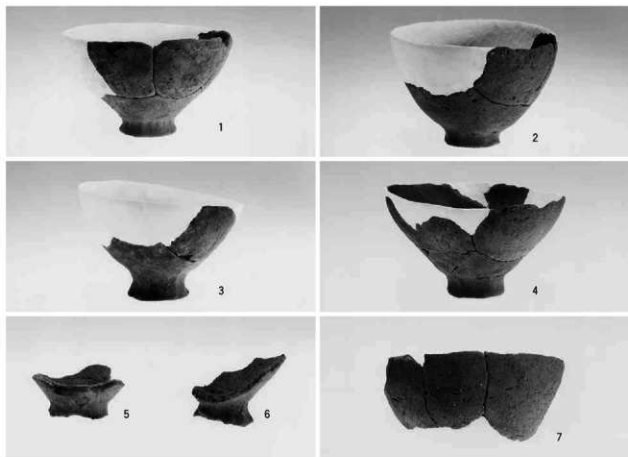
第2トレンチ全景(南より)



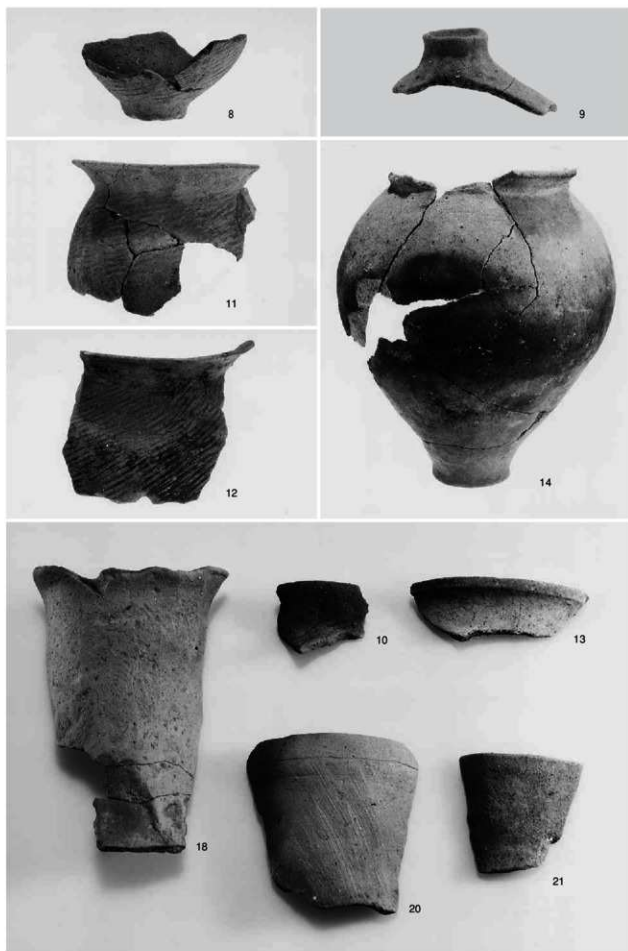
第3トレンチ全景(南より)

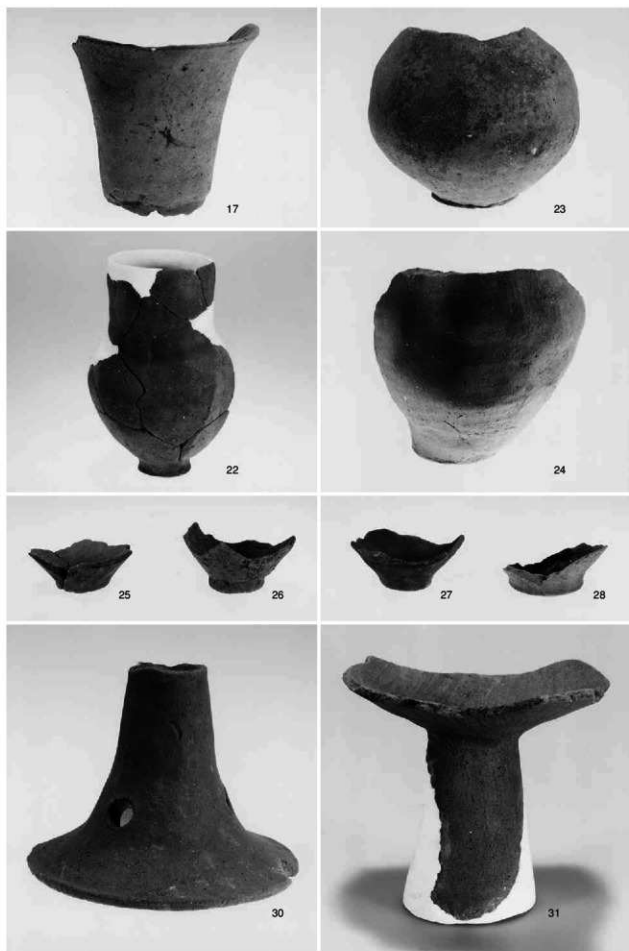


溝1 遺物出土状況 (北東より)

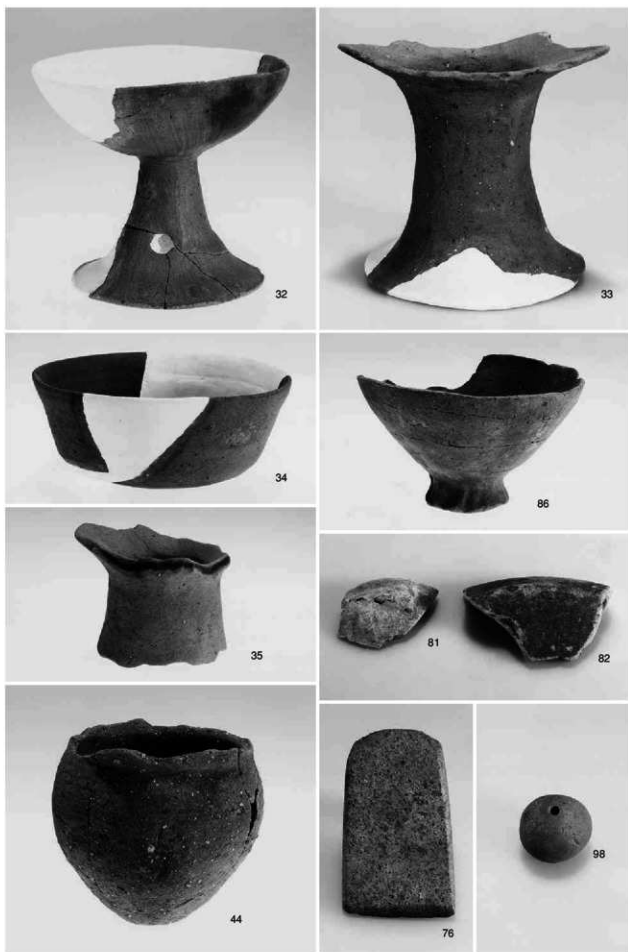


溝1 出土遺物①

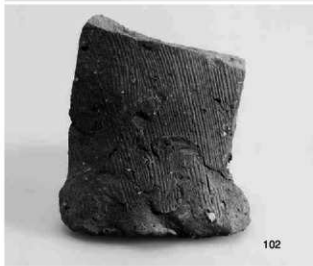


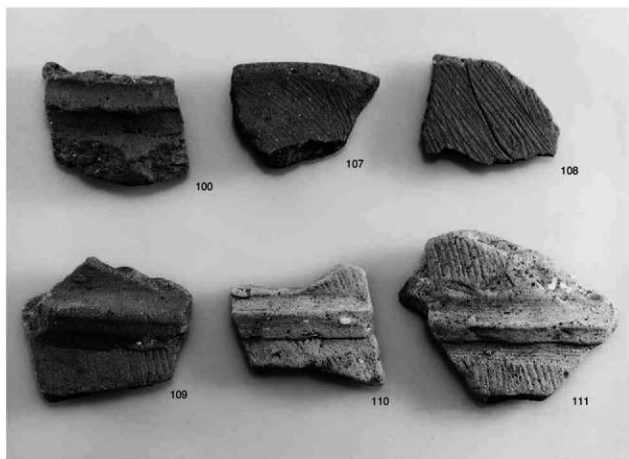


溝1出土遺物③

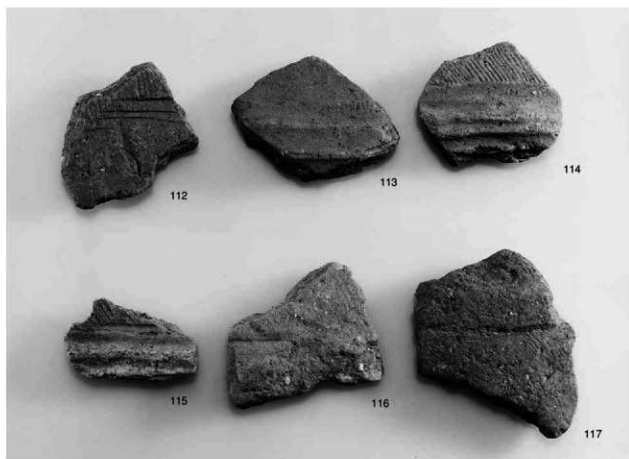


溝1出土遺物④・包含層・石組裏込め出土遺物





平塚古墳埴輪②



平塚古墳埴輪③



トレンチ全景 (南より)



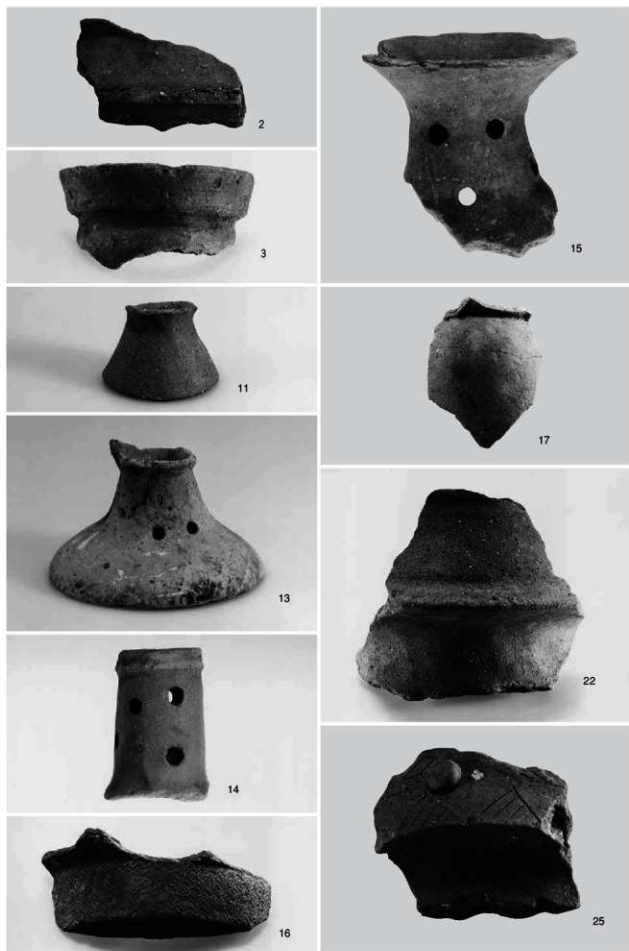
トレンチ西壁 (南東より)



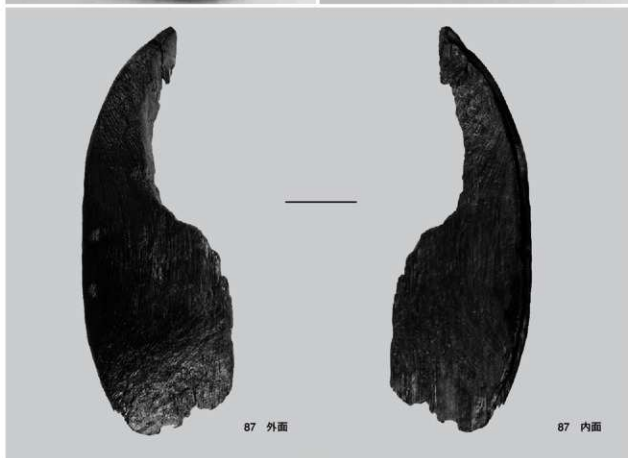
トレンチ東壁 (南西より)



木製蓋出土状況 (北東より)









上層遺構（北より）



調査区南壁（北東より）



池田1号墳検出状況(北より)



池田1号墳全景(北東より)



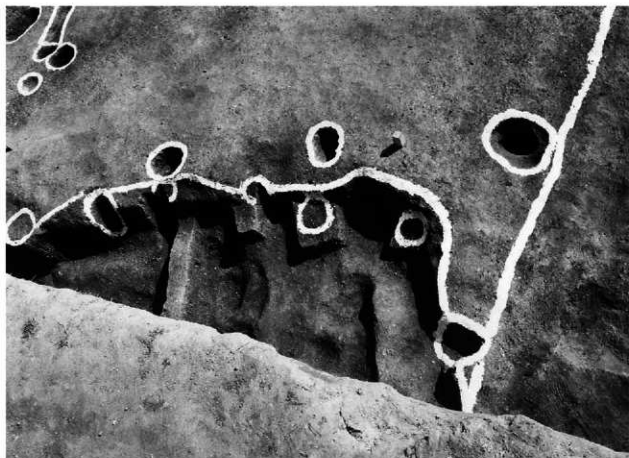
下層遺構（北より）



竪穴住居SB3070（北東より）



竪穴住居SB3070遺物出土状況(北西より)



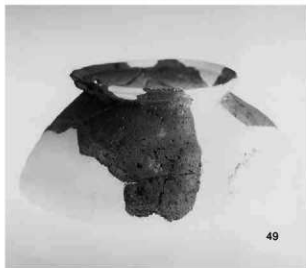
方形状土坑SX3055(西南より)



池田1号墳出土土器



竪穴住居 SB3070出土土器①

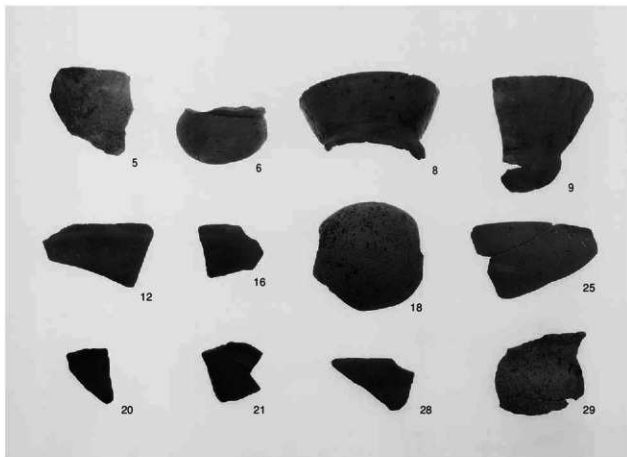




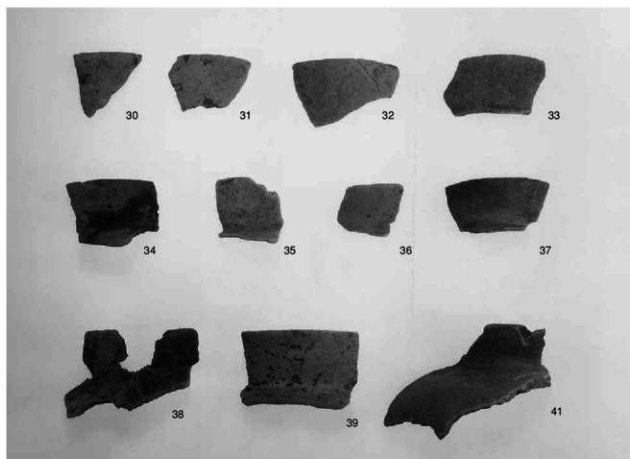
竪穴住居SB3070出土③ (用途不明土製品)



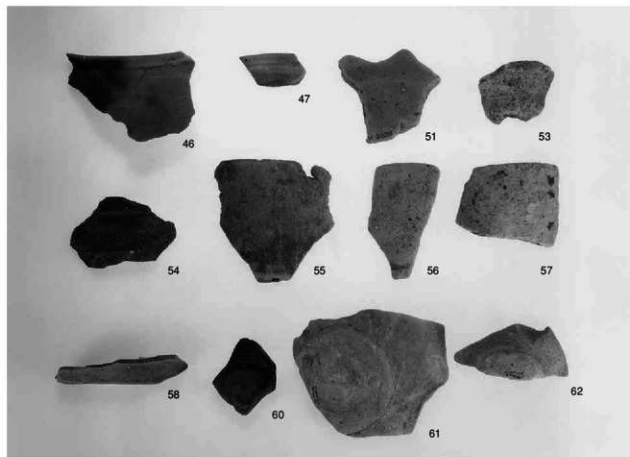
不明鉄製品 (包含層出土)



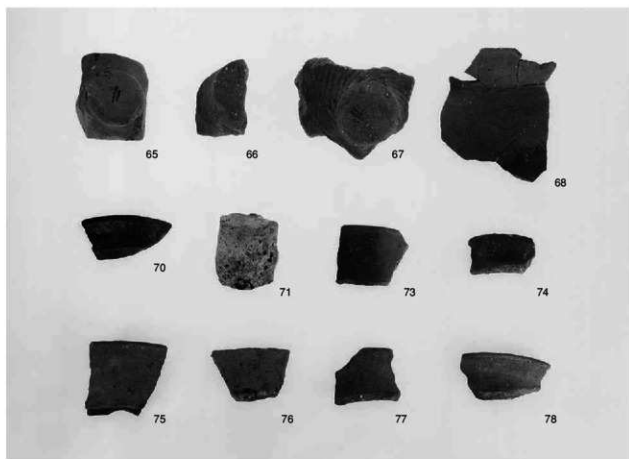
竪穴住居SB3070出土土器④



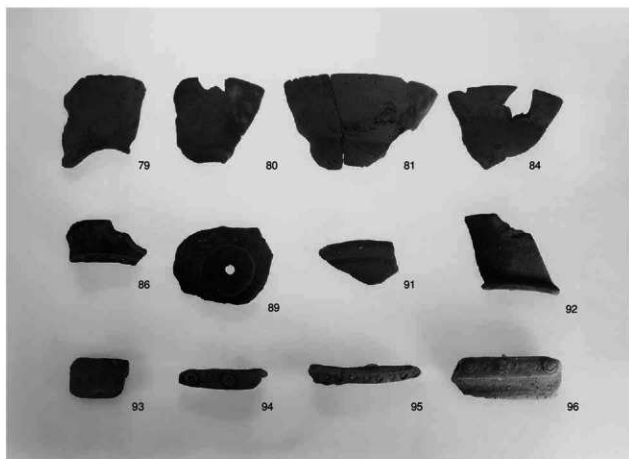
豎穴住居SB3070出土土器⑤



豎穴住居SB3070出土土器⑥



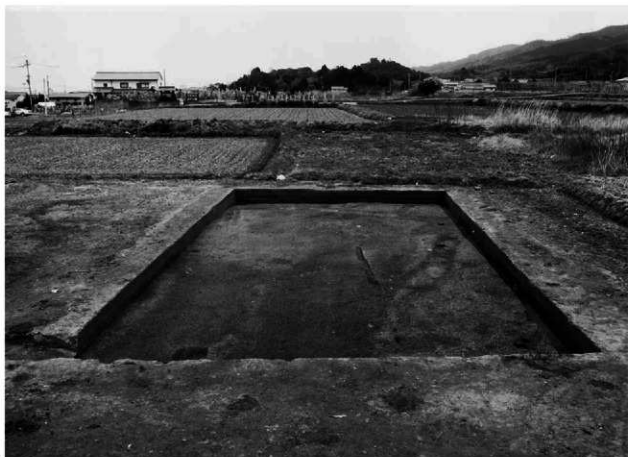
下層遺構出土土器



包含層出土土器



調査区全景①(素掘溝完掘状況 南より)



調査区全景②(遺構検出状況 南より)



調査区全景③ (遺構完掘状況 南より)



調査区全景④ (遺構完掘状況近景 南より)



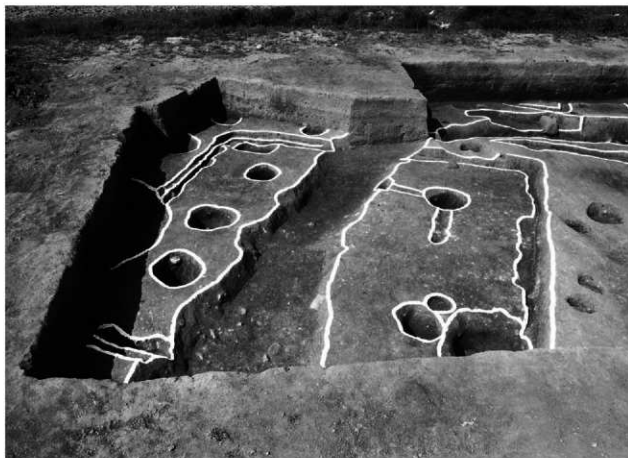
溝3・竪穴住居1検出状況(南西より)



溝3土器出土状況(南東より)



竪穴住居1堆積状況(南西より)



竪穴住居1完掘状況(南より)



溝1・2堆積状況(南西より)



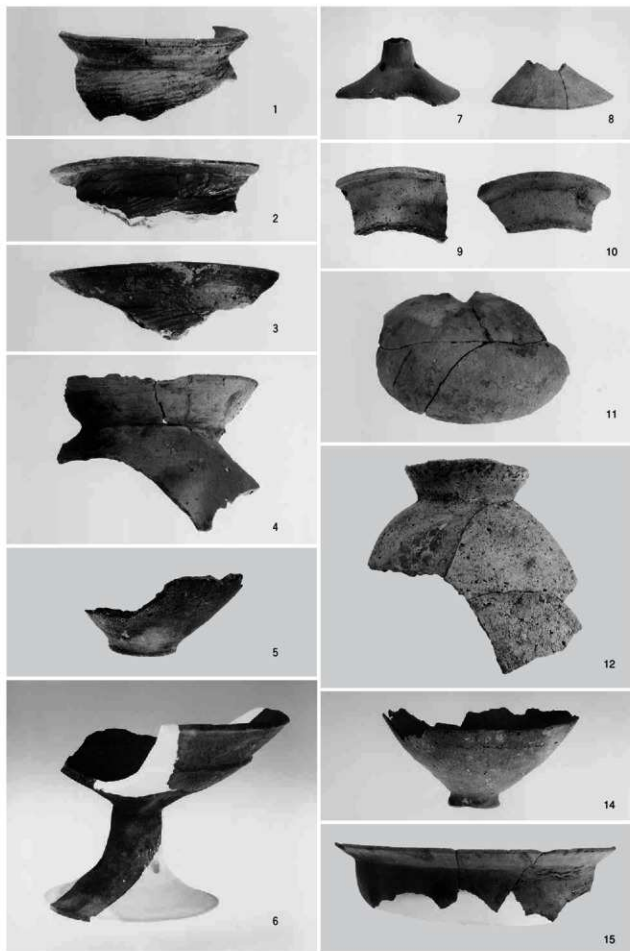
溝5 鉤出土状況(北より)



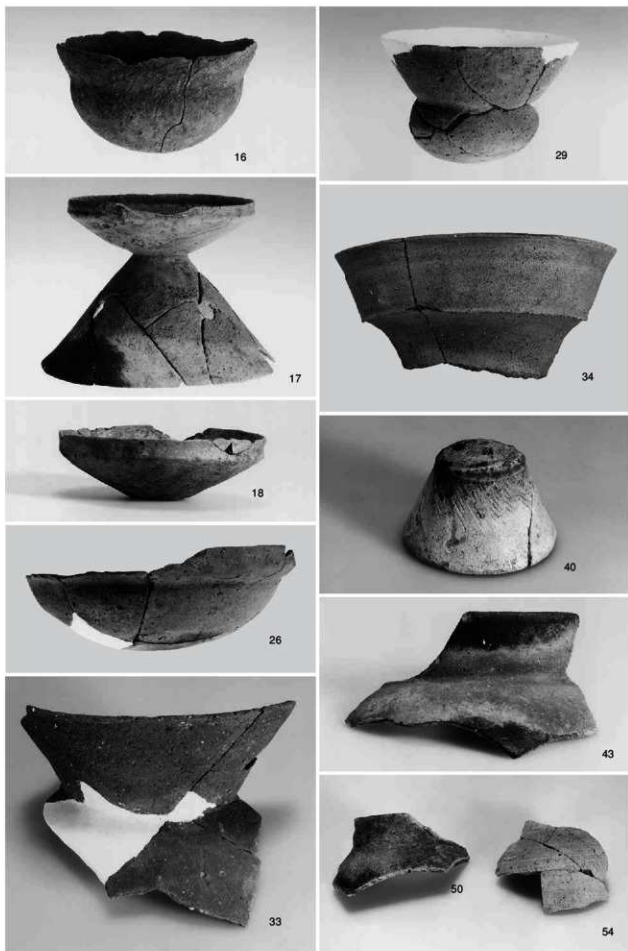
土坑3堆積状況(南より)



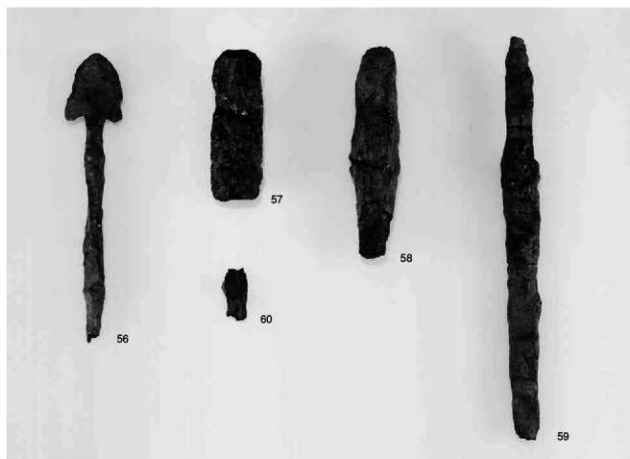
土坑8土器出土状況(南西より)



土坑3 出土遺物



土坑 8、竪穴住居 1、溝 1～3 出土遺物



出土鉄器



作業風景（後方の森は渋谷向山古墳）



矢塚古墳全景 (左上が北)



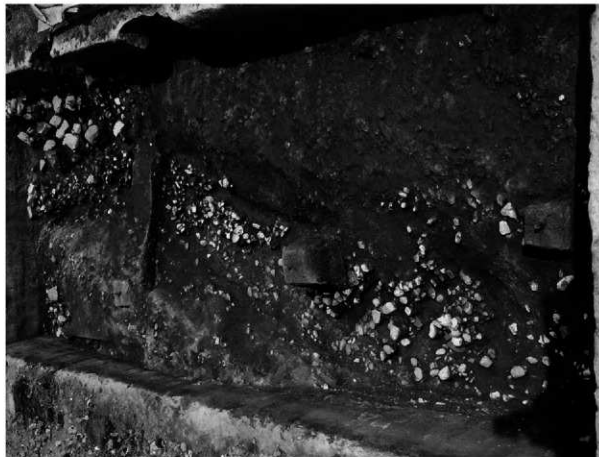
矢塚古墳全景 (西南より)



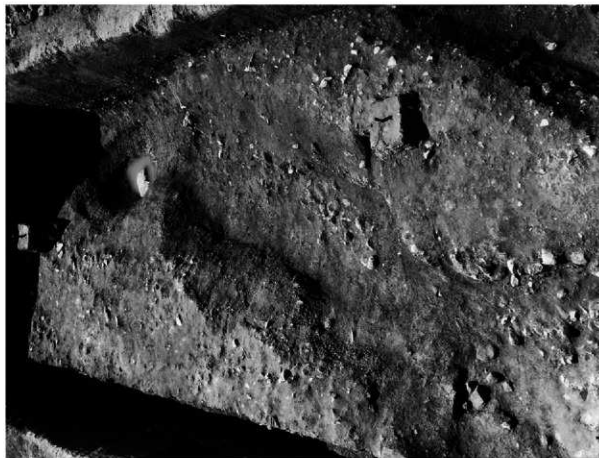
矢塚古墳全景 (南より)



矢塚古墳全景 (北西より)



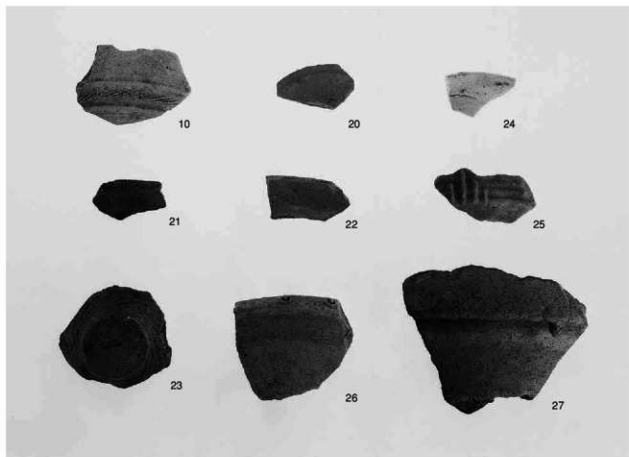
土器出土状況(西より)



遺構完掘状況(東より)

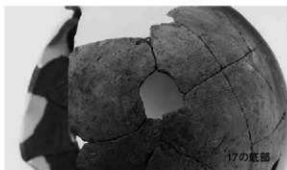


溝SD01土器出土状況



包含層出土土器①





報 告 書 抄 録

書 名	桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編 著 者 名	橋本輝彦 福辻淳 丹羽恵二 木場佳子 清水哲 奥田尚							
編 集 機 関	桜井市教育委員会 文化財課							
所 在 地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東新堂遺跡 第9次	桜井市 東新堂349-1他	292061	11-D-487	34° 31' 07"	135° 50' 55"	20030507~ 20030523	90㎡	店舗建設に伴う調査
能登遺跡 第2次	桜井市 河西24	292061	14-B-156	34° 30' 15"	135° 51' 16"	20030806~ 20030826	36㎡	個人住宅建築に伴う調査
大藤原京関連 遺跡第42次	桜井市 西之宮261-3	292061	14-C-576	34° 30' 39"	135° 49' 20"	20030901~ 20030905	27㎡	個人住宅建築に伴う調査
纏向遺跡 第135次	桜井市 箸中540-1・13	292061	11-D-487	34° 32' 13"	135° 51' 01"	20030801~ 20030820	30㎡	青空駐車場造成に伴う調査
纏向遺跡 第136次	桜井市 箸中506-1	292061	11-D-487	34° 32' 18"	135° 51' 07"	20040205~ 20040309	65㎡	農業用倉庫建築に伴う調査
纏向遺跡 第137次	桜井市 箸中515-1	292061	11-D-487	34° 32' 17"	135° 51' 02"	20040206~ 20040331	188.5㎡	個人住宅建築に伴う調査
纏向遺跡 第138次	桜井市 箸中515-3	292061	11-D-487	34° 32' 18"	135° 51' 03"	20040308~ 20040331	216.5㎡	個人住宅建築に伴う調査
矢塚古墳	桜井市 東田126-2他	292061	11-D-485	34° 32' 35"	135° 50' 12"	20040314~ 20040329	—	範囲確認調査
纏向遺跡 第46次	桜井市 556-2他	292061	11-D-487	34° 32' 18"	135° 51' 00"	19860402~ 19860518	60㎡	個人住宅建築に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物
東新堂遺跡第9次	集落遺跡	柱穴	瓦器・土師皿・須恵器・石鏃
能登遺跡第2次	集落遺跡	溝、柱穴	土師器
大藤原京関連遺跡第42次	都城		瓦器・土師皿・須恵器
纏向遺跡第135次	集落・古墳(平塚古墳)	溝	埴輪・土師器・須恵器
纏向遺跡第136次	集落遺跡	旧河道	木製容器蓋・土師器
纏向遺跡第137次	集落・古墳(池田1・2号墳)	竪穴住居、古墳	土師器・須恵器
纏向遺跡第138次	集落・古墳	土坑、竪穴住居、方形周溝墓	土師器・鏃
矢塚古墳	古墳	—	—
纏向遺跡第46次	集落遺跡	溝	須恵器・土師器

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 25集

桜井市

平成15年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 平成16年3月31日

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464

矢 塚 古 墳

